

国土館大学 地理学報告

No. 33 年刊 2025年3月

- 加藤幸治 「中標津モデル」とその現状に関する覚書
内田順文 音楽と関連した場所イメージの記号化について（続）
—1992-93年調査結果の分析と2022-23年調査結果との比較—
小山拓志・氏田洵悠 九重連山稲星山周辺における地温環境
藤岡英之 政府統計にみるコロナ禍前後における葬儀業の状況

2023年度 国土館大学大学院 地理・地域論コース 修士論文要旨

2023年度 国土館大学 地理・環境コース 卒業論文題目



Geographical Report of Kokushikan University, No.33.

Department of Geography & Environmental Studies,
Kokushikan University

「中標津モデル」とその現状に関する覚書

加藤 幸治

本学地理・環境コース 教授

キーワード：中標津町、北海道、中標津モデル、中心地、人口移動

I. はじめに

中標津町は北海道東部・根室振興局管内にある、人口2万2千余人（2024年11月末現在）の町である。

北海道において、道内人口が1997年から減少に転じた中であっても、2000年代前半（2000～05年）も人口増加を続けた数少ない市町の一つが中標津町であった（図1）。「札幌一極集中」が叫ばれる中、大都市とはいえない同町において「成長」がみられた背景には「中標津モデル」と名付けた特徴（次章で詳述）があった。

「中標津モデル」に関しては、新聞連載記事（北海道新聞社編、2022に集約）や雑誌記事（クオリティ編集部、2020）、HP記事（松本、2023）に、さらには大衆誌的なもの（昼間・鈴木、2021）にも取り上げられてきた。これらの中に

は「中標津モデル」に関して、若干の「誤解」が含まれる場合もある。「中標津モデル」への注目の契機は人口増加にあった。とはいえ、もっとも注目すべき点・核心はそこではない。

ただ、そうした「誤解」は、「中標津モデル」の公表が日本経済新聞の解説記事「やさしい経済学」における連載「サービス経済化と地域格差」の第8回目（日本経済新聞、2019年5月19日付）においてであり、限られた字数による説明だったためということもあろう。そこで、あらためて「中標津モデル」について説明しておきたい。これが本稿の第一の目的である。

他方で、本稿には関連する別の目的もある。それは、中標津町の人口も2010年代に入ってから減少に転じたという現状に関わる（図3参照）。こうした現状が「中標津モデル」の意義や本質を揺るがすものではない。この点を中標津町のおかれた現状を確認しながらみていく。これが本稿の第二の目的である。

以下、まずⅡ章において、「中標津モデル」について、あらためて説明しておく。続くⅢ章では中標津町の人口について、Ⅳ章では中標津町を取り巻く商業環境について、Ⅴ章では医療受診行動について確認していく。それらを通じて「中標津モデル」の現状を確認し、その不変性について述べていく。

Ⅱ. 中標津モデルとは

まずは「中標津モデル」について言及した日本経済新聞の記事（日本経済新聞、2019年5月19日付）を引用しておく。

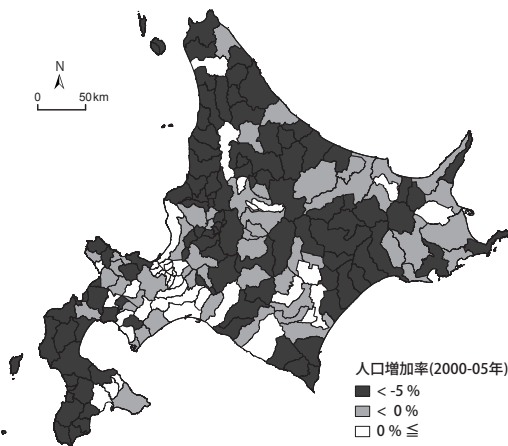


図1 北海道における2000～2005年の人口増加率
資料：国勢調査

中標津は人口2万数千の北海道東部の町です。北海道全体の人口が減少し、ほとんどの市区町村で人口減少がみられた2000～05年においても、人口増加した町です。

当町の中心部近くには地場資本の大型商業施設が立地し、その周囲には商業・サービス業のロードサイド型集積が形成されています。その中には「地域センター病院」である町立病院も含まれ、周辺市町にはない「選択の幅」の魅力から集客力を持っています。また、そうした魅力から、町内外の酪農家（のヘルパーや「若夫婦」）、水産加工場で働く人々もが中心部に住まう町となっています。根室総合振興局管内の自衛隊員や教員の中にも、退職後の住宅を中標津町内に求める人がみられます。

商店・サービス施設の数を決して多くはないものの、コンパクトで魅力的な中標津町の商業・サービス業集積が、当町を「中心地であるとともにベットタウン」というユニークな存在たらしめています。「地方創生」の戦略とされる「小さな拠点」のモデルともいえるべき存在ではないでしょうか。

(日本経済新聞、2019年5月19日より一部抜粋)

これを模式化すれば図2のようにまとめられる。

商業・サービス業の集積には、大型商業施設・ロードサイド型施設や病院の他にも、中標津町やその周辺地域の経済基盤となっている農業を支える機能、とりわけ大型農業機械の販売や修理を担う企業・業種の集積も含まれる。さらには、町内あるいは周辺地域の建設需要に応える建設業やその出張にも多く利用される宿泊業の集積もみられる。これらの立地は中標津町が交通の要衝にあることに起因する。

こうした周辺地域の中心地としての性格が、日常生活圏の中心、すなわち周辺の買物圏の中心として、また医療圏の中心として、さらには通勤・通学圏の中心として、周辺地域の人々を日常的に中標津町へと誘引している。ただ、こうした状況は中心地において広く認められる。むしろ、そうした結節地こそを中心地と呼ぶのだとさえいえる。

中標津町はかような日常生活圏の中心地として存立するだけではない。経済機能の集積・就業機会の集積が周辺地域に住む人々を定住人口として引き寄せている。と同時に、町内から周

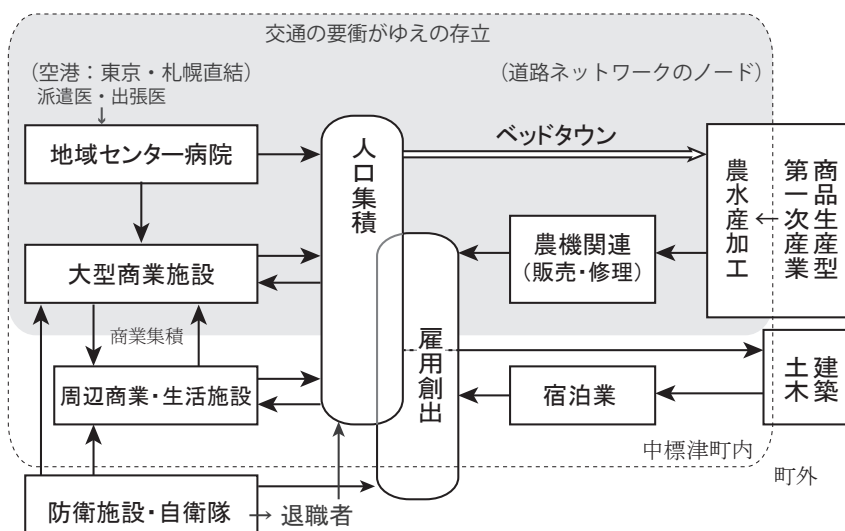


図2 中標津町における人口とサービスの集積の形成

辺地域へと流出する人口を引き留め、人口数を押し上げている。こうした状況は「都心回帰」現象として知られ、現在、大都市都心部において広く認められるものである。中標津町は、大都市と同じような「都心回帰」がみられる拠点となっていると評価できる。

一般に、「都心回帰」した人口の多くは、その中心地内で就業する。いわば「都心部であっても職住近接を果たした暮らし」を実現するのが通例である。しかしながら中標津町においては、そうした就業とともに、中心地に住みながらも周辺地域へ通勤・通学する人々の存在が認められる。その中心は「町内外の酪農家(のヘルパーや「若夫婦」、水産加工場で働く人々」に代表される酪農業の従事者や水産加工業やその他の製造業の就業者であり、また、それら以外の産業に従事する通勤者である。

こうした中心地からの通勤者は、大都市都心部においてはほとんど認められない。そうした通勤が、通勤者の居住地地代負担を禁止的に高いものとするからである。それに対して、中標津町から町外への通勤・通学者率は1990年に2.3%であったものが、2000年には6.0%、2010年には7.4%と漸増してきている。中心地であるとともに、周辺地域の就業者の供給地＝「ベッドタウン」としても機能している。これこそが中標津町の特徴である。

人口減少社会にあって、こうした機能を果たす中心地が形成されれば、それは「都心回帰」と職住近接が果たされた「コンパクトシティ」として存立するだけでなく、周辺地域の通勤・通学者の拠点でもある中心地となる。その先駆をなすと目されるのが中標津町であり、これこそが「中標津モデル」の核心である。

「中標津モデル」は、近代以前の「城郭都市」における活動のイメージと重なるものである。城郭都市内住民＝都市内の労働者は、城壁の外で農業や牧畜を行うことがあっても、夜間は城郭内に戻ってくる。こうした夜間人口の集積も

あることから、商業・サービス活動が存立しやすい。集積が存立のみならず、活動の活発化を促し、富の集積へと繋がる。それが商人や行商といった来訪者達を誘引して、それら活動をますます活発化させ、商業・サービス業の集積をさらに促進する。

しかも、こうした集積地内ではエネルギー供給を、コスト面でも環境負荷の面でも効率的に行いやすいというメリットもある。「中標津モデル」には、こうした拠点の先進例といえるかもしれないとの含意もある。

こうした本質に変化がなければ、その意義にも変化はない。人口拡大という「成長」が着目の契機ではあったが、そこが注目すべき点ではなく、「中標津モデル」の核心は「中心地であるとともにベッドタウン」という点にこそある。

Ⅲ. 中標津町における近年の人口動向とその背景

1. 近年における人口減少の背景

とはいえ、中標津町においても、2012年をピークに人口減少し始めている(図3)。それは中標津町の中心性・拠点性が低下したことの証左だともみなしうる。そこで2010年代以降の人口減少の詳細について確認していく。

2010年代以降における人口減少の理由は、人口の自然減(出生数－死亡数でのマイナス)、社会減(転入数－転出数でのマイナス)がともに進んでいることにある(図4)。なかでも近年においては自然減によるところが大きい。というのも、人口の社会減は年による変化はあるものの、人口増加がみられた2000年代においても、一定数みられるものであった。2000年代では、それを自然増加がカバーしていた。しかしながら、2014年度を最後に、中標津町では自然増加がみられなくなったからである。

この自然減は死亡数の増加以上に出生数の低下によるところが大きい。中標津町における年

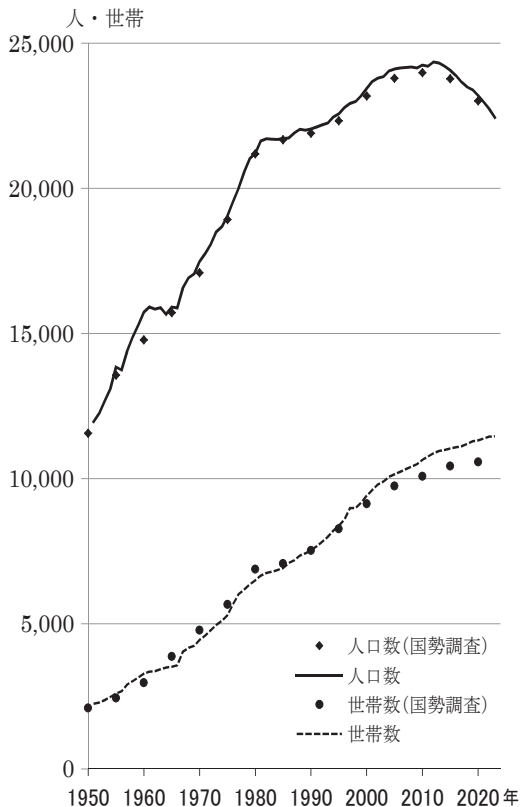


図3 中標津町の人口

資料：中標津町『町勢要覧 資料編』

齢（5歳階級）別人口の推移に示されているように、高齢者（65歳以上）層ではすべての階級において人口増加がみられる（表1・2）。それに対して、0～4歳人口が2010年代前半（2010年と2015年の比較）で120人減、2010年代後半（2015年と2020年の比較）で238人減となったことに象徴されるように、年少人口の低下、とりわけ出生直後世代人口の低下によって、死亡者数をカバーできていない形となっている。

もちろん、これには出生者の親世代の減少も影響する。25～29歳から40～44歳のいわゆる子育て世代は2010年代前半に576人減、2010年代後半では751人減となっている。これら世代の流出（社会減）が出生数の減少につながっているわけである。

ただ、こうした出生数の減少を評価する上で

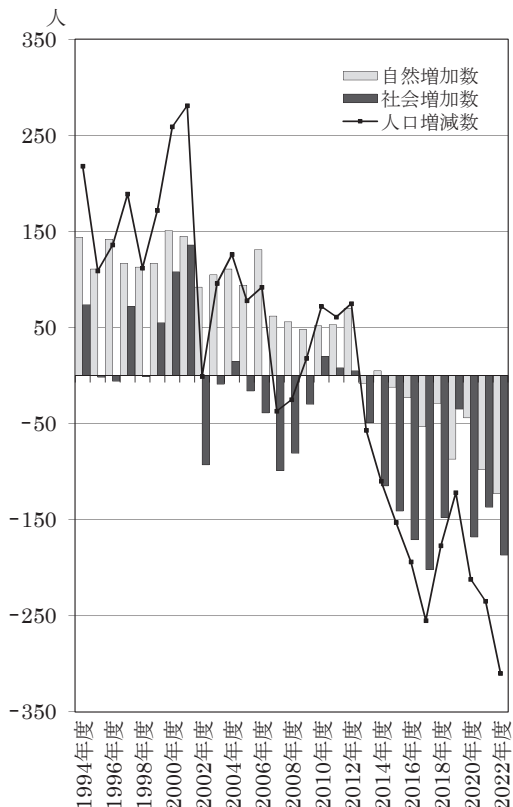


図4 中標津町の人口動態（1994～2022年度）

資料：中標津町『町勢要覧 資料編』

いくつかの注意を要する点がある。第一には、一般論ではあるものの、こうした傾向が人口減社会にある日本全体の傾向であって、それとの共通点・相違点を確認する必要があるということである。

第二には、中標津町の年齢階級別人口の増減率を北海道全体と比べた場合にみられる特徴に関してである。両者を比較して、北海道の増加率に比べて中標津町の増加率が高い階級に網掛けしてみると、その網掛けが右下がりに連なる世代がある（表3）。例えば、2000年に0～4歳、つまり1996～2000年生まれで、2020年に15～19歳になっている世代である。それ以外でも、2020年に40～44歳（1971～75年生まれ）の世代、65～69歳（1946～1950年生まれ）の世代、70～74歳（1941～1945年生まれ）の世代に

表1 中標津町における年齢（5歳階級）別人口の推移

	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年	2015年	2020年
0～4歳	2,007	1,731	1,406	1,291	1,294	1,337	1,220	1,100	862
5～9歳	1,986	1,938	1,648	1,386	1,266	1,234	1,339	1,160	1,044
10～14歳	1,682	1,908	1,851	1,632	1,367	1,263	1,220	1,303	1,115
15～19歳	1,509	1,434	1,573	1,509	1,418	1,221	1,134	1,069	1,108
20～24歳	1,498	1,415	1,323	1,410	1,417	1,214	930	799	776
25～29歳	2,164	1,714	1,580	1,581	1,743	1,687	1,423	1,167	1,074
30～34歳	2,097	2,020	1,674	1,637	1,672	1,843	1,810	1,529	1,213
35～39歳	1,623	1,956	1,961	1,655	1,659	1,728	1,885	1,758	1,498
40～44歳	1,518	1,530	1,873	1,925	1,637	1,667	1,695	1,783	1,701
45～49歳	1,345	1,430	1,445	1,841	1,883	1,601	1,594	1,633	1,785
50～54歳	1,084	1,256	1,382	1,427	1,801	1,869	1,572	1,596	1,591
55～59歳	772	1,015	1,184	1,324	1,376	1,787	1,826	1,525	1,557
60～64歳	632	766	982	1,185	1,329	1,334	1,689	1,766	1,446
65～69歳	485	589	714	932	1,154	1,258	1,286	1,636	1,697
70～74歳	349	444	551	636	859	1,061	1,188	1,226	1,520
75～79歳	241	294	374	454	564	773	952	1,060	1,106
80～84歳	114	162	231	286	388	466	646	821	906
85歳以上	81	73	148	215	328	447	573	748	922

資料：国勢調査

表2 中標津町における5歳階級別人口の増減数

	1980年と 1985年と の比較	1985年と 1990年と の比較	1990年と 1995年と の比較	1995年と 2000年と の比較	2000年と 2005年と の比較	2005年と 2010年と の比較	2010年と 2015年と の比較	2015年と 2020年と の比較
0～4歳	-276	-325	-115	3	43	-117	-120	-238
5～9歳	-48	-290	-262	-120	-32	105	-179	-116
10～14歳	226	-57	-219	-265	-104	-43	83	-188
15～19歳	-75	139	-64	-91	-197	-87	-65	39
20～24歳	-83	-92	87	7	-203	-284	-131	-23
25～29歳	-450	-134	1	162	-56	-264	-256	-93
30～34歳	-77	-346	-37	35	171	-33	-281	-316
35～39歳	333	5	-306	4	69	157	-127	-260
40～44歳	12	343	52	-288	30	28	88	-82
45～49歳	85	15	396	42	-282	-7	39	152
50～54歳	172	126	45	374	68	-297	24	-5
55～59歳	243	169	140	52	411	39	-301	32
60～64歳	134	216	203	144	5	355	77	-320
65～69歳	104	125	218	222	104	28	350	61
70～74歳	95	107	85	223	202	127	38	294
75～79歳	53	80	80	110	209	179	108	46
80～84歳	48	69	55	102	78	180	175	85
85歳以上	-8	75	67	113	119	126	175	174

資料：国勢調査

表3 中標津町における5歳階級別人口の増減率(%)

	1980年 ～85年	1985年 ～90年	1990年 ～95年	1995年 ～00年	2000年 ～05年	2005年 ～10年	2010年 ～15年	2015年 ～20年
0～4歳	-13.8	-18.8	-8.2	0.2	3.3	-8.8	-9.8	-21.6
5～9歳	-2.4	-15.0	-15.9	-8.7	-2.5	8.5	-13.4	-10.0
10～14歳	13.4	-3.0	-11.8	-16.2	-7.6	-3.4	6.8	-14.4
15～19歳	-5.0	9.7	-4.1	-6.0	-13.9	-7.1	-5.7	3.6
20～24歳	-5.5	-6.5	6.6	0.5	-14.3	-23.4	-14.1	-2.9
25～29歳	-20.8	-7.8	0.1	10.2	-3.2	-15.6	-18.0	-8.0
30～34歳	-3.7	-17.1	-2.2	2.1	10.2	-1.8	-15.5	-20.7
35～39歳	20.5	0.3	-15.6	0.2	4.2	9.1	-6.7	-14.8
40～44歳	0.8	22.4	2.8	-15.0	1.8	1.7	5.2	-4.6
45～49歳	6.3	1.0	27.4	2.3	-15.0	-0.4	2.4	9.3
50～54歳	15.9	10.0	3.3	26.2	3.8	-15.9	1.5	-0.3
55～59歳	31.5	16.7	11.8	3.9	29.9	2.2	-16.5	2.1
60～64歳	21.2	28.2	20.7	12.2	0.4	26.6	4.6	-18.1
65～69歳	21.4	21.2	30.5	23.8	9.0	2.2	27.2	3.7
70～74歳	27.2	24.1	15.4	35.1	23.5	12.0	3.2	24.0
75～79歳	22.0	27.2	21.4	24.2	37.1	23.2	11.3	4.3
80～84歳	42.1	42.6	23.8	35.7	20.1	38.6	27.1	10.4
85歳以上	-9.9	102.7	45.3	52.6	36.3	28.2	30.5	23.3

資料：国勢調査

についても同様のことを指摘できる。

これら世代は全国的にみても「団塊の世代」や「団塊ジュニア」と呼ばれるベビーブーム世代にあたる。ただ中標津町では、それら世代の増加が北海道全体よりも明らかに多く、全国的には認められない『「団塊ジュニア」のジュニア』、つまりは「第三次ベビーブーム」世代とも呼ぶべき世代(1996～2000年生まれ)の存在が認められる。ベビーブームは、各世代が親世代となるに至る間隔、おおよそ25年間隔で生じている。その間隔が維持されているとするならば、2021年から、次のベビーブーム(「第四次ベビーブーム」)世代の生年にあたることになる。

もっとも「第三次ベビーブーム」が全国的に指摘されることがないように、中標津町に「第四次ベビーブーム」の到来を想定するのは非現実的だろう。したがって、ここで指摘すべきは

世代による「波」が存在するという点であり、その「波」の高低という動きにも一定の考慮すべき点があるということである。

さらに第三には、上記のような世代間の「波」を意識して、出生コーホートに注目してみた場合の特徴である。一定年齢以上の特定世代の人口(例えば2015年における10～14歳人口)には若干の自然減少(つまりは死亡)があっても、その世代が自然増加すること(例えば10歳の子供が出生するという点)はありえない。つまり、その世代の増減は社会増減によって決まる。したがって、人口の流入・流出が活発な世代ほど、その増減が大きくなる。こうした点に注目して、特定世代(出生コーホート)に注目して分析するのが、もっとも一般的なコーホート分析である。そこで節をあらため、コーホート分析から中標津町の転出入の動向についてみていく。

2. コーホート分析からみた中標津町の人口の動向

コーホート分析の視点からみると、中標津町においては期首年（例えば1995年）において20～24歳である世代（これらは2000年においては25～29歳になっている）の増加、すなわち若者層の町内への流入超過が一貫して認められる（表4）。25～29歳世代においても1990年を除けば常に増加している。

これら世代はどこから流入してくるのであろうか。20～24歳世代の転入超過がもっとも大きく、30～34歳世代においてさえも流入超過がみられた2000年の国勢調査結果に関して、オーダーメイド集計によって得られたデータから確認しておく（表5・6）。表5の25～29歳世代の転入者が1995年における20～24歳世代（表6のそれ）となる。なおデータは10人刻みとなっていることもあって、表4と表5・6とは整合しない。

転入者（表5）は札幌市からのそれが最も多

く（80人）、釧路市と別海町からの転入者がそれに次ぐ（70人）。とはいえ、この世代においては札幌市への流出者（1995年の20～24歳世代）も多く（210人）、札幌市との間においては転出超過（-130人）となっている（表6）。釧路市との間では転入超過（30人）にある。それ以上に転入超過が大きいのが別海町との間においてである（50人）。根室市からも転入超過（20人）で、根室振興局管内からの転入超過は70人になっている。

釧路市・帯広市との間においては、一つ下の5歳階級（1995年に15～19歳の世代）では転出超過となっている。札幌市との間でも転出超過にあり、主に高校・大学・専門学校への進学や就職にともなう上位都市への若者世代の流出と、卒業にともなう帰郷というような人口移動があることがうかがわれる。ただ、これら世代の上位都市からの転入はあっても、上位都市の間では総じて転出超過にある。とりわけ定年前後世代においてその傾向が強い（表6）。高齢

表4 中標津町における出生コーホート別人口増減数（％）

期首年 年齢	1985年と 1990年と の比較	1990年と 1995年と の比較	1995年と 2000年と の比較	2000年と 2005年と の比較	2005年と 2010年と の比較	2010年と 2015年と の比較	2015年と 2020年と の比較
0～4歳	-83	-20	-25	-60	2	-60	-56
5～9歳	-87	-16	-19	-3	-14	-36	-45
10～14歳	-335	-342	-214	-146	-129	-151	-195
15～19歳	-111	-163	-92	-204	-291	-335	-293
20～24歳	165	258	333	270	209	237	275
25～29歳	-40	57	91	100	123	106	46
30～34歳	-59	-19	22	56	42	-52	-31
35～39歳	-83	-36	-18	8	-33	-102	-57
40～44歳	-85	-32	-42	-36	-73	-62	2
45～49歳	-48	-18	-40	-14	-29	2	-42
50～54歳	-72	-58	-51	-14	-43	-47	-39
55～59歳	-33	1	5	-42	-98	-60	-79
60～64歳	-52	-50	-31	-71	-48	-53	-69
65～69歳	-38	-78	-73	-93	-70	-60	-116
70～74歳	-70	-97	-72	-86	-109	-128	-120
75～79歳	-63	-88	-66	-98	-127	-131	-154

資料：国勢調査

表5 中標津町における年齢別転入者の5年前の常住地(2000年)

	常住者	転入	道内他 市町村 から								他県 から	国外 から
			札幌市	釧路市	帯広市	根室市	別海町	標津町	羅臼町			
総数	21,430	3,140	2,680	290	320	100	150	480	280	140	460	10
5～9歳	1,150	150	140	10	0	0	10	10	30	10	10	0
10～14歳	1,240	100	90	0	10	10	20	20	10	10	20	0
15～19歳	1,330	260	250	10	50	0	10	70	20	20	10	0
20～24歳	1,420	460	420	90	50	0	20	70	40	40	50	0
25～29歳	1,780	620	480	80	70	30	20	70	50	0	150	0
30～34歳	1,570	390	330	60	60	20	10	60	20	20	60	0
35～39歳	1,580	320	260	10	10	10	40	70	40	10	60	0
40～44歳	1,610	190	170	20	40	10	20	10	10	0	20	0
45～49歳	1,900	220	190	10	40	20	10	20	10	20	30	0
50～54歳	1,820	140	120	10	10	10	10	10	10	0	20	0
55～59歳	1,420	130	90	10	0	10	10	20	10	10	40	10
60～64歳	1,380	80	70	0	0	0	0	40	20	0	10	0
65～69歳	1,180	30	30	0	0	0	0	10	10	10	10	0
70～74歳	820	30	30	10	0	0	0	10	10	10	0	0
75～79歳	530	30	30	0	0	0	10	20	0	0	0	0
80～84歳	430	20	20	0	0	0	0	0	10	0	10	0
85歳以上	290	10	10	0	0	0	0	0	10	0	0	0

注：数値は10人刻みで、四捨五入で集計。0は0または4人以下。
資料：国勢調査(オーダーメイド統計)

表6 1995年における中標津町常住者の年齢別転出者(2000年)

	常住者	転出	道内他 市町村 へ								他県 へ	国外 へ
			札幌市	釧路市	帯広市	根室市	別海町	標津町	羅臼町			
総数	21,310	3,910	2,700	890	390	170	30	230	130	50	320	0
5～9歳	1,210	320	190	50	20	20	0	20	10	0	10	0
10～14歳	1,250	280	110	30	20	0	0	10	0	0	0	0
15～19歳	1,410	200	320	130	120	10	0	10	0	0	20	0
20～24歳	1,530	390	440	210	40	20	0	20	40	10	140	0
25～29歳	1,440	480	270	60	40	10	10	60	20	10	20	0
30～34歳	1,510	470	290	90	20	20	0	40	30	0	30	0
35～39歳	1,480	440	220	40	10	10	0	40	20	0	0	0
40～44歳	1,660	370	210	70	60	0	0	0	10	0	30	0
45～49歳	1,840	270	120	30	10	0	0	0	0	10	40	0
50～54歳	1,920	200	230	90	30	40	0	10	10	10	10	0
55～59歳	1,430	110	110	40	10	20	10	10	0	0	30	0
60～64歳	1,360	110	50	0	0	20	0	0	0	0	0	0
65～69歳	1,210	90	60	10	10	0	0	0	0	0	0	0
70～74歳	800	60	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0
75～79歳	540	30	50	30	0	0	0	10	0	0	0	0
80～84歳	420	60	20	10	0	0	0	0	0	0	0	0
85歳以上	310	60	30	10	0	0	0	0	0	0	0	0

注：数値は10人刻みで、四捨五入で集計。0は0または4人以下。
資料：国勢調査(オーダーメイド統計)

者層の転入に特徴付けられる北海道の「札幌一極集中」（加藤、2011参照）の特徴がここからもうかがわれる。

こうした動きについて、年齢階級別グラフをみることによって確認しておこう（図5）。図5は1995年の年齢階級別人口数が変化なく5年後になったと想定した場合（図5における1995年スリップ）と実際の2000年における年齢階級別人口（図5における2000年）を比較するための図である。前者が後者より明らかに上回っている（グラフの折れ線の間隙のある）世代では、人口移動（転出超過）による減少がみられる。反対に後者が前者を上回っていれば、その世代に多くの転入超過があったと認められる。

図5に明らかなように、1995年と2000年との比較において、15～19歳世代で大きな転出超過、20～24歳世代（1995年に15～19歳だった世代）でわずかな転出超過が認められる。これに対して2000年における25～29歳世代（1995年に20～24歳だった世代）では大きな転入超過が認められる。また30～34歳において、また35～39歳世代においては僅かながらではある

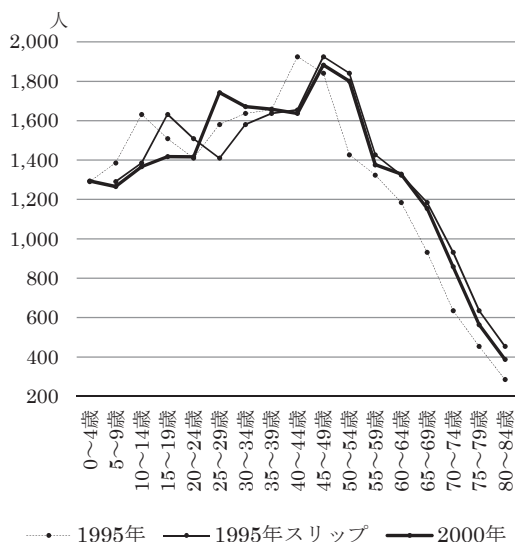


図5 中標津町における年齢別人口の変化 (1995～2000年)

資料：国勢調査

ものの、これら世代での転入超過が認められる。しかも、この転入超過は帰郷者の数だけでは不足する超過となっている。

これは、根室市を含む根室振興局管内（根室地域）の転入超過によるところが大きい。根室地域からはほぼ全ての世代において転入超過が認められる。表5と6から転出入数を計算すれば、中標津町と根室市との間では120人、別海町とでは250人、標津町とでは150人、羅臼町とでは90人が、転入超過となっている。これらからの転入は主として15～39歳でなされており、進学・就職・結婚・子育てといったことを契機に若者層が流入してくる状況がうかがわれる。ここから、中標津町は根室振興局管内における人口の「一極集中」の拠点となっているとさえいえる。それだけ中標津町は高い中心性を持っているのだ。

人口移動からみられる中標津町の中心性の高さは現在までも変わらない（表7）。全世代合計の社会増減をみれば、札幌市との間においては常に大きな転出超過にあり、釧路市・帯広市とでは年度による変動はみられるものの基本的に転出超過にある。反対に、根室市を除く根室振興局管内の3つ町からの流入超過は、一部例外的な年度を除いてほぼ一貫しており、中標津町の確固たる地位に変化はない（図6）。根室市からの転入者数は2001～2005年、2016～2020年とも年平均で10人以下に過ぎないが、別海町からは2001～2005年において年平均53人、2016年では年平均52人の転入超過となっている。また標津町からは前者で年平均51人、後者では年平均15人に過ぎないものの、転入超過である。また羅臼町からは前者で20人、後者で19人の転入超過となっており、羅臼町の人口の0.3%程度が毎年、中標津町に流入してくる形になっている。

上位都市への流出も強まっていることから、現在においても25～29歳世代の転入超過は明らかなものの、30～34歳世代の超過はごく僅か

表7 中標津町における主要市町間との
転出入の推移

	札幌市	釧路市	帯広市	根室市	別海町	標津町	羅臼町
1995年度	-114	3	-33	1	78	62	30
1996年度	-93	1	-61	9	62	68	16
1997年度	-54	-30	-6	6	84	39	20
1998年度	-7	-19	-25	11	74	8	25
1999年度	-89	-40	15	24	56	45	26
2000年度	-82	-30	22	23	76	30	34
2001年度	-38	6	-29	24	68	62	26
2002年度	-60	-64	-5	2	47	38	2
2003年度	-80	-21	6	4	45	62	15
2004年度	-44	9	27	-8	43	35	17
2005年度	-42	-8	1	10	63	60	39
2006年度	-75	-18	-28	9	60	28	38
2007年度	-38	3	6	20	70	28	29
2008年度	-80	-5	-26	14	65	26	15
2009年度	-23	-19	8	4	15	28	6
2010年度	-6	-38	-26	-5	68	51	20
2011年度	-74	-54	-3	33	49	20	-1
2012年度	-65	5	-7	22	64	-3	14
2013年度	-71	-7	-10	9	64	3	1
2014年度	-52	-54	19	14	65	40	19
2015年度	-65	-38	-12	31	76	12	34
2016年度	-23	-52	-12	10	71	6	6
2017年度	-113	-53	-28	-17	50	2	23
2018年度	-86	-14	-38	19	68	16	22
2019年度	-79	17	-9	11	39	43	16
2020年度	-65	-60	-19	27	32	7	27
2021年度	-157	-36	3	-2	83	2	23
2022年度	-132	-16	-5	24	16	2	-2
2023年度	-98	-28	-10	7	40	6	0

資料：住民基本台帳(転入・転出者調べ：中標津町提供)

であり、2015～2020年においては35～39歳世代の転入超過は認められない(図7)。ただ、50～54歳よりも上の世代ではすべて2015年スリップを2020年実数が下回っている。表6や前述した「札幌一極集中」の特徴からいえば、高齢者あるいはそれを前にした世代の転出超過が大きいためだと考えられる。

そこで、2020年における中標津町と北海道の年齢別人口構成を比較する(図8)。中標津

町における20～24歳世代の一時的減少は明らかではあるものの、それを除けば、0～59歳までの世代の割合は、北海道に比べてすべて高くなっている。反対に60～64歳から上の世代では、その割合がすべて北海道よりも低い。つまりは、高齢者の一定の流出もあって、中標津町は北海道全体と比べてみれば、明らかに年少人口・生産年齢人口の割合が高い。中標津町は、相対的に「若い人が多い」町なのである。これも中標津町の中心性の高さの証左だといえるであろう。

中標津町から札幌市への転出が少なくないことから、中標津町の存在が、北海道における「札幌一極集中」を引き留めるようなものとは到底いえないだろう。むしろ周辺人口を集め・プールする「ダム」としての機能を果たすとともに、一方では上位都市への人口を送り出す「ポンプ」のような機能を持っているといえる。こうした機能は、全国的な人口移動において、地方中枢都市(「札幌広福」)が果たしているのと同様の役割である(森川、2010ほか参照)。中標津町はそれら都市に類似した性格を持つ、と評価することができる。中標津町はそれだけの中心性を変わらず有しているのである。

3. 通勤・通学者の集中

転出入(居住地移動)の移動先として、根室振興局管内(根室地域)、とりわけ根室市を除く4町(通称：奥根室地域)において高い中心性を持つ中標津町は、日々の人口移動においても、その移動先(通勤・通学先)ともなっている。また前章でみたように、「中標津モデル」との関係からは、周辺地域への通勤・通学者の居住地(「ベッドタウン」)として機能していることが注目される。

1990年時点で根室地域内において通勤・通学者の町外流出がもっとも大きかったのは、標津町から中標津町への通勤・通学者(410人)で、

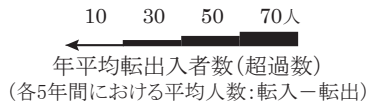
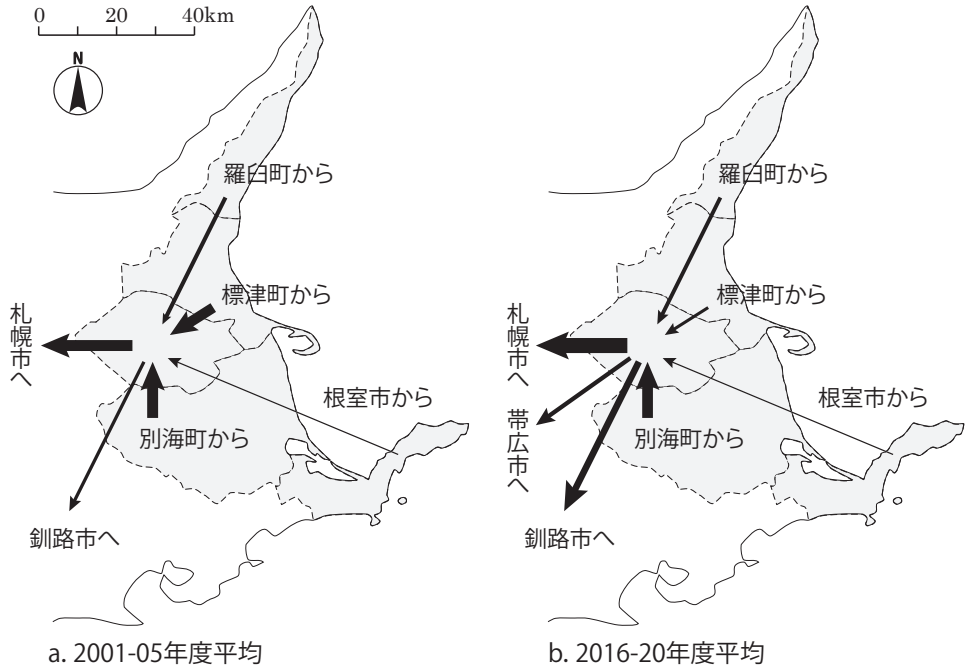


図6 中標津町における転出入者数(年平均超過数)

資料：住民基本台帳(転入・転出者調べ：中標津町提供)

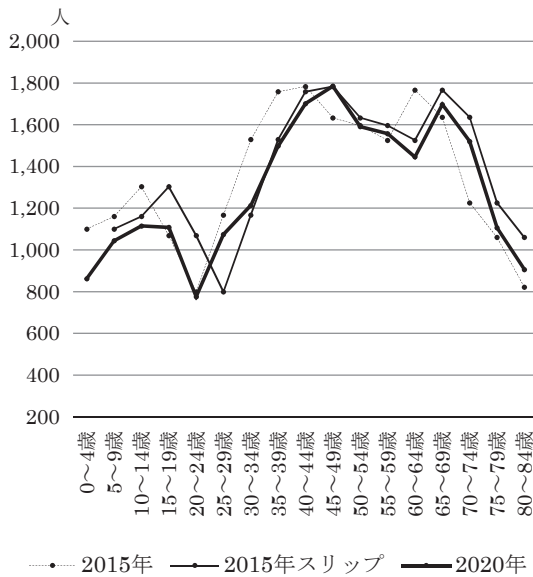


図7 中標津町における年齢別人口の変化(2015~2020年)

資料：国勢調査

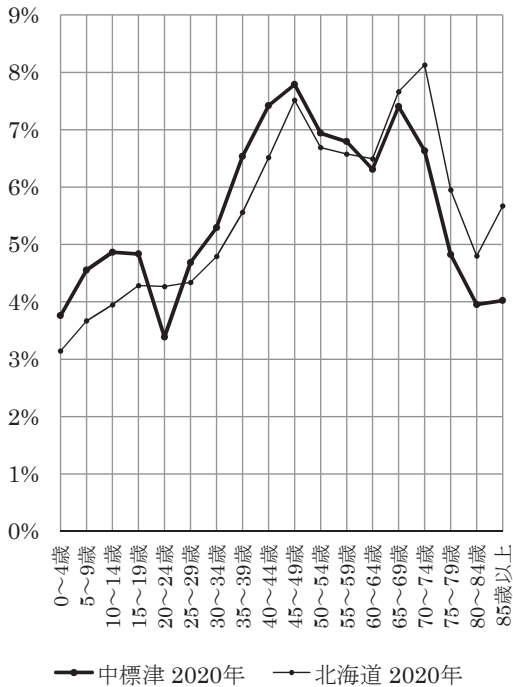


図8 中標津町と北海道の人口構造比較 (2020年)
資料：国勢調査

その数が標津町の通勤・通学者に占める割合は9.6%であった(図9)。これに次ぐのが別海町から中標津町への通勤・通学者(394人)で、割合では3.7%に過ぎないものの、実数は標津町に近い。これら以外に各市町の通勤・通学者割合の3.0%を超える流出はなかった。

2010年になると、標津町から中標津町への通勤・通学者数は340人へと減少するものの、標津町の通勤・通学者に占める割合は10.4%にまで上昇する。別海町から中標津町への通勤・通学者(417人)も同町の4.6%に上昇する。それとともに、1990年には中標津町の通勤・通学者の2.6%を占めるに過ぎなかった標津町への通勤・通学者が、2010年には3.5%(464人)を超える。中標津町から別海町への通勤・通学者(834人)は中標津町の通勤・通学者の6.3%を占めるようになる。

通勤・通学者の流出入でいえば、中標津町は、標津町との間では124人の流出超過、別海町と

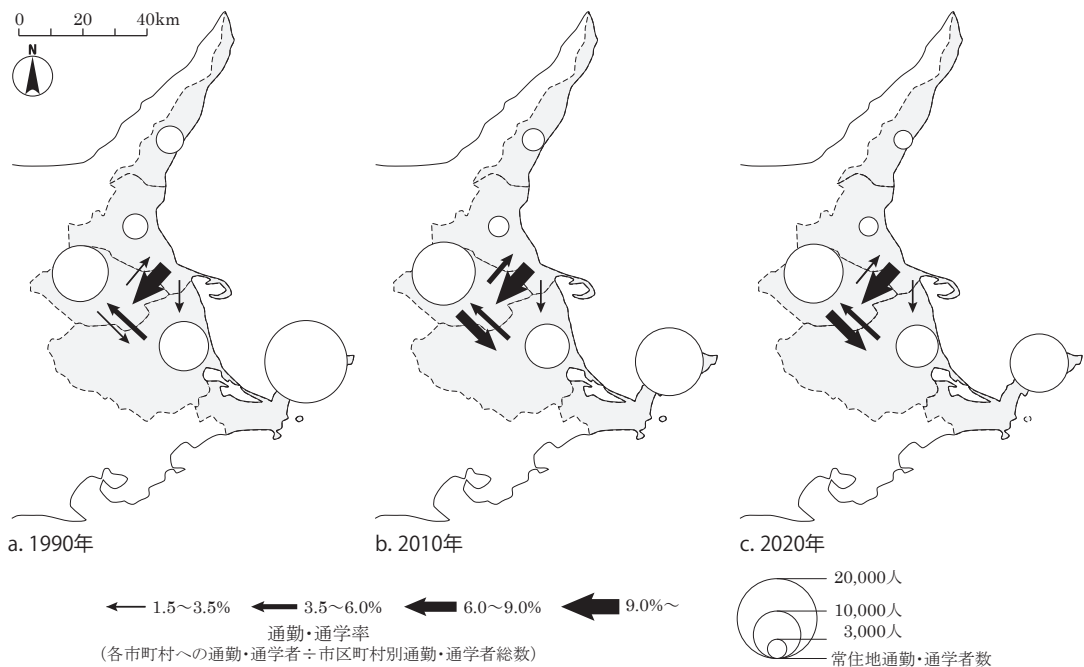


図9 根室域における通勤・通学流動
資料：国勢調査

の間でも417人の流出超過となっている。通勤・通学者を送り出すところをベッドタウンとするならば、中標津町はまさにベッドタウンである。「中心地であるとともにベッドタウン」。これこそが「中標津モデル」と呼ぶ同町の独自性である。

2020年においてもこうした状況に大きな変化はない。標津町から中標津町への通勤・通学者は292人と、数そのものは減っているものの、それが標津町の通勤・通学者数に占める割合は9.9%と依然高い。別海町からのそれも397人で2010年よりも減ってはいるものの、割合は4.7%で、0.1ポイントながらも上昇さえしている。

中標津町からの通勤・通学者をみれば、標津町への通勤・通学者が占める割合は3.1%に低下してはいるものの、通勤・通学者数そのものは413人で、400人台を維持している。別海町への通勤・通学者においてはその割合が7.8%と2010年に比べて1.5ポイント上昇しており、通勤・通学者数も834人から1,037人へと200人超の増加で、1,000人を超えるようになっている。

通勤・通学者を集める中心地であるとともに、その一方で通勤・通学者を送り出す「ベッドタウン」としても機能していることに変化はなく、「中標津モデル」の不変性は、ここからも指摘できる。

IV. 商業中心地としての中標津

中標津町の中心性は、日々、通勤・通学者を集めるだけではなく、日々の購買行動の中心地＝日常買物圏の中心地として消費者を吸引している。

もっとも新しい北海道広域商圈動向調査(2009年)によれば、中標津町は町内の85.6%の買物場所として利用されている(図10)。そのみならず、標津町の67.3%、別海町の56.7%、羅臼町の54.3%を吸引する(流出させ

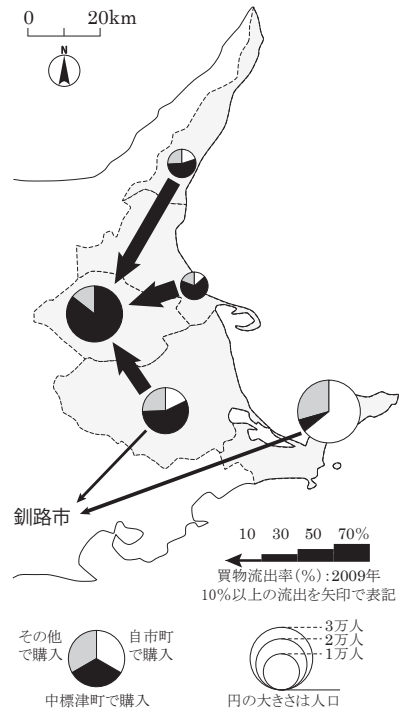


図10 根室地域における買物流出率(2009年)

資料：北海道広域商圈動向調査(2009年)

ている)。各町における人口数にこれらの割合を乗じ、その数を中標津町の商業が支えている人口数だとすれば、その数は中標津町の人口の1.7倍近い37,100人にもなる。根室市からの流出(6.5%)も加えれば、その数は39,000人を超える。中標津町の2倍に近い人数が中標津町の商業によって支えられていることになる。

こうした高い小売吸引率をもたらす主要因として、中標津町における大型小売店の集積があげられる。2025年初において奥根室地域に立地する大型小売店は12店あり、そのうち9店が中標津町にある(表8)。地元資本である東武が展開する東武サウスヒルズ、DCM(元々は釧路市を発祥の地とするホームセンター・ホームマック)、道東のスーパー・フクハラなどを展開する福原が運営するスーパーアークス、さらにはダイソーなどの店舗を核としているショッピングセンター・フレスポ(大和ハウス工業の

表8 奥根室地域4町の大型小売店

	合計面積 (m ²)	名称	店舗面積 (m ²)	開設年	核店舗
中標津町	46,995	東武サウスヒルズ	16,687	2005年	東武
		フレスポ中標津 (DCM中標津店)	12,036	2004年	DCM, 福原, 大創産業他
		長崎屋中標津店	5,020	1981年	コープさっぽろ
		ニトリ中標津店	2,538	2020年	ニトリ
		中標津複合施設 (サツドラ中標津西店)	2,532	2016年	サツドラ, しまむら
		フクハラ中標津店	2,273	2008年	福原
		中標津ファッションモール	2,204	2013年	しまむら
		ケーズデンキ中標津店	2,199	2007年	デンコードー
別海町	3,711	サツドラ中標津東店	1,506	2022年	サツドラ
		コープさっぽろべっかい店	2,513	2009年	コープさっぽろ
別海町	3,711	フクハラ別海店	1,198	2009年	福原
		DCMニコット羅臼店	1,179	2023年	DCMニコット
羅臼町	1,179	DCMニコット羅臼店	1,179	2023年	DCMニコット
標津町	0				

資料：全国大型小売店総覧2025

100%子会社である大和リースが設立)の2つが店舗面積1万m²を超える。これらはいずれも国道272号線沿いの中標津町中心部に近い場所に立地し、これらだけでも他町とは比較にならない商業集積を形成している。

東武はもともと、現在、フクハラ中標津店のある町内中心部に位置し、長崎屋中標津店とともに町内中心部において集積を形成していた。それが中標津町中心部を迂回するバイパスの役割を果たす国道272号線沿いに拡大移転したもので、中標津町の大型小売店集積の歴史は表8にみるよりも古い。

しかも2009年に別海町にも大型小売店が立地したものの、それまで奥根室地域では中標津町以外に大型小売店はみられなかった。また2020年代になってからも、中標津町にはニトリやサツドラ(サッポロドラッグストア)の進出もみられる。後者は中標津町内に大型小売店2店を展開してさえいる。中標津町における大型小売店集積は明らかに拡大・進化している。それらを中心とした奥根室地域における日常買物圏の中心地としての地位は強固なものであ

り、その中心性が高まることはあっても、衰退していくことは今のところ考えにくい状況にある。

V. 医療圏の中心地たる中標津町

中標津町は、奥根室地域における医療圏の中心地としても機能している。

奥根室地域4町の医療受診行動をみると、外来では町内医療機関での受診がすべての町でもっとも高い割合を占める(図11)。とはいえ、別海町の24.6%、標津町の30.5%、羅臼町の25.8%の医療受診を中標津町の医療機関で担っている。

これは中標津町において他を圧倒するような医療機関集積がみられるためだというよりも、「地域センター病院」である町立中標津病院の存在が大きい。「地域センター病院」は北海道独自の制度で、二次医療圏の中核医療機関としての役割を担う病院として指定された医療機関である。根室二次医療圏は4町に根室市を加えた地域圏であり、根室市にも地域センター病院

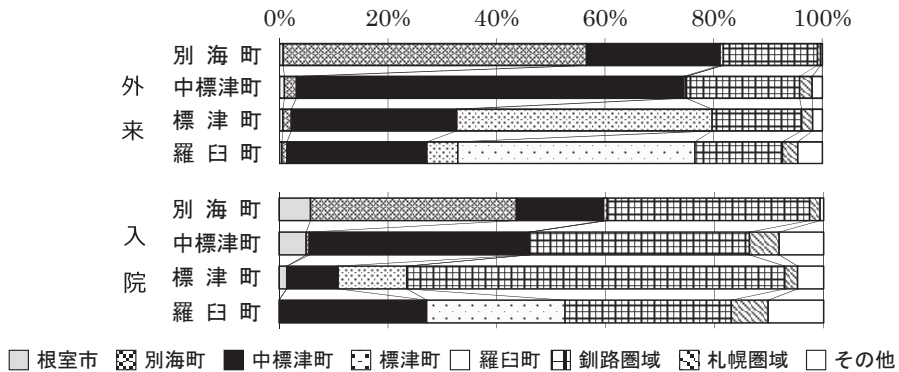


図 11 奥根室 4 町における医療受診の地域間流動

資料：国民健康保険被保険者・退職国保・後期高齢者医療制度レセプトデータ
(中標津町のみ後期高齢者医療制度データは含まない)

別海町・中標津町は2024年8月診療分、中標津町・標津町は2022年度診療分。

はある。しかしながら、根室市は医療受診行動において圏域の中心となっているとはいえ、「独立」した地位にある。居住場所による差はあるものの、奥根室地域では「根室に行くなら、(三次医療圏の中心地である) 釧路に行く」(聞き取りにより) といった受診者が多く、データからもそうした受診行動を看取できる。そうした中で、町立中標津病院こそが奥根室地域の中心的医療機関と多くの地域住民に認識されている。

そのため町立中標津病院には患者が集中してしまうきらいもある。その対策として町立中標津病院では、町外者の内科の受診について医師の紹介状を必要とするものとしている。これは町立中標津病院の圏域内における中心性の高さゆえである。

「さしあたりは町内の医療機関を利用するが、精密検査等のために町立中標津病院が利用される」といったケースも多い(聞き取りによる)。ある町の受診行動について次のような説明もあった。「外来でも通常の初診レベルでは町内と中標津の医療機関の受診比率は2:1くらいであるが、再診・精密検査といったレベルになると、3:2くらいで中標津に行くような形になる」(聞き取りによる)。実際、そうした

利用がなされていることがデータからも見て取れる。

そうした状況が入院時の医療機関利用にも反映している。入院では各町と中標津町との利用割合がより小さい。羅臼町では町内よりも中標津町での入院の方が多くなっている(図11)。

ただ入院ともなると、釧路圏域(釧路市)の医療機関利用も大きな比重を占める。道東唯一の救命救急センター(市立釧路総合病院)も立地する釧路市は、釧路・根室三次医療圏の中心でもあり、釧路市への「依存」は、制度上そうならざるをえないところはある。

とはいえ、釧路二次医療圏(1市6町1村で構成される)の中心であるとともに、これに根室二次医療圏(1市4町)を加えた釧路・根室三次医療圏の中心でもある釧路市に、医療サービス利用が過度に集中しないためにも、町立中標津病院の存在は鍵となる。奥根室地域における医療圏の中心地としての中標津町の地位が維持されることは、道東全体にとっても重要である。実際、そうした役割を町立中標津病院は果たしてきている。

町立中標津病院は国道272号線沿いでも中標津町中心部に近い場所、大型小売店集積地内ともいえる場所に立地しており、医療機関利用時

に、商業中心地の「ついで」利用もなされている。その点で中標津町は、単に単一機能の中心地としてだけでなく、それらが複合した複数機能の中心地となっている。

そうした場所においては中心地機能の「共鳴」あるいは「共振」がみられる。「1+1が3にも4にもなる」というような状況が中標津町においては認められ、少なくとも今のところ、その地位と状況に大きな変化はない。

VI. むすびにかえて

中標津町は現在においても、周辺地域からの人口移動の目的地（居住者の移転先、通勤・通学先）であり、買物行動・医療サービス利用の拠点・中心地である。加えて、周辺地域への通勤・通学者の住まう拠点として依然存立しており、「中心地であるとともにベッドタウン」という「中標津モデル」の本質に変化はみられない。周辺地域との関係において重要な結節点であり、奥根室地域における「空間的組織化」の核として機能している。

人口減少局面にあることには注視すべき点もあり、その分析や「定点観測」の継続は今後の課題である。人口や経済の動向、経済の範疇に含まれるものの一方では社会・福祉的施設としての側面も強い医療サービスなどの動向とともに、「共同生活者としてのヒト」の動向にも着目しながら、「地理的現実」を把握していくことが求められよう。それは経済地誌的・応用地理学的に必要なだけというだけでなく、理論的深化にとっても意味あることだからである。ただ現状では、それをやや抽象的な形で記すこと

にとどまらざるをえない。「地理的現実」を踏まえた上で、理論的深化を図ることは、より大きな課題として残されている。

本稿は、2020～2024年度科学研究費助成事業・基盤研究(C)「医療サービスの立地と需給の地域構造に関する基礎的研究」(20K01162、研究代表者：加藤幸治)による成果の一部である。

本稿に関わる調査においては、別海町・中標津町・標津町・羅臼町の関係各位に大変お世話になった。記して感謝申し上げたい。とりわけ、追加データ収集にあたって、中標津町経済部経済振興課・佐瀬光史課長、羅臼町保健福祉課・本見泰敬課長には多大なるご高配を賜った。厚く御礼申し上げます。

ただ4町での調査内容を本稿では十分に生かしていない。務めを果たすべく、別稿を期することとしたい。

文 献

- 加藤幸治 (2011)：サービス消費機会の地域的格差. 経済地理学年報, 57, pp.277-294.
- クオリティ編集部 (2020)：【中標津町】町制施行70周年. クオリティ, 2020年8月, pp.140-143.
- 屋間たかし・鈴木ユータ (2021)：『地域批評シリーズ 64 これでもいいのか 北海道 まちの問題編』マイクロマガジン社.
- 北海道新聞社編 (2022)：『七光星に輝きを：ニセコのキセキ・札幌集中のリアル』北海道新聞社.
- 松本浩司 (2023)：「中標津モデル」に注目集まる. 北海道で人口を20年ほぼ維持する中標津町の2つの特徴. LIFULL HOME'S PRESS, https://www.homes.co.jp/cont/press/buy/buy_01469/?msockid=3450ff3caa2a608520bfd5aab7761d7 (公開日：2023年2月17日)
- 森川 洋 (2016)：2010年の人口移動からみた日本の都市システムと地域政策. 人文地理, 68, 22-43.

音楽と関連した場所イメージの記号化について (続)

—1992-93年調査結果の分析と2022-23年調査結果との比較—

内田 順文

本学地理・環境専攻

キーワード：場所イメージ、音楽作品、アンケート調査、場所の表現、地理的リテラシー

I. はじめに

筆者はさきに、芸術作品の中に示される場所イメージの事例のひとつとして音楽作品について紹介し(内田 1987)、その実証例として音楽作品の場所イメージに関するアンケート調査結果を分析することで、音楽と関連した場所イメージの記号化がある条件の下で確かに存在することを示した(内田 2024)。しかし、この調査では題材として用いた楽曲の大半について「曲名を知らない」「曲を聞いたことがない」回答者が多く、さらには「何もイメージが湧かない」という事例も明らかに多かったことから、音楽における場所イメージの記号化の実態について、必ずしも満足のかたちで実証するまでには至らなかった。ところで筆者は1992-93年に内田(2024)と同じ要領でほぼ同じ楽曲を題材としてアンケート調査を行っており、そのときの結果を捨てることなく保管していた。ちょうど30年前の調査結果ということになるが、このデータに同様の分析を行い2022-3年の調査結果と対比することで、今回の調査で必ずしも明確に示すことができなかつた点について補強することができるのではないかと考えた。さらに、前回の調査と今回の調査との間に30年という時間差(世代的にはほぼ一世代の差)があることから、両者の結果を比較することによって、場所イメージの記号化のありように世代による違いがあるのか等について考察することも本稿の目的となる。

筆者が考えるところの音楽作品(楽曲)における場所イメージの表現方法の仮説については内田(2024)に詳しく述べたが、以下に短くまとめしてみる。音楽作品は相対的な音のつながりによって表現されるものであるため、いろいろな種類の芸術作品の中でも抽象的な部類に属する。しかし、標題音楽やいわゆる「ご当地ソング」のように、ある特定の場所と強く結びついている音楽作品は決して少なくはない。それらを整理してみると、場所イメージを表現する手段として用いられる方法は、大きく以下の3種類に分類することができるだろう。

A 音そのものないしはリズムやメロディによる場所の表現

擬音による音楽表現がこれにあたり、楽器の音を使って波の音や雨の音や鳥の鳴き声に似せることによってこれらを表現し、ひいては波や雨や鳥の鳴いている場所を聴衆に伝達する場合である。これは「標題音楽」として西洋音楽(クラシック)では一定の発展を見た。ただしこれらの標題音楽では、つまるところ曲に付けられたタイトル(表題)の果たす役割が大きく、その場合は後述するCにも分類されることになる。したがって本来の意味でのAは、曲名などの言語情報の影響を受けずとも作曲者が意図した場所を示す場合を指す。

B すでに記号化した音あるいは音楽と場所との関係を利用した場所の表現

前述の標題音楽を含め、音楽で場所イメージを示す手段として最も多く見られるのは、ある

場所に特有な音やリズムやメロディを利用してその場所を示すことである。ある地域に特有な民族的旋律やリズムを曲に取り入れたり、民族楽器を演奏に使用したりする方法がそれで、つまり和歌における歌枕の利用と同様に、多くの人に特定の場所を連想させるほど有名になった音楽と場所との結びつきを、楽曲を作曲したり演奏したりする際に利用する場合である。

C 言語あるいは物語の文脈と記号的に結びつくことで場所を表現する場合

Bで見たように、音楽によって場所を表現するために最も効率的なことが場所との結びつきを記号化することであるとすれば、言語（つまりは文芸）において普通に行われているように、言語そのものを音楽と結びつけて記号化することができれば、たやすく音楽に場所イメージを結びつけることができる。さらに、一連の文脈の中に組み込まれた音楽の場合、その物語の文脈（たとえば物語）によっても場所が特定される。その典型はオペラ・バレエ・映画といった劇の付帯音楽（劇伴）である。とくに映画やテレビドラマの劇伴音楽は、映画やドラマという内容の濃いコンテンツと結びつくことによって、単独の歌曲以上に詳細で具体的な場所イメージを音楽に与えることになる。

II. 調査方法

以下の分析で用いるデータは、1992-93年に国士館大学文学部の学生に対して行ったアンケート調査から得た。調査は、筆者がオーディオ・テープに録音して用意した40曲の音楽を流し、それぞれの曲について「この曲名を知っているか？」（答えははいかいいえ）、「これまでに一度でもこの曲を聞いたことがあるか？」（答えははいかいいえ）、「この曲を聞いてイメージした場所はどこか？」（答えは自由記述、複数の場所を書いても可）の3つの質問のみにしぼって行った。方法や条件などについては内田

(2024)で行った調査と同じなので、詳細についてはそちらを参照されたい。なお、調査に使用した楽曲は2022-23年の調査の際とは若干の異同があり、両方の調査に共通して用いた楽曲は40曲中30曲である。分析に用いた被験者数は255名で、すべての変数について欠損値は存在しなかった。

III. アンケート調査の結果の概要

以下、今回のアンケート調査で用いた40曲を①から④⑩まで番号を振って、順に結果の概要を記述する。なお、内田(2024)の中で紹介したものにはタイトルのあとに*を付け、楽曲の概要については必要最低限の記述にとどめたので、必要に応じて先の論文をも参照されたい。それぞれの曲ごとに行った「曲名を知っている」「聞いたことがある」と「その曲からイメージした場所」とのクロス表分析(カイ2乗検定)の結果については、表37にまとめて記載した。

①ピアノソナタ第11番イ長調K331 第3楽章*

モーツァルトが作曲したピアノソナタの中の曲で、一般に「トルコ行進曲」として知られている。「曲名を知っている」と回答した人は35.7%「聞いたことはある」と回答した人は63.5%と、この曲の知名度は非常に高かった。曲からイメージされる場所としては「トルコ」と回答した人が全体の16.2%いたが、「曲名を知っている」と回答した人の中の29.7%がこの曲から「トルコ」をイメージしたのに対し、「曲名を知らない」人では1.9%しかいなかった(表1)。またこの曲から「ヨーロッパ」をイメージした人の割合も「曲名を知っている」人(17.6%)より「曲名を知らない」人(31.5%)のほうが多く、カイ2乗検定の結果は有意水準.000と明らかに有意であり、曲に関する知識と曲のイメージとの間には強い相関があることが認め

られた。このことは「トルコ行進曲」という曲名に場所イメージが引っ張られた人が多数いたことを示唆している。

②『フィンガルの洞窟』序曲*

フィンガルの洞窟はスコットランドのヘブリディーズ諸島にある有名な海食洞で、1829年にこの洞窟を訪れたメンデルスゾーンが洞窟内の不気味な情景を曲にしたとされ、風景画のような作品と賞賛されている。しかし「曲名を知っている」と回答した人は3.1%「聞いたことはある」と回答した人も18.8%と知名度は高くなく、イメージする場所として「スコットランド」「海岸」を回答した人も全体の9.4%にとどまった(表2)。

③ポロネーズ第5番嬰へ短調 作品44*

17曲あるショパンのポロネーズの中ではかなり有名な曲ではあるが、第6番(英雄ポロネーズ)や第7番(幻想ポロネーズ)のような超有名曲ではない。ポロネーズはその名とおおりポーランド起源の舞曲を指すフランス語で、ポーランド出身のショパンのピアノ曲によって広く世界に知られた。ある程度ピアノを学んだ人であれば、特有の4分の3拍子のリズム[タンタタ・タッタ・タッタ]からポロネーズだと

知ることはそれほど難しいことではない。しかし「曲名を知っている」と回答した人が2.0%「聞いたことはある」を加えても全体の18.4%と知名度は低く、この曲からイメージされる場所として「ポーランド」を挙げた人は全体の0.4%、ショパンが後半生を過ごした「フランス」と回答した人も0.8%しかなく、曲を聞いただけで「ポロネーズ」とわかった人がいなかっただけでなく「ポロネーズ」というタイトルを与えられても何の場所イメージも湧かなかった人がほとんどだった可能性が高い(表3)。「曲名を知っている」人の数が少なすぎることもあって、カイ2乗検定の結果は有意水準.137で有意な差は認められず、曲の知識と場所イメージの間には何らの関連性も見られない結果となった。

④春の声

1882年にヨハン・シュトラウス2世が作曲したウィンナ・ワルツの代表曲である。「曲名を知っている」と答えた人は全体の17.3%「聞いたことはある」を加えると98.8%となり知名度はとても高かったが、この曲からイメージされる場所としては、「ウィーン」と回答した人が全体の7.5%「オーストリア」が3.5%しか

表1 「トルコ行進曲(モーツァルト)」のクロス表

		トルコ行進曲(モーツァルト) イメージ					合計
		トルコ	ドイツ	ヨーロッパ	その他	イメージなし	
トルコ行進曲 (モーツァルト)	曲名を知っている	度数 27 29.70%	6 6.60%	16 17.60%	36 39.60%	6 6.60%	91 100.00%
	聞いたことはある	3 1.90%	11 6.80%	51 31.50%	84 51.90%	13 8.00%	162 100.00%
	聞いたことがない	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 50.00%	1 50.00%	2 100.00%
合計	度数 30 %	17 6.70%	67 26.30%	121 47.50%	20 7.80%	255 100.00%	

表2 「フィンガルの洞窟」のクロス表

		フィンガルの洞窟 イメージ					合計
		スコットランド、類	海岸、海	ヨーロッパ	湖	その他	
フィンガルの 洞窟	曲名を知っている	0 0.00%	0 0.00%	1 12.50%	2 25.00%	5 62.50%	8 100.00%
	聞いたことはある	0 0.00%	3 6.30%	5 10.40%	9 18.80%	21 43.80%	48 100.00%
	聞いたことがない	1 0.50%	20 10.10%	57 28.60%	15 7.50%	89 44.70%	199 100.00%
合計	1 0.40%	23 9.00%	63 24.70%	26 10.20%	115 45.10%	27 10.60%	255 100.00%

く、ウィンナ・ワルツとウィーン（オーストリア）との関連性については記号化が進んでいるとはいえ、カイ2乗検定の結果も有意水準.113で、曲の知識と場所イメージの間に有意な関連性は見られなかった（表4）。

⑤交響詩『わが祖国』より モルダウ*

チェコを代表する作曲家スメタナの曲で、タイトルにあるモルダウ（チェコ語ではブルタヴァ）川は、ボヘミア盆地を貫流して首都プラハを通過したのちエルベ川に合流する、チェコを象徴する川である。曲は、源流より湧き出した水が流れとなり渦となり、やがてブルタヴァ川となってボヘミアを流れ下るさまが音楽で描かれており、典型的な標題音楽としても知られる。この曲の知名度は非常に高く、「曲名を知っている」と回答した人は全体の72.5%、「聞いたことがある」を加えると94.5%がこの曲を

知っていた。そして「曲名を知っている」人のうちの28.6%はこの曲からイメージする場所として「モルダウ（ブルタヴァ川）」を、7.6%は「チェコ、ボヘミア」と回答し、「川」と「湖、森」を加えると76.7%がこの曲が描写しようとする風景をイメージしている（表5）。当然、カイ2乗検定の結果は有意水準.000と明らかに有意であり、この曲自身の表現力だけでも表題であるモルダウ川の風景イメージはある程度しっかりと伝えられているが、「モルダウ」という曲名（およびそれに関係する様々な知識）を知っていることで、場所イメージの記号化がより進行することが示されていると考えられる。

⑥歌劇『イーゴリ公』より ポロヴェツ（韃靼）人の踊り

ロシアの作曲家ボロディンの『中央アジアの草原にて』と並んでもっともよく知られた曲で

表3 「ポロネーズ第5番」のクロス表

		ポロネーズ第5番 イメージ					合計	
		ポーランド	フランス	ヨーロッパ	その他	イメージなし		
ポロネーズ第5番	曲名を知っている	度数 %	0 0.00%	0 0.00%	3 60.00%	1 20.00%	1 20.00%	5 100.00%
	聞いたことはある	度数 %	0 0.00%	0 0.00%	9 21.40%	30 71.40%	3 7.10%	42 100.00%
	聞いたことがない	度数 %	1 0.50%	2 1.00%	86 41.30%	92 44.20%	27 13.00%	208 100.00%
合計	度数 %	1 0.40%	2 0.80%	98 38.40%	123 48.20%	31 12.20%	255 100.00%	

表4 「春の声」のクロス表

		春の声 イメージ					合計		
		ウィーン	オーストリア	ヨーロッパ	舞踏会	その他		イメージなし	
春の声	曲名を知っている	度数 %	6 13.60%	0 0.00%	10 22.70%	8 18.20%	19 43.20%	1 2.30%	44 100.00%
	聞いたことはある	度数 %	13 6.30%	9 4.30%	57 27.40%	47 22.60%	76 36.50%	6 2.90%	208 100.00%
	聞いたことがない	度数 %	0 0.00%	0 0.00%	1 33.30%	0 0.00%	1 33.30%	1 33.30%	3 100.00%
合計	度数 %	19 7.50%	9 3.50%	68 26.70%	55 21.60%	96 37.60%	8 3.10%	255 100.00%	

表5 「モルダウ」のクロス表

		モルダウ イメージ						合計		
		モルダウ(ブルタヴァ)川	チェコ、ボヘミア	ヨーロッパ	川	湖、森	その他		イメージなし	
モルダウ	曲名を知っている	度数 %	53 28.60%	14 7.60%	17 9.20%	73 39.50%	2 1.10%	26 14.10%	0 0.00%	185 100.00%
	聞いたことはある	度数 %	5 8.90%	0 0.00%	10 17.90%	13 23.20%	2 3.60%	26 46.40%	0 0.00%	56 100.00%
	聞いたことがない	度数 %	0 0.00%	0 0.00%	3 21.40%	2 14.30%	2 14.30%	5 35.70%	2 14.30%	14 100.00%
合計	度数 %	58 22.70%	14 5.50%	30 11.80%	88 34.50%	6 2.40%	57 22.40%	2 0.80%	255 100.00%	

ある。『イーゴリ公』は中世ロシアの叙事詩を題材にした歌劇で、ロシアのイーゴリ公がドニエプル川周辺の草原地帯に住む遊牧民ポロヴェツ（韃靼）族の土地へ遠征し、そこで捕らえられたのちに脱走して故郷へ帰りつくまでの物語が描かれる。「ポロヴェツ人の踊り」は、第2幕の終盤にエキゾチックな踊りとともに演奏される非西欧的なモチーフを絡めた魅惑的なメロディを持つ楽曲で、ヨーロッパ人がイメージする「東方」を表現したメロディと解釈することもできるだろう。この曲は2006～22年にJR東海のCM「うましうるわし奈良」で流れることになるが、この調査の実施時期はそれ以前になる。「曲名を知っている」と回答した人が2.4%「聞いたことはある」と回答した人は22.4%と多くはなかったが、「韃靼、中央アジア」をイメージしたと回答した人が全体の1.2%、「ロシア」をイメージした人は10.2%おり、カイ2乗検定の結果も有意水準.001で、曲と場所イメージの間には有意な相関が認められた（表6）。

⑦金髪のジェニー Jeanie with the Light Brown Hair

フォスターは「アメリカ音楽の父」とも呼ばれるアメリカ合衆国を代表する作曲家で、『お

お、スザンナ』や『草競馬』など多くの曲が日本人にも親しまれてきた。『ケンタッキーの我が家』のほうが知名度は高いが、KFCのイメージが強くなりすぎるのではないかと懸念し、曲名はわからなくともフォスター＝アメリカ民謡らしさが感じられるこの曲を選曲した。結果は「曲名を知っている」と回答した人は全体の9.0%おり、このうちの78.3%がこの曲から「米国南部、米国農村」または「アメリカ合衆国」をイメージしており、カイ2乗検定の結果も有意水準.001と明らかに有意となった。また「聞いたことはある」と回答した人も51.4%いて、このうちの27.4%が「米国南部、米国農村」または「アメリカ合衆国」をイメージしたことから、フォスター特有の曲調がアメリカ民謡のイメージと結びついている可能性も示唆された（表7）。

⑧狂詩曲「スペイン」

作曲したシャブリエが1882年にスペインを一周旅行した際に得た着想をもとに書いた曲で、典型的な標題音楽としても有名な曲である。8分の3拍子のリズムに乗ってスペイン風の陽気なメロディが冒頭から流れ、楽器としてタンバリンとカステネットが使われている。た

表6 「ポロヴェツ人の踊り」のクロス表

		韃靼人の踊り イメージ					合計
		韃靼、中央アジア	ロシア	ヨーロッパ	その他	イメージなし	
ポロヴェツ人の踊り	曲名を知っている	度数 1 %	3 50.00%	0 0.00%	2 33.30%	0 0.00%	6 100.00%
	聞いたことはある	0 0.00%	6 10.50%	15 26.30%	30 52.60%	6 10.50%	57 100.00%
	聞いたことがない	2 1.00%	17 8.90%	51 26.60%	109 56.80%	13 6.80%	192 100.00%
合計	度数 3 %	26 10.20%	66 25.90%	141 55.30%	19 7.50%	255 100.00%	

表7 「金髪のジェニー」のクロス表

		金髪のジェニー イメージ					合計	
		米国南部、米国農村	アメリカ合衆国	ケンタッキーFC	教会	その他		イメージなし
金髪のジェニー	曲名を知っている	8 34.80%	10 43.50%	1 4.30%	0 0.00%	4 17.40%	0 0.00%	23 100.00%
	聞いたことはある	10 7.60%	26 19.80%	5 3.80%	20 15.30%	67 51.10%	3 2.30%	131 100.00%
	聞いたことがない	2 2.00%	6 5.90%	3 3.00%	34 33.70%	52 51.50%	4 4.00%	101 100.00%
合計	度数 20 %	42 16.50%	9 3.50%	54 21.20%	123 48.20%	7 2.70%	255 100.00%	

だしシャブリエはフランス人であり、その点ではここで描かれるスペインのイメージは外国人から見た他所イメージである。「曲名を知っている」と回答した人は全体の2.7%「聞いたことはある」も19.2%と知名度は高くなく、カイ2乗検定の結果も有意水準.791で、有意な関連性は認められなかった(表8)。

⑨アルハンブラ宮殿の思い出*

表題になっているアルハンブラ宮殿はスペイン・アンダルシア地方のグラナダにあるイスラム様式の宮殿で、世界遺産にも登録されている世界的に有名な観光地でもある。主要な楽器としてギターが用いられており、フラメンコに代表されるようにスペインの場所イメージと強く結びついている。「曲名を知っている」と回答した人が全体の5.1%「聞いたことはある」と回答した人も38.4%いた。この曲からイメージされる場所として「アルハンブラ宮殿、グラナダ」と回答した人は全体の2.4%「スペイン」と回答した人も16.5%おり(表9)、カイ2乗検定の結果も有意水準.014で、曲に関する知識と場所イメージの間には有意な相関が見られた。一方で「聞いたことがない」人のうち15.3%が「グラナダ」または「スペイン」をイメージし

たと回答しており、曲名とは関係なく曲調のみで場所イメージを想起した人もいたことがわかる。

⑩『大地の歌』第3楽章「青春について」*

マーラー作曲のこの楽曲は李白の「宴陶家亭子」に基づき、東洋的な五音音階が用いられ中国的なメロディが用いられている。「曲名を知っている」と回答した人は全体の1.6%で「聞いたことはある」と回答した人は14.5%と知名度は高くなく、カイ2乗検定の結果も有意水準.820と、曲の知識と場所イメージの間には相関は認められない。しかし、この曲からイメージされる場所として「中国」と回答した人は全体の16.5%を占めており、一定数の回答者は曲調から中国的な場所イメージを読み取ったことが示唆される(表10)。

⑪『マ・メール・ロワ』より 第3曲パゴダの女王レドロネット*

フランスの作曲家ラヴェルが『マザー・グース』を題材にして作曲した楽曲で、第3曲はパゴダ(陶器製の中国の首振り人形)が音楽を奏でたり歌ったりする場面を描写したとされる。

⑩と同様に五音音階で書かれており、いかにもヨーロッパ人がイメージする「中国」が音楽的

表8 「狂詩曲スペイン」のクロス表

		狂詩曲スペイン イメージ						合計
		スペイン	フランス	ヨーロッパ	アラブ、アフリカ	その他	イメージなし	
狂詩曲 スペイン	曲名を知っている	度数 0	1	2	0	4	0	7
	%	0.00%	14.30%	28.60%	0.00%	57.10%	0.00%	100.00%
	聞いたことはある	度数 0	2	19	0	25	3	49
%	0.00%	4.10%	38.80%	0.00%	51.00%	6.10%	100.00%	
	聞いたことがない	度数 1	4	70	1	103	20	199
%	0.50%	2.00%	35.20%	0.50%	51.80%	10.10%	100.00%	
合計	度数 1	7	91	1	132	23	255	
%	0.40%	2.70%	35.70%	0.40%	51.80%	9.00%	100.00%	

表9 「アルハンブラ宮殿の思い出」のクロス表

		アルハンブラ宮殿の思い出 イメージ						合計
		アラブ、アフリカ	スペイン	ヨーロッパ	アラブ、アフリカ	その他	イメージなし	
アルハンブラ宮 殿の思い出	曲名を知っている	度数 2	4	2	1	4	0	13
	%	15.40%	30.80%	15.40%	7.70%	30.80%	0.00%	100.00%
	聞いたことはある	度数 3	17	21	0	53	4	98
%	3.10%	17.30%	21.40%	0.00%	54.10%	4.10%	100.00%	
	聞いたことがない	度数 1	21	29	2	87	4	144
%	0.70%	14.60%	20.10%	1.40%	60.40%	2.80%	100.00%	
合計	度数 6	42	52	3	144	8	255	
%	2.40%	16.50%	20.40%	1.20%	56.50%	3.10%	100.00%	

に表現されている。知名度に関しては93.2%が「聞いたことがない」と答えたが、この曲からイメージされる場所としては「中国」が全体の65.5%を占めており、中国的イメージを表現しようとした作曲者の意図は明らかに伝わっている(表11)。一方、カイ2乗検定の結果は有意水準.066で、曲に関する知識が場所イメージに与える影響については認められなかった。

⑫ペルシャの市場にて*

イギリスの作曲家ケテルビーが1920年に作曲した典型的な標題音楽で、市場の物乞いを表す合唱部分のメロディが五音音階で書かれるなど、東洋的な雰囲気醸し出している。しかしながら、この部分に出てくるメロディは典型的な中国風のメロディであり、標題となっているペルシャ(現在のイラン)の音楽・旋律とは全く異なるものである。「曲名を知っている」と

回答した人は全体の8.2%おり、そのうちの42.9%が曲からイメージする場所として「ペルシャ、イラン」と回答したのに対し、「曲名を知らない」人(「聞いたことはある」と回答した47.5%と「聞いたことがない」と回答した44.3%)ではその数値は1.2%で、かわりに「中国」と回答した人は26.9%いた(表12)。もちろんカイ2乗検定の結果も有意水準.000で、曲に関する知識と場所イメージとの間に明らかな関連性が見られた。この結果は、この楽曲のタイトルを知っている人はその知識に引っ張られて場所イメージとしてペルシャ(イラン)を想起したのに対し、曲名の知識がない人は曲調などから中国を想起したことを示していると思われる。

⑬組曲『大峡谷』より 第3曲 山道を行く

この楽曲の原題『グランド・キャニオン』は

表10 「大地の歌 青春について」のクロス表

		大地の歌 青春について イメージ					合計
		中国	ドイツ	ヨーロッパ	その他	イメージなし	
大地の歌 青春について	曲名を知っている	度数 1 25.00%	1 25.00%	1 25.00%	1 25.00%	0 0.00%	4 100.00%
	聞いたことはある	度数 6 16.20%	2 5.40%	12 32.40%	17 45.90%	0 0.00%	37 100.00%
	聞いたことがない	度数 35 16.40%	15 7.00%	62 29.00%	93 43.50%	9 4.20%	214 100.00%
合計	度数 42 16.50%	18 7.10%	75 29.40%	111 43.50%	9 3.50%	255 100.00%	

表11 「パゴダの女王レドロネット」のクロス表

		パゴダの女王レドロネット イメージ					合計
		中国	フランス	ヨーロッパ	その他	イメージなし	
パゴダの女王 レドロネット	曲名を知っている	度数 1 50.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 50.00%	0 0.00%	2 100.00%
	聞いたことはある	度数 10 50.00%	1 5.00%	2 10.00%	7 35.00%	0 0.00%	20 100.00%
	聞いたことがない	度数 156 67.00%	0 0.00%	12 5.20%	62 26.60%	3 1.30%	233 100.00%
合計	度数 167 65.50%	1 0.40%	14 5.50%	70 27.50%	3 1.20%	255 100.00%	

表12 「ペルシャの市場にて」のクロス表

		ペルシャの市場にて イメージ						合計
		ペルシャ、イラン	中国	アジア	アラビア、トルコ	その他	イメージなし	
ペルシャの 市場にて	曲名を知っている	度数 9 42.90%	2 9.50%	1 4.80%	0 0.00%	9 42.90%	0 0.00%	21 100.00%
	聞いたことはある	度数 2 1.70%	35 28.90%	6 5.00%	8 6.60%	58 47.90%	12 9.90%	121 100.00%
	聞いたことがない	度数 1 0.90%	28 24.80%	14 12.40%	4 3.50%	57 50.40%	9 8.00%	113 100.00%
合計	度数 12 4.70%	65 25.50%	21 8.20%	12 4.70%	124 48.60%	21 8.20%	255 100.00%	

アメリカ合衆国アリゾナ州にある有名な峡谷であり、ここを実際に訪れた作曲家グローフェがその風景に感動して作品を構想したと言われていた。組曲『大峡谷』はグランド・キャニオンのさまざまな風景を描写した典型的な標題音楽で、なかでも「山道に行く」は最も一般に知られており、曲の冒頭ヴァイオリンでロバの鳴き声が描かれたあと、アメリカ民謡を模したカウボーイ・ソング風ののどかなメロディが流れるが、これはロバの背中に揺られててくてくと山道を進む旅人の情景を描いている。「曲名を知っている」と回答した人は10.6%いたが、そのうちの48.1%が曲からイメージされる場所として「グランド・キャニオン」を挙げ、「アメリカ」を挙げた人も18.5%あった。カイ2乗検定の結果も有意水準.000で、曲と場所イメージとの間に有意な関連性が見られた(表13)。

⑭『ダフニスとクロエ』第2組曲より「夜明け」

『ダフニスとクロエ』は、古代ギリシャのロンゴスが書いた小説をもとに1912年にパリで初演されたバレエ作品で、ラヴェルが作曲を担当した。バレエは全3場からなり、エーゲ海に浮かぶレスボス島の牧歌的な情景を舞台として、山羊飼いの少年と羊飼いの少女との純愛が

恋敵の陰謀や海賊の襲来などの困難を経て成就するというあらすじで、ラヴェルはギリシャ神話の世界をイメージして曲を書いたとされる。調査用に選曲した「夜明け」は、第3場の冒頭、第2場で誘拐されたクロエを探して疲れ果て、神聖な森に隣接する牧草地にあるニンフの祭壇前で眠るダフニスに、厳かに夜明けが訪れるシーンに使用される曲で、チェロとコントラバスのうねるようにゆったりとした低音部のなかフルートとクラリネットの12連符のアルペジオが徐々に空が白みはじめるさまを表現し、ピッコロによる鳥のさえずりが聞こえ、オーケストラ全体がクレッシェンドをしながら頂点を迎えて夜が明けたことを表す。クラシックを聴く人にとってはかなり有名な曲だが、この曲からイメージされる場所として「曲名を知っている」と回答した4名中1名が「ギリシャ」を、1名が「夜明け」と回答し、カイ2乗検定の結果は有意水準.000で、楽曲の知識と場所イメージとの間に有意な関連性が見られた。その一方で、「聞いたことがない」人のうち9.6%が「夜明け」をイメージしたと回答しており、この人たちはある意味ラヴェルの音楽表現を記号化した知識なしで正しく聞き取ったとも言える(表14)。

表13 「大峡谷 山道に行く」のクロス表

		大峡谷 山道に行く イメージ					合計
		グランドキャニオン	アメリカ	山道、山地	その他	イメージなし	
大峡谷 山道に行く	曲名を知っている	度数 13	5	0	9	0	27
		% 48.10%	18.50%	0.00%	33.30%	0.00%	100.00%
	聞いたことはある	度数 6	18	11	77	1	113
		% 5.30%	15.90%	9.70%	68.10%	0.90%	100.00%
	聞いたことがない	度数 2	22	5	79	7	115
		% 1.70%	19.10%	4.30%	68.70%	6.10%	100.00%
合計		度数 21	45	16	165	8	255
		% 8.20%	17.60%	6.30%	64.70%	3.10%	100.00%

表14 「ダフニスとクロエ 夜明け」のクロス表

		ダフニスとクロエ 夜明け イメージ							合計
		エーゲ海、ギリシャ	フランス	浜辺、海	夜明け	川、湖、水	その他	イメージなし	
ダフニスとクロエ 夜明け	曲名を知っている	度数 1	0	0	1	0	2	0	4
		% 25.00%	0.00%	0.00%	25.00%	0.00%	50.00%	0.00%	100.00%
	聞いたことはある	度数 0	0	0	2	4	6	0	12
		% 0.00%	0.00%	0.00%	16.70%	33.30%	50.00%	0.00%	100.00%
	聞いたことがない	度数 1	1	8	23	30	166	10	239
		% 0.40%	0.40%	3.30%	9.60%	12.60%	69.50%	4.20%	100.00%
合計		度数 2	1	8	26	34	174	10	255
		% 0.80%	0.40%	3.10%	10.20%	13.30%	68.20%	3.90%	100.00%

⑮漁舟唱晩*

1930年に作曲された中国の古箏曲の一つで、中国固有の楽器を用いて、中国の伝統的なメロディを奏でた曲である。調査の結果、「曲名を知っている」と回答した者は0.8%、「聞いたことはある」と回答した人もわずか14.5%だったが、全体の71.4%が「中国」をイメージしたと回答し、5.9%の「中華料理店」を加えると、77.3%の人がこの曲から「中国らしさ」を喚起されたことになる(表15)。当然カイ2乗検定の結果は有意水準.357で有意とは言えず、曲そのものの知識と場所イメージとの間に何らかの関連性は見られない。

⑯ラーガ・デーシュ Rāga Desh

北インドの古典音楽の旋法であるラーガに基づく一曲で、シタールとタブラによって演奏されたものを調査に用いた。シタールは7本の演奏弦に金属製の共鳴弦が共鳴して多数の倍音を含む独特の音色が特徴の民族楽器、タブラは大小二つの太鼓からなる打楽器で、シタールとタブラの合奏は、多くの日本人が思うインド古典音楽のイメージになっている。曲自体が日本でとくに有名なわけではないので、「曲名を知っている」と回答した人は0人「聞いたことはある」と回答した人は16.9%だったが、この曲か

らイメージした場所として「インド」または「インド料理店」と回答した人は36.9%おり、「アジア」をイメージした人(45.9%)まで含めると全体の82.8%がインドの民族音楽のイメージをなんとなく持っていることがわかる(表16)。当然カイ2乗検定の結果は有意水準.522で有意とは言えず、曲そのものの知識と場所イメージとの間に何らかの関連性は見られない。

⑰楽しい人々 Lustige Leute

この曲は、ヨーデルと呼ばれるアルプス山脈のドイツ語圏に見られる独特の歌唱法を用いたスイスやオーストリアの民謡である。調査で流した音源はティロルのヨーデルを現地録音したもので、厳密にはスイスのヨーデルではないのだが、筆者も含めて素人にはその区別は難しい。「曲名を知っている」と回答した人は1.6%「聞いたことはある」と回答した人は27.1%だったが、「曲名を知っている」と回答した人の75.0%「聞いたことはある」と回答した人の89.8%「聞いたことがない」と回答した人の81.9%が、この曲からイメージする場所として「チロル」「アルプス」または「スイス」と回答した(表17)。意図的に知名度の低い曲を選曲しているので、この数値は曲そのものの知識をもとにしたイメージである可能性は低

表 15 「漁舟唱晩」のクロス表

		漁舟唱晩 イメージ						合計
		中国	中華料理店	アジア	日本、京都	その他	イメージなし	
漁舟唱晩	曲名を知っている	1 50.00%	1 50.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 100.00%
	聞いたことはある	25 67.60%	3 8.10%	2 5.40%	2 5.40%	5 13.50%	0 0.00%	37 100.00%
	聞いたことがない	156 72.20%	11 5.10%	20 9.30%	12 5.60%	14 6.50%	3 1.40%	216 100.00%
合計		182 71.40%	15 5.90%	22 8.60%	14 5.50%	19 7.50%	3 1.20%	255 100.00%

表 16 「ラーガ・デーシュ」のクロス表

		ラーガ・デーシュ イメージ					合計
		インド	インド料理店	アジア	その他	イメージなし	
ラーガ・デーシュ	聞いたことはある	16 37.20%	1 2.30%	21 48.80%	4 9.30%	1 2.30%	43 100.00%
	聞いたことがない	76 35.80%	1 0.50%	96 45.30%	36 17.00%	3 1.40%	212 100.00%
合計		92 36.10%	2 0.80%	117 45.90%	40 15.70%	4 1.60%	255 100.00%

く、ヨーデルという独特の歌唱法と曲の雰囲気（とくにアコーディオンの響き）からアルプスやスイスをイメージしたのではないかと推測できる。

⑱フニクリ・フニクラ Funiculi funiculà

イタリアのヴェスヴィオ火山に1880年完成したケーブルカーの宣伝のため、同年作曲家のL.デンツァに依頼して作られた。世界最古のCMソングとも言われる。「曲名を知っている」と回答した人は27.1%「聞いたことはある」と回答した人は67.8%で知名度は非常に高いが、イメージする場所として「ナポリ」「イタリア」と回答した人は全体の18.8%「火山・山」と回答した人は8.6%で、この曲がイメージの点でヴェスヴィオ山と強く結びついているとは言えない結果となった（表18）。カイ2乗検定の結果でも有意水準.139で有意な差は認められなかった。なお、この曲はメロディが替え歌「鬼のパンツ」としても知られており、そちらをイメージした回答も一定数見られた。

⑲パリの空の下 Sous le Ciel de Paris

J.ドレジャックが作詞 H.ジローが作曲したこの曲は、フランス映画『パリの空の下セーヌは流れる』の挿入歌として誕生し、その後

E.ピアフなど多くの歌手によって歌われたことで『枯葉』『愛の賛歌』などと並ぶ有名なシャンソンとなった。調査ではシャンソンのイメージと強く結びついたアコーディオンによる伴奏が付いたイヴ・モンタン版を使用した。「曲名を知っている」と回答した人は3.1%「聞いたことはある」と回答した人は24.7%で、半数以上は「聞いたことがない」と回答した。しかし全体の22.0%が「パリ」を、19.6%が「フランス」をイメージしたと回答しているので、曲そのものの知識はなくとも曲の雰囲気（シャンソンらしい編曲とくにアコーディオン、さらに意味は分からなくともフランス語の歌詞の響き）にフランスを感じ取ることのできる人も一定数存在したことが予想される（表19）。カイ2乗検定の結果も有意水準.089で、曲の知識とイメージとの間に有意な差は認められなかった。

⑳モスクワ郊外の夕べ Подмосковные вечера

B.ソロヴィヨフ＝セドイが1955年に作曲したこの曲は、もとはソビエト連邦の映画の挿入歌だったが、ラジオ・モスクワの英語放送で時報として使用されたことで西側世界にも知られ、その後多くのミュージシャンがカバーした

表17 「楽しい人々」のクロス表

			楽しい人々 イメージ					合計	
			チロル	アルプス	スイス	ヨーロッパ	その他		イメージなし
楽しい人々	曲名を知っている	度数 %	1 25.00%	2 50.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 25.00%	0 0.00%	4 100.00%
	聞いたことはある	度数 %	1 1.40%	37 53.60%	24 34.80%	3 4.30%	4 5.80%	0 0.00%	69 100.00%
	聞いたことがない	度数 %	1 0.50%	88 48.40%	60 33.00%	7 3.80%	23 12.60%	3 1.60%	182 100.00%
合計	度数 %	3 1.20%	127 49.80%	84 32.90%	10 3.90%	28 11.00%	3 1.20%	255 100.00%	

表18 「フニクリフニクラ」のクロス表

			フニクリフニクラ イメージ					合計	
			ナポリ	イタリア	ヨーロッパ	火山、山	その他		イメージなし
フニクリフニクラ	曲名を知っている	度数 %	1 1.40%	14 20.30%	25 36.20%	11 15.90%	14 20.30%	4 5.80%	69 100.00%
	聞いたことはある	度数 %	1 0.60%	31 17.90%	57 32.90%	11 6.40%	57 32.90%	16 9.20%	173 100.00%
	聞いたことがない	度数 %	0 0.00%	1 7.70%	4 30.80%	0 0.00%	5 38.50%	3 23.10%	13 100.00%
合計	度数 %	2 0.80%	46 18.00%	86 33.70%	22 8.60%	76 29.80%	23 9.00%	255 100.00%	

結果、ソ連（ロシア）をイメージさせる代表的な曲となった。歴史的に古い曲ではないが、有名な『トロイカ』や『ヴォルガの舟歌』などと同様にロシア民謡の曲として扱われることが多い。日本では1960年代にいわゆる歌声喫茶で盛んに歌われていたが、近年ではあまり耳にすることがなくなった。「曲を知っている」および「聞いたことはある」と回答した人は全体の3.5%しかいなかったが、そのうちの66.7%はイメージした場所として「モスクワ」「ロシア（ソ連）」を挙げた。「聞いたことがない」と回答した人でも24.0%が「モスクワ」「ロシア（ソ連）」をイメージしたと回答しており、「寒さ」や「寂しさ」をイメージした人も多くいたことから、曲調自体にモスクワやロシアの寂しげな風景をイメージさせる何かがあるのかもしれない（表20）。当然カイ2乗検定の結果も有

意水準.106で有意な差は認められなかった。

②①コンドルは飛んでいく * El Cóndor Pasa

伝承曲のメロディをもとに1913年ペルーの作曲家ロブレスが作曲した、アンデスのフォルクローレの代表的な曲である。調査に使用した曲ではチャランゴやケーナなどの典型的なフォルクローレの民族楽器が演奏に用いられている。「曲名を知っている」または「聞いたことはある」と回答した人は全体の97.3%にのぼり、曲からイメージされる場所として全体の45.1%が「ペルー、アンデス」と回答した（表21）。カイ2乗検定の結果も有意水準.000と明らかに有意であり、曲に関する知識が場所イメージの形成に関与していることが十分に予想される結果となった。

②②サンバ・ブラジル Sambas de Enredo

調査に使用した曲は1980年代のブラジル・

表19 「パリの空の下」のクロス表

		パリの空の下 イメージ					合計
		パリ	フランス	ヨーロッパ	その他	イメージなし	
パリの空の下	曲名を知っている	度数 4 50.00%	1 12.50%	2 25.00%	1 12.50%	0 0.00%	8 100.00%
	聞いたことはある	19 30.20%	17 27.00%	15 23.80%	11 17.50%	1 1.60%	63 100.00%
	聞いたことがない	33 17.90%	32 17.40%	61 33.20%	49 26.60%	9 4.90%	184 100.00%
合計	度数 56 %	50 19.60%	78 30.60%	61 23.90%	10 3.90%	255 100.00%	

表20 「モスクワ郊外のタベ」のクロス表

		モスクワ郊外のタベ イメージ				合計	
		モスクワ	ロシア、ソ連	ヨーロッパ	その他		イメージなし
モスクワ郊外のタベ	曲名を知っている	1 50.00%	1 50.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 100.00%
	聞いたことはある	1 14.30%	3 42.90%	1 14.30%	2 28.60%	0 0.00%	7 100.00%
	聞いたことがない	14 5.70%	45 18.30%	80 32.50%	77 31.30%	30 12.20%	246 100.00%
合計	度数 16 %	49 19.20%	81 31.80%	79 31.00%	30 11.80%	255 100.00%	

表21 「コンドルは飛んでいく」のクロス表

		コンドルは飛んでいく イメージ					合計
		ペルー、アンデス	中南米	アメリカ合衆国	その他	イメージなし	
コンドルは飛んでいく	曲名を知っている	94 51.40%	30 16.40%	7 3.80%	52 28.40%	0 0.00%	183 100.00%
	聞いたことはある	19 29.20%	6 9.20%	5 7.70%	34 52.30%	1 1.50%	65 100.00%
	聞いたことがない	2 28.60%	2 28.60%	0 0.00%	2 28.60%	1 14.30%	7 100.00%
合計	度数 115 %	38 14.90%	12 4.70%	88 34.50%	2 0.80%	255 100.00%	

リオデジャネイロで開催された「リオのカーニバル」の現地録音である。プロの演奏ではなく、自分たちの演奏に合わせて歌い踊る人々の生の熱気が伝わってくる。当然演奏されて曲はブラジルの代表的な民族音楽であるサンバで、[ダーン・タタン、ダーン・タタン] という単調な4分の2拍子のスルド(太鼓)のリズムに乗って、カヴァキーニョ(弦楽器)とともにクイーカやホイッスルなど我々がよく知る楽器の音色も聞こえてくる。この曲自体が有名なわけではないので(じつは筆者もこの曲はよく知らない)「曲名を知っている」と回答した者は0人「聞いたことはある」と回答した人も7.5%だった(表22)。しかし、熱気あふれるサンバの楽曲を聞いてイメージした場所として「ブラジル」と回答した人は全体の40.0%あり、「中南米」と答えた人も31.0%いたので、「サンバ」=「ブラジル」という場所イメージは「なんとなく中南米」というイメージを含めてある程度記号化していると考えられる。

②③サンゴ礁の彼方* Beyond The Reef

1948年に作曲されたハワイアン・ミュージックで、かなり知られたスタンダードナンバーである。ハワイアンはポリネシア系先住民の伝統音楽が19世紀後半以降西洋音楽と融合してで

きたジャンルで、スティール・ギターやスラックキーギターという独特な奏法やウクレレの使用が独特の音色を生み出している。「曲名を知っている」と回答した人は1.2%「聞いたことはある」と回答した人は34.1%と知名度はあまり高くないが、曲を聞いてイメージされる場所としては、全体の67.5%が「ハワイ」と回答し、6.3%が「ビーチ、海、島」と回答しており、曲の知識がない人でもかなりの人がハワイのイメージを喚起されたことが示された(表23)。カイ2乗検定の結果も有意水準.370で、曲の知識とイメージとの間に有意な相関は認められなかった。

つづく②④~②⑦の4曲については、曲を聞いてイメージされる場所の記述方法に関して2022-23年の調査とは異なる方法を用いたため、今回の分析・考察からは除外する。

②⑧祇園小唄* (長田幹彦作詞 佐々紅華作曲)

1930(昭和5)年に作られた歌謡曲で、祇園の舞妓がテーマとなり「東山」「大文字」「鴨の河原」といった京都の地名が歌詞に織り込まれている。メロディも端唄風の和旋律であり、伴奏も三味線、太鼓、鉦などの和楽器が使われている。「曲名を知っている」と回答した人は

表22 「サンバ・ブラジル」のクロス表

		サンバ・ブラジル イメージ					合計
		ブラジル	中南米	アメリカ合衆国	その他	イメージなし	
サンバ・ブラジル	聞いたことはある	度数 7 % 36.80%	7 36.80%	0 0.00%	4 21.10%	1 5.30%	19 100.00%
	聞いたことがない	95 40.30%	72 30.50%	5 2.10%	57 24.20%	7 3.00%	236 100.00%
合計		102 40.00%	79 31.00%	5 2.00%	61 23.90%	8 3.10%	255 100.00%

表23 「サンゴ礁の彼方」のクロス表

		サンゴ礁の彼方 イメージ						合計
		ハワイ	アメリカ合衆国	ビーチ、海、島	常磐ハワイアンセンター	その他	イメージなし	
サンゴ礁の彼方	曲名を知っている	2 66.70%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 33.30%	0 0.00%	3 100.00%
	聞いたことはある	61 70.10%	0 0.00%	9 10.30%	2 2.30%	13 14.90%	2 2.30%	87 100.00%
	聞いたことがない	109 66.10%	4 2.40%	7 4.20%	1 0.60%	42 25.50%	2 1.20%	165 100.00%
合計		172 67.50%	4 1.60%	16 6.30%	3 1.20%	56 22.00%	4 1.60%	255 100.00%

8.6%「聞いたことはある」と回答した人は46.7%で、知名度はわりと高い。曲を聞いてイメージされる場所として、全体の3.1%が「祇園」、47.1%が「京都」と回答し、半数以上の人が「京都」をイメージした(表24)。「料亭、芸者」をイメージした人も11.4%いて、これは「祇園」のイメージに近いと考えられる。カイ2乗検定の結果は有意水準.254で、曲に関する知識とは関係なく、曲調や歌詞によって場所イメージが喚起された人も多かったことが予想される。

㊸蘇州夜曲* (西條八十作詞 服部良一作曲)

1940(昭和15)年の映画『支那の夜』の劇中歌として作られ大ヒットした。歌詞の中に「夢の舟歌」「寒山寺」といった水の都蘇州と張継の『楓橋夜泊』の風景が織り込まれている。曲調は西洋音階の中に若干の中国的なフレーズが用いられており、前奏に二胡を使うなど中国イメージを意識した作編曲になっている。「曲名を知っている」と回答した人は全体の4.3%だが、そのうちの72.7%がイメージされる場所として「蘇州」を挙げており、カイ2乗検定の結果も有意水準.000と、曲に関する知識と場所イメージとの間に明らかな相関が認められた。

「聞いたことはある」または「聞いたことがない」と回答した人のうち11.1%はイメージされる場所として「中国」と回答したが、一方で「日本、京都」と回答した人はそれより多い41.2%いて、典拠となる映画のことを知らない人にとっては、この程度の中国ふうアレンジでは「中国」イメージがあまり喚起されないことも示された(表25)。

㊹リンゴ追分(小沢不二夫作詞 米山正夫作曲)

1952(昭和27)年に放送されたラジオドラマ『リンゴ園の少女』の挿入歌として作曲され、同年に映画化されたときには主題歌として使用された。まだ十代半ばだった美空ひばりの伸びやかな若い声を聞くことができる。曲名に「追分」とあるように、追分節・馬子唄風の民謡らしいメロディと編曲が行われていることに加え、1番と2番の間奏にある美空ひばりの津軽弁の台詞「お岩木山のとっぺんを～」があるなど、ドラマの舞台となった青森県津軽地方の農村イメージを強調した演出が施されている。調査の結果「曲名を知っている」と回答した人は全体の55.7%「聞いたことはある」と回答した人は28.2%もあり、曲を聞いてイメージされる場所としては「津軽、青森」と回答した人が全

表24 「祇園小唄」のクロス表

		祇園小唄 イメージ							合計
		京都	日本	祇園	神社、寺	料亭、芸者	その他	イメージなし	
祇園小唄	曲名を知っている	度数 8 %	5 22.70%	1 4.50%	1 4.50%	3 13.60%	4 18.20%	0 0.00%	22 100.00%
	聞いたことはある	度数 63 %	22 18.50%	4 3.40%	2 1.70%	16 13.40%	12 10.10%	0 0.00%	119 100.00%
	聞いたことがない	度数 49 %	19 16.70%	3 2.60%	4 3.50%	10 8.80%	25 21.90%	4 3.50%	114 100.00%
合計	度数 120 %	46 18.00%	8 3.10%	7 2.70%	29 11.40%	41 16.10%	4 1.60%	255 100.00%	

表25 「蘇州夜曲」のクロス表

		蘇州夜曲 イメージ					合計
		蘇州	中国	日本、京都	その他	イメージなし	
蘇州夜曲	曲名を知っている	度数 8 %	0 0.00%	0 0.00%	3 27.30%	0 0.00%	11 100.00%
	聞いたことはある	度数 1 %	10 13.70%	28 38.40%	32 43.80%	2 2.70%	73 100.00%
	聞いたことがない	度数 0 %	17 9.90%	77 45.00%	69 40.40%	8 4.70%	171 100.00%
合計	度数 9 %	27 10.60%	105 41.20%	104 40.80%	10 3.90%	255 100.00%	

体の42.0%、「東北」「田舎、農村」「リンゴ園」を足すと62.4%の人が同じような傾向のイメージを抱いている(表26)。しかし「曲名を知っている」>「聞いたことはある」>「聞いたことがない」の順で「津軽、青森」をイメージする人の割合は減っていき、カイ2乗検定の結果は有意水準.000と高い水準で有意が示され、曲に関する知識と曲のイメージとの間に十分な相関があることが認められた。

⑩お嫁において* (岩谷時子作詞 弾厚作作曲)

1966(昭和41)年に発売された歌謡曲で、いわゆる湘南サウンドのはしりと言われる加山雄三の代表曲である。歌詞には特定の地名は出てこないが、曲調はハワイアンでスティール・ギターやウクレレが楽器として用いられており、海やビーチといったイメージを前面に出した歌詞となっている。「曲名を知っている」と回答した人は全体の49.0%「聞いたことはある」と回答した人は42.7%いて、知名度は非常に高い(表27)。曲を聞いてイメージされる場所としては、「湘南」と回答した人が全体の22.0%を占めたが、「曲名を知っている」>「聞いたことはある」>「聞いたことがない」の順でその割合は減っていき、カイ2乗検定の結果でも有

意水準.000で、曲に関する知識と曲のイメージとの間に十分な相関があることが認められた。なお、曲調からの影響で「ハワイ」と回答した人も16.1%いた。

⑪京都慕情 (林春生作詞 ザ・ベンチャーズ作曲)

アメリカのロックバンドであるザ・ベンチャーズがインストゥルメンタル曲として1970(昭和45)年に作曲し、日本語の歌詞を付けて同年渚ゆう子がカバーし発売した楽曲。五音音階(いわゆるヨナ抜き)でメロディが作られており、演奏に大正琴が用いられるなど、同じベンチャーズ作曲の前作の『京都の恋』よりも「日本」感が強調されており、後付けされた日本語の歌詞にも「河原町」「高瀬川」「嵐山」「桂川」といった京都の地名が織り込まれている。「曲名を知っている」と回答した人は7.1%「聞いたことはある」と回答した人は21.8%で⑩⑪と比べると知名度は低いが、曲を聞いてイメージされる場所として全体の10.6%が「京都」または「祇園」と回答しており、カイ2乗検定の結果でも有意水準.041で、曲に関する知識と曲のイメージとの間に相関が認められた(表28)。また「川、高瀬川」と回答した人が

表26 「リンゴ追分」のクロス表

		リンゴ追分 イメージ							合計
		津軽、青森	東北	田舎、農村	リンゴ園	日本	その他	イメージなし	
リンゴ追分	曲名を知っている	度数 76 %	14 9.90%	6 4.20%	13 9.20%	0 0.00%	32 22.50%	1 0.70%	142 100.00%
	聞いたことはある	度数 25 %	8 11.10%	3 4.20%	3 4.20%	2 2.80%	29 40.30%	2 2.80%	72 100.00%
	聞いたことがない	度数 6 %	2 4.90%	1 2.40%	2 4.90%	2 4.90%	25 61.00%	3 7.30%	41 100.00%
合計	度数 107 %	24 9.40%	10 3.90%	18 7.10%	4 1.60%	86 33.70%	6 2.40%	255 100.00%	

表27 「お嫁において」のクロス表

		お嫁において イメージ							合計
		湘南	神奈川、横浜	ハワイ	海、ビーチ、船	豊洲(伊豆)	その他	イメージなし	
お嫁において	曲名を知っている	度数 34 %	1 0.80%	18 14.40%	47 37.60%	1 0.80%	23 18.40%	1 0.80%	125 100.00%
	聞いたことはある	度数 19 %	2 1.80%	21 19.30%	34 31.20%	2 1.80%	25 22.90%	6 5.50%	109 100.00%
	聞いたことがない	度数 3 %	0 0.00%	2 9.50%	7 33.30%	2 9.50%	6 28.60%	1 4.80%	21 100.00%
合計	度数 56 %	3 1.20%	41 16.10%	88 34.50%	5 2.00%	54 21.20%	8 3.10%	255 100.00%	

17.6%いたが、これは調査で用いた1番の最後のフレーズ「～夕焼けの高瀬川」に引っ張られた可能性がある。

③宗谷岬（吉田弘作詞 船村徹作曲）

1972（昭和47）年にレコードが発売され、その後1976年にNHK『みんなのうた』でカバーによるカバー・バージョンが放送されたことで全国的に広まった。1980年には宗谷岬に「宗谷岬音楽碑」も建てられている。『別れの一本杉』や『兄弟舟』など演歌の作曲で知られる船村だが、この曲はスローなフォークソング風のメロディで、歌詞には「宗谷岬」の地名とともに「流水」「ハマナス」「カモメ」「吹雪」といった北の海を思わせる単語が多用されている。「曲名を知っている」と回答した人は18.0%「聞いたことはある」と回答した人は21.6%だが、曲を聞いてイメージされる場所としては「宗谷岬」と回答した人が全体の20.8%、「北海道」と回答した人が37.6%で、これに「オホーツク海、北の海」9.0%「海、岬」の7.8%を加えると、75.2%は作詞者作曲者が意図した曲のイメージを読み取れたと考えられる（表29）。船村徹のメロディは春の宗谷岬の姿をうまく表現していると筆者には思える

が、この曲を「聞いたことがない」人の16.2%が「宗谷岬」をピンポイントでイメージしたことは、曲の最後に出る地名（つまり歌詞）の影響があるのではないかと予想される。

④瞳を閉じて*（荒井由実作詞作曲）

1974（昭和49）年ラジオの深夜放送での募集をきっかけに長崎県五島列島の県立五島高校奈留分校の校歌として作られた曲で、その後NHKの『みんなのうた』で放送されたことで全国的に知られるようになった。曲には「風」「沖」「潮騒」といった語は出てくるが、具体的な地名は使用されない。「曲名を知っている」と回答した人は9.8%「聞いたことはある」と回答した人も31.8%と知名度はそこまで高くなく、イメージされる場所として「奈留島、五島」と回答した人は全体の0.4%「長崎、九州」と回答した人を加えても1.6%で、五島列島奈留島にまつわるこの歌のエピソードを知る人はほとんどいなかった（表30）。カイ2乗検定の結果は有意水準.666で、曲に関する知識と曲のイメージとの間に何らかの関連性も認められなかった。

⑤北ウイング*（康珍化作詞 林哲司作曲）

1984（昭和59）年に発売された中森明菜の

表28 「京都慕情」のクロス表

		京都慕情 イメージ						合計
		京都	日本	祇園	川、高瀬川	その他	イメージなし	
京都慕情	曲名を知っている	度数 4	1	0	5	7	1	18
	%	22.20%	5.60%	0.00%	27.80%	38.90%	5.60%	100.00%
	聞いたことはある	度数 14	21	2	30	51	14	132
%	10.60%	15.90%	1.50%	22.70%	38.60%	10.60%	100.00%	
聞いたことがない	度数 7	27	0	10	48	13	105	
	%	6.70%	25.70%	0.00%	9.50%	45.70%	12.40%	100.00%
合計	度数 25	49	2	45	106	28	255	
%	9.80%	19.20%	0.80%	17.60%	41.60%	11.00%	100.00%	

表29 「宗谷岬」のクロス表

		宗谷岬 イメージ						合計
		宗谷岬	北海道	オホーツク海、北の海	海、岬	その他	イメージなし	
宗谷岬	曲名を知っている	度数 22	9	6	5	4	0	46
	%	47.80%	19.60%	13.00%	10.90%	8.70%	0.00%	100.00%
	聞いたことはある	度数 6	30	2	0	16	1	55
%	10.90%	54.50%	3.60%	0.00%	29.10%	1.80%	100.00%	
聞いたことがない	度数 25	57	15	15	40	2	154	
	%	16.20%	37.00%	9.70%	9.70%	26.00%	1.30%	100.00%
合計	度数 53	96	23	20	60	3	255	
%	20.80%	37.60%	9.00%	7.80%	23.50%	1.20%	100.00%	

楽曲で、成田空港（当時は新東京国際空港）のターミナルの名称をタイトルとし、「都会の灯り」「日付が塗りかえてゆく」「霧の町が雲の下に」といった歌詞から、夜の成田空港を飛び立った旅客機がアラスカを経由して英国ロンドンに到着するというストーリーが読める。調査時期がヒット時からまだ8年後ということもあり、「曲名を知っている」と回答した人は77.6%「聞いたことはある」と回答した人は18.8%と知名度は非常に高く、曲を聞いてイメージされる場所として「空港、飛行機」と回答した人は全体の58.8%いた（表31）。しかも「曲名を知っている」>「聞いたことはある」>「聞いたことがない」の順で「空港、飛行機」をイメージする人の割合は減っていき、カイ2乗検定の結果も有意水準.000で、明らかに有意な相関関係があることを示している。

⑩燃えよドラゴン Enter the Dragon

『燃えよドラゴン』は1973年に公開された香港とアメリカの合作映画で、主演したブルース・リーとカンフー・ブームを世界的に巻き起こした作品。作曲したのは『スパイ大作戦』（ミッション・インポッシブル）のテーマでも知られるラロ・シフリンである。この映画は全編香港を舞台としており、この曲をバックにして映しだされる映画のタイトル・シーケンスは、香港島のビクトリア・ピークからの香港市街の俯瞰に始まり、今は無き香港啓徳空港から九龍半島の路地へと移動していく。「曲名を知っている」と回答した人は23.9%あり「聞いたことはある」と回答した人も58.8%で、曲を聞いてイメージされる場所として「香港」と回答した人は全体の47.5%「中国」と回答した人が10.2%いた（表32）。メロディの中に若干の

表30 「瞳を閉じて」のクロス表

		瞳を閉じて イメージ					合計
		五島	長崎、九州	海	その他	イメージなし	
瞳を閉じて	曲名を知っている	度数 % 0 0.00%	1 4.00%	12 48.00%	12 48.00%	0 0.00%	25 100.00%
	聞いたことはある	0 0.00%	1 1.20%	31 38.30%	42 51.90%	7 8.60%	81 100.00%
	聞いたことがない	1 0.70%	1 0.70%	54 36.20%	80 53.70%	13 8.70%	149 100.00%
合計		1 0.40%	3 1.20%	97 38.00%	134 52.50%	20 7.80%	255 100.00%

表31 「北ウィング」のクロス表

		北ウィング イメージ					合計	
		空港、飛行機	東京	都会	夜	その他		イメージなし
北ウィング	曲名を知っている	度数 % 139 70.20%	7 3.50%	5 2.50%	3 1.50%	40 20.20%	4 2.00%	198 100.00%
	聞いたことはある	10 20.80%	8 16.70%	5 10.40%	1 2.10%	18 37.50%	6 12.50%	48 100.00%
	聞いたことがない	1 11.10%	2 22.20%	0 0.00%	0 0.00%	4 44.40%	2 22.20%	9 100.00%
合計		150 58.80%	17 6.70%	10 3.90%	4 1.60%	62 24.30%	12 4.70%	255 100.00%

表32 「燃えよドラゴン」のクロス表

		燃えよドラゴン イメージ					合計	
		香港	中国	カンフー	ブルース・リー	その他		イメージなし
燃えよドラゴン	曲名を知っている	度数 % 34 55.70%	4 6.60%	2 3.30%	1 1.60%	19 31.10%	1 1.60%	61 100.00%
	聞いたことはある	80 53.30%	16 10.70%	6 4.00%	3 2.00%	38 25.30%	7 4.70%	150 100.00%
	聞いたことがない	7 15.90%	6 13.60%	0 0.00%	0 0.00%	23 52.30%	8 18.20%	44 100.00%
合計		121 47.50%	26 10.20%	8 3.10%	4 1.60%	80 31.40%	16 6.30%	255 100.00%

中国的なニュアンスが用いられているものの、曲調としてはアメリカ映画の映画音楽なので、「香港」をイメージする理由としてはドラマの内容に基づく可能性が高い。「曲名を知っている」>「聞いたことはある」>「聞いたことがない」の順で「香港」をイメージする人の割合は減っていき、カイ2乗検定の結果も有意水準.000で明らかに有意な相関関係があることを示している。

③⑦ロッキーのテーマ Gonna Fly Now

1976年のアメリカ映画『ロッキー』はS.スタローン主演のボクシング映画で、ビル・コンティ作曲の楽曲は「ロッキーのテーマ」としても知られ、主人公が作品の舞台となる早朝のフィラデルフィアの街並みをランニングするシーンやトレーニングを行うシーン、フィラデルフィア美術館の階段上でこぶしを突き上げる場面で流れる印象的な曲である。「曲名を知っている」と回答した人は81.6%で「聞いたことはある」と回答した人も17.3%で、知名度は非常に高い。曲を聞いてイメージされる場所として「フィラデルフィア」と回答した人は全体の12.9%いて、「曲名を知っている」>「聞いたことはある」>「聞いたことがない」の順でその割合は

減っていき、映画に関する知識が場所イメージの形成に関与していることが予想される(表33)。ただしカイ2乗検定の結果は有意水準.064で有意な相関関係があるとは言えなかった。

③⑧ジャングル大帝のテーマ (石郷岡豪作詞 富田勲作曲)

『ジャングル大帝』は手塚治虫の代表作の一つで、1965(昭和40)年にテレビアニメ化された。富田勲による楽曲はその主題歌として、当時としては画期的なフルオーケストラで演奏され、オープニングアニメーションではこの雄大な曲をバックに作品の舞台となるアフリカの草原や熱帯雨林などの大自然が描かれる。「曲名を知っている」と回答した人は18.8%で「聞いたことはある」と回答した人は27.8%と、本放送時から30年近く経っていることもあって知名度はそこまで高くない。しかし曲を聞いてイメージされる場所として「アフリカ」「ジャングル」「サバンナ、草原」と回答した人は「曲名を知っている」と回答した人の87.5%いて、その割合は「曲名を知っている」>「聞いたことはある」>「聞いたことがない」の順で減っていき、アニメ作品に関する知識が場所イメージの形成に関与していることが示された(表34)。

表33 「ロッキーのテーマ」のクロス表

		ロッキーのテーマ イメージ					合計
		フィラデルフィア	アメリカ合衆国	ボクシング、リング、ジム	その他	イメージなし	
ロッキーの テーマ	曲名を知っている	度数 30 %	63 30.30%	75 36.10%	35 16.80%	5 2.40%	208 100.00%
	聞いたことはある	度数 3 %	17 38.60%	15 34.10%	8 18.20%	1 2.30%	44 100.00%
	聞いたことがない	度数 0 %	1 33.30%	0 0.00%	1 33.30%	1 33.30%	3 100.00%
合計	度数 %	33 12.90%	81 31.80%	90 35.30%	44 17.30%	7 2.70%	255 100.00%

表34 「ジャングル大帝のテーマ」のクロス表

		ジャングル大帝のテーマ イメージ					合計
		アフリカ	ジャングル	サバンナ、草原	その他	イメージなし	
ジャングル大帝 のテーマ	曲名を知っている	度数 29 %	5 10.40%	8 16.70%	5 10.40%	1 2.10%	48 100.00%
	聞いたことはある	度数 30 %	7 9.90%	12 16.90%	22 31.00%	0 0.00%	71 100.00%
	聞いたことがない	度数 17 %	5 3.70%	8 5.90%	77 56.60%	29 21.30%	136 100.00%
合計	度数 %	76 29.80%	17 6.70%	28 11.00%	104 40.80%	30 11.80%	255 100.00%

カイ2乗検定の結果でも有意水準.000で、有意な相関があると認められた。

⑨おしえて* (岸田衿子作詞 渡辺岳夫作曲)

1974 (昭和49) 年に放送されたテレビアニメ『アルプスの少女ハイジ』の主題歌で、調査時でも放送から20年近く経過していたが、「聞いたことがない」と回答した人が全体で1人だけと知名度は非常に高かった。ホルンやヨーデルのコーラスなど編曲がスイス・アルプスのイメージを強調しており、スイスの山と谷の風景からなるオープニングアニメも、作品の場所イメージ形成に寄与していると思われる。曲を聞いてイメージされる場所として「アルプス」と回答した人が全体の71.0%「スイス」と回答した人が18.8%だった(表35)。「アルプス」という答えのほうが多かったのはこの作品のアニメのタイトルに引かれた結果ではないかと思われる。「曲を知っている」>「聞いたことはある」>「聞いたことがない」の順で「アルプス」や「スイス」をイメージする人の割合は減っていき、カイ2乗検定の結果も有意水準.000で、曲に対する知識とイメージとの間に有意な相関関係があることを示している。

⑩きこえるかしら (岸田衿子作詞 三善晃作曲)

1979 (昭和54) 年に「世界名作劇場」の5作目として放送されたテレビアニメ『赤毛のアン』の主題歌として作られた。『赤毛のアン』は孤児院暮らしだったアンが、カナダのプリンス・エドワード島にあるグリーンゲイブルズのカスパート家に引き取られてからクィーン学院を卒業するまでの少女時代を描いた小説で、テレビアニメの演出を高畑勲が、作画監督を近藤喜文が担当し、主題歌の作編曲は現代音楽の作曲家三善晃が行った。この楽曲が流れるオープニングアニメーションは、プリンス・エドワード島の風景をバックに草原の上や白い花の道や雪の林の中を馬車に乗って駆け抜けていく主人公のイメージを流麗に描いたもので、アニメのオープニングとして最上のレベルだと筆者は思っている。調査時期の約10年前に放送していた作品のため「聞いたことはある」と回答した人は42.7%いたが「曲を知っている」と回答した人は17.6%と少なめで、曲を聞いてイメージされる場所として「プリンス・エドワード島、グリーンゲイブルズ」と回答した人は全体の5.9%「カナダ」と回答した人も7.5%にとどまった(表36)。しかしその割合は「曲を知っ

表35 「おしえて」のクロス表

		おしえて イメージ				合計
		アルプス	スイス	その他	イメージなし	
おしえて	曲名を知っている	度数 % 147 75.40%	33 16.90%	15 7.70%	0 0.00%	195 100.00%
	聞いたことはある	34 57.60%	15 25.40%	9 15.30%	1 1.70%	59 100.00%
	聞いたことがない	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 100.00%	1 100.00%
合計	度数 %	181 71.00%	48 18.80%	24 9.40%	2 0.80%	255 100.00%

表36 「きこえるかしら」のクロス表

		きこえるかしら イメージ						合計	
		プリンス・エドワード島、グリーンゲイブルズ	カナダ	アメリカ	平原をかける馬車、林檎の花咲く道	赤毛のアン	その他		イメージなし
きこえるかしら	曲名を知っている	度数 % 12 26.70%	8 17.80%	4 8.90%	4 8.90%	3 6.70%	14 31.10%	0 0.00%	45 100.00%
	聞いたことはある	3 2.80%	11 10.10%	6 5.50%	3 2.80%	0 0.00%	65 59.60%	21 19.30%	109 100.00%
	聞いたことがない	0 0.00%	0 0.00%	3 3.00%	2 2.00%	1 1.00%	71 70.30%	24 23.80%	101 100.00%
合計	度数 %	15 5.90%	19 7.50%	13 5.10%	9 3.50%	4 1.60%	150 58.80%	45 17.60%	255 100.00%

ている」>「聞いたことはある」>「聞いたことがない」の順で減っていき、カイ2乗検定の結果も有意水準.000であることから、曲に対する知識とイメージとの間に有意な関連性があることを示している。

IV. 考察

今回調査した①～②③、②⑧～④⑩の36曲について、曲に関する知識の度合いと場所イメージとの間のカイ2乗検定の結果(有意水準)と、それぞれの曲に想定される場所イメージの表現方法による分類(ABC、曲によって複数該当するものもある)を示したものが表37である。以下、音楽による場所イメージの表現は可能か、またそのような作曲者ら送り手の意図は正しく聴衆に伝達されているのか、を今回の調査結果に基づきA～Cで示した場所イメージの表現方法ごとに考察する。

A 音そのものないしはリズム・メロディによる場所の表現

楽器の音を使って波の音や雨の音や鳥の鳴き声を表現し、その音が聞こえる場所を聴衆に伝達することを意図した事例としては②⑤⑫⑬⑭が該当する(表37)。これらの5曲はいずれもカイ2乗検定の結果が5%以下の水準で有意であることから、曲名ないしは曲にまつわる言語情報からイメージが導かれた可能性の高いことが示されているが、一方でこれらの曲を「聞いたことがない」あるいは「曲名を知らない」人たちの中に、②における「海岸、海」⑤における「川」⑬における「山道、山地」⑭における「浜辺、海、川、水」のイメージを想起した人が少数とはいえ一定数いたことは、作曲者が音のみで表現しようとした場所イメージが全く伝わらなかったわけではないことを示している。

とくに⑭は筆者が同じ作者の『水の戯れ』と並んでこれまで聞いた標題音楽の中で一二を争

表37 場所の表現方法とカイ2乗検定の結果

No	曲名	場所の表現方法	1992-3年		2022-3年	
			カイ2乗検定 有意水準	検定結果	カイ2乗検定 有意水準	検定結果
1	トルコ行進曲(モーツァルト)	C	0.000	◎	0.000	◎
2	フィンガルの洞窟	A C	0.022	○	0.525	×
3	ボロネーズ第5番	B	0.137	×	0.174	×
4	春の声	B	0.113	×		
5	モルダウ	A C	0.000	◎	0.000	◎
6	ボロヴェツ人の踊り	B C	0.001	◎	0.490	×
7	金髪のジェニー	B	0.001	◎	0.001	◎
8	狂詩曲スペイン	B C	0.791	×	0.033	○
9	アルハンブラ宮殿の思い出	B C	0.014	○	0.296	×
10	大地の歌 青春について	B C	0.820	×	0.165	×
11	バゴダの女王レドロネット	B C	0.066	×	0.482	×
12	ベルシャの市場にて	ABC	0.000	◎	0.739	×
13	大峽谷 山道を行く	A C	0.000	◎	0.683	×
14	ダフニスとクロエ 夜明け	A C	0.000	◎	0.191	×
15	漁舟鳴喚	B	0.357	×	0.393	×
16	ラーガ・デーシュ	B	0.522	×	0.661	×
17	楽しい人々	B	0.004	◎	0.583	×
18	フニクリフニクラ	B C	0.139	×		
19	パリの空の下	B C	0.089	×	0.271	×
20	モスクワ郊外の夕べ	B C	0.106	×	0.304	×
21	コンドルは飛んでいく	B	0.000	◎	0.000	◎
22	サンバ・ブラジル	B C	0.902	×	0.207	×
23	珊瑚礁の彼方	B	0.372	×	0.002	◎
28	祇園小唄	B C	0.254	×	0.068	×
29	蘇州夜曲	B C	0.000	◎	0.132	×
30	リング追分	B C	0.000	◎	0.000	◎
31	お嫁において	B C	0.100	×	0.000	◎
32	京都慕情	B C	0.041	○	0.690	×
33	宗谷岬	C	0.000	◎	0.576	×
34	瞳を閉じて	C	0.666	×	0.024	○
35	北ウィング	C	0.000	◎	0.004	◎
36	燃えよドラゴン	B C	0.000	◎		
37	ロッキーのテーマ	C	0.064	×		
38	ジャングル大帝のテーマ	C	0.000	◎		
39	おしえて	B C	0.000	◎	0.000	◎
40	きこえるかしら	C	0.000	◎		

◎：1%水準で有意 ○：5%水準で有意 ×：有意ではない

う描写力だと思っているが「聞いたことがない」人のうちの9.6%が「夜明け」をイメージしたと回答したことは、ラヴェルの作曲技法の的確さを示していると言えるのではないだろうか。さらに標題音楽とは見なさなかった③⑧において、「聞いたことがない」人のうち12.5%が「アフリカ」を、5.9%が「サバンナ」を、3.7%が「ジャングル」を想起したと回答したことは(この申告が嘘ではないとすると)、(編成にコンガが使われており、それが熱帯イメージを喚起した可能性も否定できないが)この曲の持つ壮大さや躍動感といった表現力が『ジャングル大帝』という作品の世界観を音楽で具現化し得たのかもしれない。もちろんその表現力には限

界があって、Aタイプの場所の表現ではほとんどの聴衆には場所イメージを伝えることはできないこともまた明らかになった。

B すでに記号化した音あるいは音楽と場所との関係を利用した場所の表現

ある場所に特有な音やリズム・メロディを利用してその場所を示すことを意図したと思われる事例は、表37に示すように、少なくとも25曲あった。まず、9曲あるクラシックの事例のうち③「ポーランド」④「ウィーン」⑥「中央アジア」⑧「スペイン」では楽曲と場所とを関連付けている人がほとんどいなかったのに対し、⑦「アメリカ合衆国」⑨「スペイン」⑩「中国」⑪「中国」⑫「中国」については「曲名を知らない」と回答した人でも作曲者が意図した場所イメージを想起した人がある程度存在していた。これは前者4曲の作曲年代が19世紀だったのに対し、アメリカ民謡とも呼ぶことができる⑦を例外として除くと、後者4曲の作曲年がずっと新しくそのぶん音楽表現の方法が進化したからだとも考えられる。あるいは単にギターを用いた「スペイン」の表現と五音音階を用いた「中国」の表現が前者と比べてわかりやすかったからなのかもしれない。

ある地域に特有な民族的旋律やリズムを曲に取り入れたり民族楽器を演奏に使用した事例は⑮「中国」⑯「インド」⑰「アルプス」⑱「イタリア」⑲「フランス」⑳「ロシア（ソ連）」㉑「アンデス」㉒「ブラジル」㉓「ハワイ」の9曲だが、いずれも楽曲と場所イメージはある程度強く結びつけられていることがわかる。もちろんこれは全ての人に当てはまるわけではなく、⑮や⑰や㉓のように比較的多くの人に知られている民族的旋律やリズムもあれば、⑯や⑱や㉑のように知る人の少ない民族的旋律やリズムもある。

⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖の7曲も、ある地域に特有な民族的旋律やリズムを曲に取り入れたり民族楽

器を演奏に使用した事例だが、同時に次のCで示す歌詞や物語の文脈によって場所イメージを表現しているため、曲調の影響なのか曲名などの文脈の影響なのか明確に区別できない。㉘の「京都」㉙の「ハワイ」については曲調や演奏楽器による場所イメージへの影響がはっきりと認められそうだが、他の5曲については歌詞や文脈の影響のほうが大きいのではないだろうか。

C 言語あるいは物語の文脈と記号的に結びつくことで場所を表現する場合

このタイプの楽曲と場所イメージの記号化で最もわかりやすく最も多い事例は、曲のタイトルに地名を組み込む場合である。今回の分析で扱った36曲のうち15曲の曲名に地名が入っているが、このうち「曲名を知っているかどうか」と「その曲から連想される場所」とのクロス表分析の結果5%水準で有意と判定されたものは、①②⑤⑥⑨⑫⑬⑲⑳㉓の9曲であった（表37）。この両者の間に有意な相関があるということは、「曲名を知っている」ことが、想起される場所イメージの内容に影響を与えている可能性が高いと解釈できる。その典型的な事例が①と⑫で、第三章で述べたように、曲調からはイメージしにくい「トルコ」や「ベルシャ」の場所イメージが、「曲名を知っている」人にだけ多く出現している。同様に⑤では単なる「川」のイメージを超えて「モルダウ川」が、⑬では「山道」ではなく「グランド・キャニオン」が、㉑では「中国」ではなく「蘇州」のイメージがピンポイントで出現する。

音楽作品の場所イメージと言語を介して結びつくのは、もちろん曲名だけではない。楽曲における歌詞の存在は、文字通り文芸として曲のイメージの一端を説明する。クロス表分析の結果5%水準で有意と判定されたもののうち、㉑㉒㉓㉔㉕は日本語の歌詞が付くことによって初めて聞いた曲でも歌詞の内容が場所イメージの形成につながった可能性は否定できない。㉖

における「津軽」③③における「宗谷岬」③⑤における「空港」のイメージがその事例だと考えられる。

曲のタイトルや歌詞といった音声言語に依存せず、その楽曲が関係している曲の内容以外の文脈から音楽が場所イメージと結びつく場合もある。歌劇・バレエ・映画・テレビドラマなどの劇伴音楽が典型的な事例で、曲自体がメタレベルで場所と結びつく場合（たとえば作曲家の出身地や、場所にまつわる特殊なエピソードなど）がこれにあたる。今回の調査では⑥⑭⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿㏀㏁㏂㏃㏄㏅㏆㏇㏈㏉㏊㏋㏌㏍㏎㏏㏐㏑㏒㏓㏔㏕㏖㏗㏘㏙㏚㏛㏜㏝㏞㏟㏠㏡㏢㏣㏤㏥㏦㏧㏨㏩㏪㏫㏬㏭㏮㏯㏰㏱㏲㏳㏴㏵㏶㏷㏸㏹㏺㏻㏼㏽㏾㏿㐀㐁㐂㐃㐄㐅㐆㐇㐈㐉㐊㐋㐌㐍㐎㐏㐐㐑㐒㐓㐔㐕㐖㐗㐘㐙㐚㐛㐜㐝㐞㐟㐠㐡㐢㐣㐤㐥㐦㐧㐨㐩㐪㐫㐬㐭㐮㐯㐰㐱㐲㐳㐴㐵㐶㐷㐸㐹㐺㐻㐼㐽㐾㐿㑀㑁㑂㑃㑄㑅㑆㑇㑈㑉㑊㑋㑌㑍㑎㑏㑐㑑㑒㑓㑔㑕㑖㑗㑘㑙㑚㑛㑜㑝㑞㑟㑠㑡㑢㑣㑤㑥㑦㑧㑨㑩㑪㑫㑬㑭㑮㑯㑰㑱㑲㑳㑴㑵㑶㑷㑸㑹㑺㑻㑼㑽㑾㑿㒀㒁㒂㒃㒄㒅㒆㒇㒈㒉㒊㒋㒌㒍㒎㒏㒐㒑㒒㒓㒔㒕㒖㒗㒘㒙㒚㒛㒜㒝㒞㒟㒠㒡㒢㒣㒤㒥㒦㒧㒨㒩㒪㒫㒬㒭㒮㒯㒰㒱㒲㒳㒴㒵㒶㒷㒸㒹㒺㒻㒼㒽㒾㒿㓀㓁㓂㓃㓄㓅㓆㓇㓈㓉㓊㓋㓌㓍㓎㓏㓐㓑㓒㓓㓔㓕㓖㓗㓘㓙㓚㓛㓜㓝㓞㓟㓠㓡㓢㓣㓤㓥㓦㓧㓨㓩㓪㓫㓬㓭㓮㓯㓰㓱㓲㓳㓴㓵㓶㓷㓸㓹㓺㓻㓼㓽㓾㓿㔀㔁㔂㔃㔄㔅㔆㔇㔈㔉㔊㔋㔌㔍㔎㔏㔐㔑㔒㔓㔔㔕㔖㔗㔘㔙㔚㔛㔜㔝㔞㔟㔠㔡㔢㔣㔤㔥㔦㔧㔨㔩㔪㔫㔬㔭㔮㔯㔰㔱㔲㔳㔴㔵㔶㔷㔸㔹㔺㔻㔼㔽㔾㔿㕀㕁㕂㕃㕄㕅㕆㕇㕈㕉㕊㕋㕌㕍㕎㕏㕐㕑㕒㕓㕔㕕㕖㕗㕘㕙㕚㕛㕜㕝㕞㕟㕠㕡㕢㕣㕤㕥㕦㕧㕨㕩㕪㕫㕬㕭㕮㕯㕰㕱㕲㕳㕴㕵㕶㕷㕸㕹㕺㕻㕼㕽㕾㕿㖀㖁㖂㖃㖄㖅㖆㖇㖈㖉㖊㖋㖌㖍㖎㖏㖐㖑㖒㖓㖔㖕㖖㖗㖘㖙㖚㖛㖜㖝㖞㖟㖠㖡㖢㖣㖤㖥㖦㖧㖨㖩㖪㖫㖬㖭㖮㖯㖰㖱㖲㖳㖴㖵㖶㖷㖸㖹㖺㖻㖼㖽㖾㖿㗀㗁㗂㗃㗄㗅㗆㗇㗈㗉㗊㗋㗌㗍㗎㗏㗐㗑㗒㗓㗔㗕㗖㗗㗘㗙㗚㗛㗜㗝㗞㗟㗠㗡㗢㗣㗤㗥㗦㗧㗨㗩㗪㗫㗬㗭㗮㗯㗰㗱㗲㗳㗴㗵㗶㗷㗸㗹㗺㗻㗼㗽㗾㗿㘀㘁㘂㘃㘄㘅㘆㘇㘈㘉㘊㘋㘌㘍㘎㘏㘐㘑㘒㘓㘔㘕㘖㘗㘘㘙㘚㘛㘜㘝㘞㘟㘠㘡㘢㘣㘤㘥㘦㘧㘨㘩㘪㘫㘬㘭㘮㘯㘰㘱㘲㘳㘴㘵㘶㘷㘸㘹㘺㘻㘼㘽㘾㘿㙀㙁㙂㙃㙄㙅㙆㙇㙈㙉㙊㙋㙌㙍㙎㙏㙐㙑㙒㙓㙔㙕㙖㙗㙘㙙㙚㙛㙜㙝㙞㙟㙠㙡㙢㙣㙤㙥㙦㙧㙨㙩㙪㙫㙬㙭㙮㙯㙰㙱㙲㙳㙴㙵㙶㙷㙸㙹㙺㙻㙼㙽㙾㙿㚀㚁㚂㚃㚄㚅㚆㚇㚈㚉㚊㚋㚌㚍㚎㚏㚐㚑㚒㚓㚔㚕㚖㚗㚘㚙㚚㚛㚜㚝㚞㚟㚠㚡㚢㚣㚤㚥㚦㚧㚨㚩㚪㚫㚬㚭㚮㚯㚰㚱㚲㚳㚴㚵㚶㚷㚸㚹㚺㚻㚼㚽㚾㚿㜀㜁㜂㜃㜄㜅㜆㜇㜈㜉㜊㜋㜌㜍㜎㜏㜐㜑㜒㜓㜔㜕㜖㜗㜘㜙㜚㜛㜜㜝㜞㜟㜠㜡㜢㜣㜤㜥㜦㜧㜨㜩㜪㜫㜬㜭㜮㜯㜰㜱㜲㜳㜴㜵㜶㜷㜸㜹㜺㜻㜼㜽㜾㜿㝀㝁㝂㝃㝄㝅㝆㝇㝈㝉㝊㝋㝌㝍㝎㝏㝐㝑㝒㝓㝔㝕㝖㝗㝘㝙㝚㝛㝜㝝㝞㝟㝠㝡㝢㝣㝤㝥㝦㝧㝨㝩㝪㝫㝬㝭㝮㝯㝰㝱㝲㝳㝴㝵㝶㝷㝸㝹㝺㝻㝼㝽㝾㝿㞀㞁㞂㞃㞄㞅㞆㞇㞈㞉㞊㞋㞌㞍㞎㞏㞐㞑㞒㞓㞔㞕㞖㞗㞘㞙㞚㞛㞜㞝㞞㞟㞠㞡㞢㞣㞤㞥㞦㞧㞨㞩㞪㞫㞬㞭㞮㞯㞰㞱㞲㞳㞴㞵㞶㞷㞸㞹㞺㞻㞼㞽㞾㞿㟀㟁㟂㟃㟄㟅㟆㟇㟈㟉㟊㟋㟌㟍㟎㟏㟐㟑㟒㟓㟔㟕㟖㟗㟘㟙㟚㟛㟜㟝㟞㟟㟠㟡㟢㟣㟤㟥㟦㟧㟨㟩㟪㟫㟬㟭㟮㟯㟰㟱㟲㟳㟴㟵㟶㟷㟸㟹㟺㟻㟼㟽㟾㟿㠀㠁㠂㠃㠄㠅㠆㠇㠈㠉㠊㠋㠌㠍㠎㠏㠐㠑㠒㠓㠔㠕㠖㠗㠘㠙㠚㠛㠜㠝㠞㠟㠠㠡㠢㠣㠤㠥㠦㠧㠨㠩㠪㠫㠬㠭㠮㠯㠰㠱㠲㠳㠴㠵㠶㠷㠸㠹㠺㠻㠼㠽㠾㠿㡀㡁㡂㡃㡄㡅㡆㡇㡈㡉㡊㡋㡌㡍㡎㡏㡐㡑㡒㡓㡔㡕㡖㡗㡘㡙㡚㡛㡜㡝㡞㡟㡠㡡㡢㡣㡤㡥㡦㡧㡨㡩㡪㡫㡬㡭㡮㡯㡰㡱㡲㡳㡴㡵㡶㡷㡸㡹㡺㡻㡼㡽㡾㡿㢀㢁㢂㢃㢄㢅㢆㢇㢈㢉㢊㢋㢌㢍㢎㢏㢐㢑㢒㢓㢔㢕㢖㢗㢘㢙㢚㢛㢜㢝㢞㢟㢠㢡㢢㢣㢤㢥㢦㢧㢨㢩㢪㢫㢬㢭㢮㢯㢰㢱㢲㢳㢴㢵㢶㢷㢸㢹㢺㢻㢼㢽㢾㢿㣀㣁㣂㣃㣄㣅㣆㣇㣈㣉㣊㣋㣌㣍㣎㣏㣐㣑㣒㣓㣔㣕㣖㣗㣘㣙㣚㣛㣜㣝㣞㣟㣠㣡㣢㣣㣤㣥㣦㣧㣨㣩㣪㣫㣬㣭㣮㣯㣰㣱㣲㣳㣴㣵㣶㣷㣸㣹㣺㣻㣼㣽㣾㣿㤀㤁㤂㤃㤄㤅㤆㤇㤈㤉㤊㤋㤌㤍㤎㤏㤐㤑㤒㤓㤔㤕㤖㤗㤘㤙㤚㤛㤜㤝㤞㤟㤠㤡㤢㤣㤤㤥㤦㤧㤨㤩㤪㤫㤬㤭㤮㤯㤰㤱㤲㤳㤴㤵㤶㤷㤸㤹㤺㤻㤼㤽㤾㤿㥀㥁㥂㥃㥄㥅㥆㥇㥈㥉㥊㥋㥌㥍㥎㥏㥐㥑㥒㥓㥔㥕㥖㥗㥘㥙㥚㥛㥜㥝㥞㥟㥠㥡㥢㥣㥤㥥㥦㥧㥨㥩㥪㥫㥬㥭㥮㥯㥰㥱㥲㥳㥴㥵㥶㥷㥸㥹㥺㥻㥼㥽㥾㥿㦀㦁㦂㦃㦄㦅㦆㦇㦈㦉㦊㦋㦌㦍㦎㦏㦐㦑㦒㦓㦔㦕㦖㦗㦘㦙㦚㦛㦜㦝㦞㦟㦠㦡㦢㦣㦤㦥㦦㦧㦨㦩㦪㦫㦬㦭㦮㦯㦰㦱㦲㦳㦴㦵㦶㦷㦸㦹㦺㦻㦼㦽㦾㦿㧀㧁㧂㧃㧄㧅㧆㧇㧈㧉㧊㧋㧌㧍㧎㧏㧐㧑㧒㧓㧔㧕㧖㧗㧘㧙㧚㧛㧜㧝㧞㧟㧠㧡㧢㧣㧤㧥㧦㧧㧨㧩㧪㧫㧬㧭㧮㧯㧰㧱㧲㧳㧴㧵㧶㧷㧸㧹㧺㧻㧼㧽㧾㧿㨀㨁㨂㨃㨄㨅㨆㨇㨈㨉㨊㨋㨌㨍㨎㨏㨐㨑㨒㨓㨔㨕㨖㨗㨘㨙㨚㨛㨜㨝㨞㨟㨠㨡㨢㨣㨤㨥㨦㨧㨨㨩㨪㨫㨬㨭㨮㨯㨰㨱㨲㨳㨴㨵㨶㨷㨸㨹㨺㨻㨼㨽㨾㨿㩀㩁㩂㩃㩄㩅㩆㩇㩈㩉㩊㩋㩌㩍㩎㩏㩐㩑㩒㩓㩔㩕㩖㩗㩘㩙㩚㩛㩜㩝㩞㩟㩠㩡㩢㩣㩤㩥㩦㩧㩨㩩㩪㩫㩬㩭㩮㩯㩰㩱㩲㩳㩴㩵㩶㩷㩸㩹㩺㩻㩼㩽㩾㩿㪀㪁㪂㪃㪄㪅㪆㪇㪈㪉㪊㪋㪌㪍㪎㪏㪐㪑㪒㪓㪔㪕㪖㪗㪘㪙㪚㪛㪜㪝㪞㪟㪠㪡㪢㪣㪤㪥㪦㪧㪨㪩㪪㪫㪬㪭㪮㪯㪰㪱㪲㪳㪴㪵㪶㪷㪸㪹㪺㪻㪼㪽㪾㪿㫀㫁㫂㫃㫄㫅㫆㫇㫈㫉㫊㫋㫌㫍㫎㫏㫐㫑㫒㫓㫔㫕㫖㫗㫘㫙㫚㫛㫜㫝㫞㫟㫠㫡㫢㫣㫤㫥㫦㫧㫨㫩㫪㫫㫬㫭㫮㫯㫰㫱㫲㫳㫴㫵㫶㫷㫸㫹㫺㫻㫼㫽㫾㫿㬀㬁㬂㬃㬄㬅㬆㬇㬈㬉㬊㬋㬌㬍㬎㬏㬐㬑㬒㬓㬔㬕㬖㬗㬘㬙㬚㬛㬜㬝㬞㬟㬠㬡㬢㬣㬤㬥㬦㬧㬨㬩㬪㬫㬬㬭㬮㬯㬰㬱㬲㬳㬴㬵㬶㬷㬸㬹㬺㬻㬼㬽㬾㬿㭀㭁㭂㭃㭄㭅㭆㭇㭈㭉㭊㭋㭌㭍㭎㭏㭐㭑㭒㭓㭔㭕㭖㭗㭘㭙㭚㭛㭜㭝㭞㭟㭠㭡㭢㭣㭤㭥㭦㭧㭨㭩㭪㭫㭬㭭㭮㭯㭰㭱㭲㭳㭴㭵㭶㭷㭸㭹㭺㭻㭼㭽㭾㭿㮀㮁㮂㮃㮄㮅㮆㮇㮈㮉㮊㮋㮌㮍㮎㮏㮐㮑㮒㮓㮔㮕㮖㮗㮘㮙㮚㮛㮜㮝㮞㮟㮠㮡㮢㮣㮤㮥㮦㮧㮨㮩㮪㮫㮬㮭㮮㮯㮰㮱㮲㮳㮴㮵㮶㮷㮸㮹㮺㮻㮼㮽㮾㮿㯀㯁㯂㯃㯄㯅㯆㯇㯈㯉㯊㯋㯌㯍㯎㯏㯐㯑㯒㯓㯔㯕㯖㯗㯘㯙㯚㯛㯜㯝㯞㯟㯠㯡㯢㯣㯤㯥㯦㯧㯨㯩㯪㯫㯬㯭㯮㯯㯰㯱㯲㯳㯴㯵㯶㯷㯸㯹㯺㯻㯼㯽㯾㯿㰀㰁㰂㰃㰄㰅㰆㰇㰈㰉㰊㰋㰌㰍㰎㰏㰐㰑㰒㰓㰔㰕㰖㰗㰘㰙㰚㰛㰜㰝㰞㰟㰠㰡㰢㰣㰤㰥㰦㰧㰨㰩㰪㰫㰬㰭㰮㰯㰰㰱㰲㰳㰴㰵㰶㰷㰸㰹㰺㰻㰼㰽㰾㰿㱀㱁㱂㱃㱄㱅㱆㱇㱈㱉㱊㱋㱌㱍㱎㱏㱐㱑㱒㱓㱔㱕㱖㱗㱘㱙㱚㱛㱜㱝㱞㱟㱠㱡㱢㱣㱤㱥㱦㱧㱨㱩㱪㱫㱬㱭㱮㱯㱰㱱㱲㱳㱴㱵㱶㱷㱸㱹㱺㱻㱼㱽㱾㱿㲀㲁㲂㲃㲄㲅㲆㲇㲈㲉㲊㲋㲌㲍㲎㲏㲐㲑㲒㲓㲔㲕㲖㲗㲘㲙㲚㲛㲜㲝㲞㲟㲠㲡㲢㲣㲤㲥㲦㲧㲨㲩㲪㲫㲬㲭㲮㲯㲰㲱㲲㲳㲴㲵㲶㲷㲸㲹㲺㲻㲼㲽㲾㲿㳀㳁㳂㳃㳄㳅㳆㳇㳈㳉㳊㳋㳌㳍㳎㳏㳐㳑㳒㳓㳔㳕㳖㳗㳘㳙㳚㳛㳜㳝㳞㳟㳠㳡㳢㳣㳤㳥㳦㳧㳨㳩㳪㳫㳬㳭㳮㳯㳰㳱㳲㳳㳴㳵㳶㳷㳸㳹㳺㳻㳼㳽㳾㳿㴀㴁㴂㴃㴄㴅㴆㴇㴈㴉㴊㴋㴌㴍㴎㴏㴐㴑㴒㴓㴔㴕㴖㴗㴘㴙㴚㴛㴜㴝㴞㴟㴠㴡㴢㴣㴤㴥㴦㴧㴨㴩㴪㴫㴬㴭㴮㴯㴰㴱㴲㴳㴴㴵㴶㴷㴸㴹㴺㴻㴼㴽㴾㴿㵀㵁㵂㵃㵄㵅㵆㵇㵈㵉㵊㵋㵌㵍㵎㵏㵐㵑㵒㵓㵔㵕㵖㵗㵘㵙㵚㵛㵜㵝㵞㵟㵠㵡㵢㵣㵤㵥㵦㵧㵨㵩㵪㵫㵬㵭㵮㵯㵰㵱㵲㵳㵴㵵㵶㵷㵸㵹㵺㵻㵼㵽㵾㵿㶀㶁㶂㶃㶄㶅㶆㶇㶈㶉㶊㶋㶌㶍㶎㶏㶐㶑㶒㶓㶔㶕㶖㶗㶘㶙㶚㶛㶜㶝㶞㶟㶠㶡㶢㶣㶤㶥㶦㶧㶨㶩㶪㶫㶬㶭㶮㶯㶰㶱㶲㶳㶴㶵㶶㶷㶸㶹㶺㶻㶼㶽㶾㶿㷀㷁㷂㷃㷄㷅㷆㷇㷈㷉㷊㷋㷌㷍㷎㷏㷐㷑㷒㷓㷔㷕㷖㷗㷘㷙㷚㷛㷜㷝㷞㷟㷠㷡㷢㷣㷤㷥㷦㷧㷨㷩㷪㷫㷬㷭㷮㷯㷰㷱㷲㷳㷴㷵㷶㷷㷸㷹㷺㷻㷼㷽㷾㷿㸀㸁㸂㸃㸄㸅㸆㸇㸈㸉㸊㸋㸌㸍㸎㸏㸐㸑㸒㸓㸔㸕㸖㸗㸘㸙㸚㸛㸜㸝㸞㸟㸠㸡㸢㸣㸤㸥㸦㸧㸨㸩㸪㸫㸬㸭㸮㸯㸰㸱㸲㸳㸴㸵㸶㸷㸸㸹㸺㸻㸼㸽㸾㸿㹀㹁㹂㹃㹄㹅㹆㹇㹈㹉㹊㹋㹌㹍㹎㹏㹐㹑㹒㹓㹔㹕㹖㹗㹘㹙㹚㹛㹜㹝㹞㹟㹠㹡㹢㹣㹤㹥㹦㹧㹨㹩㹪㹫㹬㹭㹮㹯㹰㹱㹲㹳㹴㹵㹶㹷㹸㹹㹺㹻㹼㹽㹾㹿㺀㺁㺂㺃㺄㺅㺆㺇㺈㺉㺊㺋㺌㺍㺎㺏㺐㺑㺒㺓㺔㺕㺖㺗㺘㺙㺚㺛㺜㺝㺞㺟㺠㺡㺢㺣㺤㺥㺦㺧㺨㺩㺪㺫㺬㺭㺮㺯㺰㺱㺲㺳㺴㺵㺶㺷㺸㺹㺺㺻㺼㺽㺾㺿㻀㻁㻂㻃㻄㻅㻆㻇㻈㻉㻊㻋㻌㻍㻎㻏㻐㻑㻒㻓㻔㻕㻖㻗㻘㻙㻚㻛㻜㻝㻞㻟㻠㻡㻢㻣㻤㻥㻦㻧㻨㻩㻪㻫㻬㻭㻮㻯㻰㻱㻲㻳㻴㻵㻶㻷㻸㻹㻺㻻㻼㻽㻾㻿㼀㼁㼂㼃㼄㼅㼆㼇㼈㼉㼊㼋㼌㼍㼎㼏㼐㼑㼒㼓㼔㼕㼖㼗㼘㼙㼚㼛㼜㼝㼞㼟㼠㼡㼢㼣㼤㼥㼦㼧㼨㼩㼪㼫㼬㼭㼮㼯㼰㼱㼲㼳㼴㼵㼶㼷㼸㼹㼺㼻㼼㼽㼾㼿㽀㽁㽂㽃㽄㽅㽆㽇㽈㽉㽊㽋㽌㽍㽎㽏㽐㽑㽒㽓㽔㽕㽖㽗㽘㽙㽚㽛㽜㽝㽞㽟㽠㽡㽢㽣㽤㽥㽦㽧㽨㽩㽪㽫㽬㽭㽮㽯㽰㽱㽲㽳㽴㽵㽶㽷㽸㽹㽺㽻㽼㽽㽾㽿㿀㿁㿂㿃㿄㿅㿆㿇㿈㿉㿊㿋㿌㿍㿎㿏㿐㿑㿒㿓㿔㿕㿖㿗㿘㿙㿚㿛㿜㿝㿞㿟㿠㿡㿢㿣㿤㿥㿦㿧㿨㿩㿪㿫㿬㿭㿮㿯㿰㿱㿲㿳㿴㿵㿶㿷㿸㿹㿺㿻㿼㿽㿾㿿

曲自体がメタレベルで場所と結びついた事例としては③④があるが、どちらもカイ2乗検定結果が有意ではなく関連性は認められなかった。

V. 2022-23年調査結果との比較

I章で述べたように、本稿で分析に使用したデータは1992-93年に行ったアンケート調査によって得られたものであるが、それからちょうど30年目にあたる2022-23年にもほぼ同じ条件でアンケート調査を行っている。その結果についてはすでに内田(2024)として報告済みだが、この2回のアンケート調査に共通して題材として用いた楽曲は30曲あったので、III章で記述した楽曲ごとの特徴を2022-23年の調査結果と比較することによって、30年間の変化につ

いて考察する。

まず、両者の明らかな違いとして「曲を知っている」と回答した人の数が挙げられる。表38は、それぞれの曲を聞いて「曲名を知っている」と回答した人の%、「一度も聞いたことがない」と回答した人の%、そして「曲を聞いてイメージした場所」の質問に対して「なし」や無回答で回答した人(表中では「イメージなし」と表記)の%を、一覧表にしたものである。①を除くほぼすべての曲において、2022-23年の結果は1992-93年と比べて「曲名を知っている」と回答した人の%が減少し「一度も聞いたことがない」と回答した人の%が増加している。減少した%の幅が最も大きかったのは⑲でその差は82.0ポイント、1992-3年の時点ではほとんどの人が知っていた曲が30年後には84.7%の人が「聞いたことがない」と回答した。同様に⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿㏀㏁㏂㏃㏄㏅㏆㏇㏈㏉㏊㏋㏌㏍㏎㏏㏐㏑㏒㏓㏔㏕㏖㏗㏘㏙㏚㏛㏜㏝㏞㏟㏠㏡㏢㏣㏤㏥㏦㏧㏨㏩㏪㏫㏬㏭㏮㏯㏰㏱㏲㏳㏴㏵㏶㏷㏸㏹㏺㏻㏼㏽㏾㏿㐀㐁㐂㐃㐄㐅㐆㐇㐈㐉㐊㐋㐌㐍㐎㐏㐐㐑㐒㐓㐔㐕㐖㐗㐘㐙㐚㐛㐜㐝㐞㐟㐠㐡㐢㐣㐤㐥㐦㐧㐨㐩㐪㐫㐬㐭㐮㐯㐰㐱㐲㐳㐴㐵㐶㐷㐸㐹㐺㐻㐼㐽㐾㐿㑀㑁㑂㑃㑄㑅㑆㑇㑈㑉㑊㑋㑌㑍㑎㑏㑐㑑㑒㑓㑔㑕㑖㑗㑘㑙㑚㑛㑜㑝㑞㑟㑠㑡㑢㑣㑤㑥㑦㑧㑨㑩㑪㑫㑬㑭㑮㑯㑰㑱㑲㑳㑴㑵㑶㑷㑸㑹㑺㑻㑼㑽㑾㑿㒀㒁㒂㒃㒄㒅㒆㒇㒈㒉㒊㒋㒌㒍㒎㒏㒐㒑㒒㒓㒔㒕㒖㒗㒘㒙㒚㒛㒜㒝㒞㒟㒠㒡㒢㒣㒤㒥㒦㒧㒨㒩㒪㒫㒬㒭㒮㒯㒰㒱㒲㒳㒴㒵㒶㒷㒸㒹㒺㒻㒼㒽㒾㒿㓀㓁㓂㓃㓄㓅㓆㓇㓈㓉㓊㓋㓌㓍㓎㓏㓐㓑㓒㓓㓔㓕㓖㓗㓘㓙㓚㓛㓜㓝㓞㓟㓠㓡㓢㓣㓤㓥㓦㓧㓨㓩㓪㓫㓬㓭㓮㓯㓰㓱㓲㓳㓴㓵㓶㓷㓸㓹㓺㓻㓼㓽㓾㓿㔀㔁㔂㔃㔄㔅㔆㔇㔈㔉㔊㔋㔌㔍㔎㔏㔐㔑㔒㔓㔔㔕㔖㔗㔘㔙㔚㔛㔜㔝㔞㔟㔠㔡㔢㔣㔤㔥㔦㔧㔨㔩㔪㔫㔬㔭㔮㔯㔰㔱㔲㔳㔴㔵㔶㔷㔸㔹㔺㔻㔼㔽㔾㔿㕀㕁㕂㕃㕄㕅㕆㕇㕈㕉㕊㕋㕌㕍㕎㕏㕐㕑㕒㕓㕔㕕㕖㕗㕘㕙㕚㕛㕜㕝㕞㕟㕠㕡㕢㕣㕤㕥㕦㕧㕨㕩㕪㕫㕬㕭㕮㕯㕰㕱㕲㕳㕴㕵㕶㕷㕸㕹㕺㕻㕼㕽㕾㕿㖀㖁㖂㖃㖄㖅㖆㖇㖈㖉㖊㖋㖌㖍㖎㖏㖐㖑㖒㖓㖔㖕㖖㖗㖘㖙㖚㖛㖜㖝㖞㖟㖠㖡㖢㖣㖤㖥㖦㖧㖨㖩㖪㖫㖬㖭㖮㖯㖰㖱㖲㖳㖴㖵㖶㖷㖸㖹㖺㖻㖼㖽㖾㖿㗀㗁㗂㗃㗄㗅㗆㗇㗈㗉㗊㗋㗌㗍㗎㗏㗐㗑㗒㗓㗔㗕㗖㗗㗘㗙㗚㗛㗜㗝㗞㗟㗠㗡㗢㗣㗤㗥㗦㗧㗨㗩㗪㗫㗬㗭㗮㗯㗰㗱㗲㗳㗴㗵㗶㗷㗸㗹㗺㗻㗼㗽㗾㗿㘀㘁㘂㘃㘄㘅㘆㘇㘈㘉㘊㘋㘌㘍㘎㘏㘐㘑㘒㘓㘔㘕㘖㘗㘘㘙㘚㘛㘜㘝㘞㘟㘠㘡㘢㘣㘤㘥㘦㘧㘨㘩㘪㘫㘬㘭㘮㘯㘰㘱㘲㘳㘴㘵㘶㘷㘸㘹㘺㘻㘼㘽㘾㘿㙀㙁㙂㙃㙄㙅㙆㙇㙈㙉㙊㙋㙌㙍㙎㙏㙐㙑㙒㙓㙔㙕㙖㙗㙘㙙㙚㙛㙜㙝㙞㙟㙠㙡㙢㙣㙤㙥㙦㙧㙨㙩㙪㙫㙬㙭㙮㙯㙰㙱㙲㙳㙴㙵㙶㙷㙸㙹㙺㙻㙼㙽㙾㙿㚀㚁㚂㚃㚄㚅㚆㚇㚈㚉㚊㚋㚌㚍㚎㚏㚐㚑㚒㚓㚔㚕㚖㚗㚘㚙㚚㚛㚜㚝㚞㚟㚠㚡㚢㚣㚤㚥㚦㚧㚨㚩㚪㚫㚬㚭㚮㚯㚰㚱㚲㚳㚴㚵㚶㚷㚸㚹㚺㚻㚼㚽㚾㚿㜀㜁㜂㜃㜄㜅㜆㜇㜈㜉㜊㜋㜌㜍㜎㜏㜐㜑㜒㜓㜔㜕㜖㜗㜘㜙㜚㜛㜜㜝㜞㜟㜠㜡㜢㜣

の歌謡曲についてはどれも50ポイント以上減少し、どの曲も「聞いたことがない」回答者が激増した。

これは2022-3年の回答者からすれば最も新しい③⑤ですら39年前の曲で、どの曲も自分が生まれるずっと以前のヒット曲であるから当然とも受け取れるが、同様にクラシックの楽曲である②⑦⑨⑫も50ポイント以上%が減少している。クラシック曲の中には③⑥⑧⑩⑪⑭のように1992-3年の調査でも知名度の低い曲があり、1992-3年の調査ではクラシック曲にはよく知られている楽曲とほとんど知られていない楽曲があったわけだが、2022-3年の調査では①と⑤を除くすべてのクラシック曲でほとんどの人が「一度も聞いたことがない」という状況になった。もしも楽曲の作曲年が古いので「聞いたことがない」という理屈が成り立つのなら、1992-3年の回答者にとっても100年以上前に作られたクラシック曲はどれも知名度が低くなるはずである。もちろんそのようなことはない。何世紀に作曲されようが関係なく、クラシック曲の中に有名な曲とそうでない曲が存在するだけのことである。そう考えると流行歌だからといって必ずしも古い曲がすべて忘れ去られるわけではないことにも思い当たる。1992-3年の回答者にとってはるか昔の戦前の歌である⑳や㉑でも、全員が知っているとは言わないが半数程度は「聞いたこと」くらいはあったと回答しているし、そもそも全体の8割9割が「聞いたことはある」と回答した㉒や㉓は、調査した時点より30~40年も前の懐メロであった。

さらに問題となると思われるのは「イメージなし」の%も大幅に増加したことである。今回の調査で題材として取り上げた楽曲は、どれも音楽によってどこかの場所イメージを表現しようとしている事例を選んでおり、通常の曲よりは場所を想起しやすいはずである。にもかかわらず、ほとんどの楽曲において10%以上、多いものでは40%近くの人が「イメージなし」と

いう2022-23年調査の状況は看過してよいものだろうか。調査結果の違いの原因としては、調査時の状況や回答した学生たちのやる気のなさなども関係するだろうから、この調査結果だけをもとにして一概には言えないが、音楽を聞いて「何もイメージが湧かない」学生が現実が増えたのだとしたら、それにはなにがしかの理由があるはずである。いずれにせよ、この30年の間に楽曲に対する知識や興味が減少したかのように見えるのは事実で、その結果として「曲名を知っている」「聞いたことがある」と「その曲から連想される場所」とのクロス表分析(カイ2乗検定)の結果を比較したとき、多くの楽曲において有意水準が低下していることがわかる(表37)。

話をいったん戻し、次はそれぞれの楽曲から「イメージされた場所」について比較してみよう。クラシック曲については、曲の知名度と場所イメージの定着度との関係を知るために、あえて題材とした楽曲に有名な曲とそうではない曲を混ぜたため、②③⑥⑧⑩⑪⑭のように1992-3年と2022-3年のいずれの調査においても、回答者全体としては明確な場所イメージの存在を見ることができなかった事例もあった。その中で2022-3年の調査結果では①③⑨について知名度が高かった⑤はクラシック曲の中では「モルダウ川」や「チェコ」の場所イメージと結びついていることが示された。しかし1992-3年の結果(表5)と比べるとこの曲を聞いて「モルダウ(ブルタヴァ)川」をイメージした人の割合は22.7%⇒7.5%、「チェコ(ボヘミア)」の割合も5.5%⇒1.2%で、30年前の調査結果と比べると比率が低下していたことがわかる。⑨の場合もこの曲から「スペイン」をイメージした人の割合は14.6%⇒2.3%に、⑬における「グランド・キャニオン」の割合は8.2%⇒0.0%「アメリカ合衆国」の割合は17.6%⇒2.3%に激減した。

同様の事象は民族音楽を題材に選んだ楽曲に

もあてはまり、⑲における「パリ、フランス」41.6%⇒22.0%、⑳における「モスクワ、ロシア（ソ連）」25.5%⇒1.7%、㉑における「ペルー、アンデス」45.1%⇒5.1%、㉒における「ハワイ」67.5%⇒25.0%とどれも大幅に減少した。これらの楽曲は曲のタイトルを含め本来的には有名曲なので、楽曲が場所イメージと結びつくためには曲名や曲自体についての言語的知識（IV章で述べたところのCタイプ）が関わっている可能性もある。

これと同様に、㉓～㉕も曲名や歌詞に関する言語的・文脈的な知識がないと場所イメージを想起しづらいので、曲自体が古い（流行らない）ことで接触する機会が少なくなることから、かつては一般に記号化していた場所イメージとの関連を知らない人の数が増えることは容易に推測される。予想通り、楽曲が作られた当時の背景を知らないとしてこない㉖の「蘇州」3.2%⇒0.0%や、㉗の「津軽、青森」42.0%⇒1.1%、㉘における「湘南」22.0%⇒1.7%、㉙における「空港、飛行機」58.8%⇒4.0%など軒並み減少しているし、㉚と同様㉛における「中国」も10.6%⇒4.0%となっている。

しかし、こうした言語的な文脈との関係を避けるためあえて知名度の低い楽曲を選んだ㉜においても「中国」をイメージした人の割合は71.4%⇒43.5%とやはり減少しており、㉝における「インド」36.1%⇒20.9%、㉞における「アルプス、スイス」83.9%⇒52.5%、㉟における「ブラジル」40.0%⇒10.7%も同様に減少している。㊱㊲㊳㊴のような無名曲においても場所イメージとの結びつきの度合いが下がったという事実は、もはや曲名についての知識がないからとか古い曲なので曲自体をよく知らないから、という理由だけで説明できるものではない。㊵を聞いた際に五音音階に基づく東洋的なその曲調や二胡や古筝といった民族楽器の音色から（IV章で述べたところのAタイプとBタイプ）

総合的に「中国」らしさをイメージするといういわば地理的なリテラシーが不足していることが原因だと考えられる。㊶と㊷はいずれも西洋音楽の作曲家が中国風なイメージを表現しようとした楽曲だとみなすことができるが、㊶を聞いて「中国」をイメージした人の割合は16.5%⇒1.7%に、より中国色を強調した㊷においても65.5%⇒18.6%と激減している。㊸についてもこの曲から「アメリカ合衆国」をイメージした人の割合は24.3%⇒2.3%になり、かわりに最も多くイメージしたのは「教会」（42.9%）だった。このような地理的なリテラシーは単なる国名当てにとどまらない。㊹において「モルダウ川」や「チェコ」といった固有名詞の想起率が減少したことはすでに述べたが、この楽曲が音楽として表現している「川」のイメージを読み取ることができた人の割合も34.5%⇒9.2%に、㊺における精緻なまでの情景描写から「夜明け」を想起した人も10.2%⇒2.8%になってしまったのである。

一般的に音楽を聴くにあたって地理的なリテラシーがどの程度関与しているのか、そもそもそのようなリテラシーが必要なのか、など明らかにすべき問題は多々あるが、少なくともこの結果を見るかぎり、30年前と比べて音楽鑑賞に関する地理的なリテラシーは低下していると言えるだろう。さまざまなジャンルのいろいろな曲を広く浅く聞くことが結果的に音楽全般に対するリテラシーを高めることになるのではないかと思われるが、いわゆるタイプ重視で特定のジャンルの特定のミュージシャンの曲だけしか聞かない人が増えているとの言説も聞く（もちろん明確なデータが示されているわけではない）。本学の学生の音楽経験や音楽知識は世間一般の平均とあまり変わらないのではないかと推測されるので、このような現象は現代の20歳前後の若者全般に見られることなのかもしれない。

社会学では1990年代頃から文化的雑食性と

いて、クラシック音楽のようなハイカルチャーとロックやヒップホップのようなサブカルチャーとの間の垣根が低くなり多様な趣味・嗜好を持つ人が増える傾向にあると言われているが（小藪・山田 2012、片岡 2018）、今回の調査結果はこうした考え方にむしろ逆行するかのような内容となっている。この30年間における本学入学者の社会的文化的な所属階層の変化などその前に確認すべきことはいくつもあるが、もしも音楽鑑賞に関する地理的リテラシーが社会一般で低下しつつあるのであれば、たいへん興味深い現象であるといえよう。なぜならそれは音楽作品だけに限ったことではなく、文学や映画やマンガといった他の芸術作品についても当てはまると思われるからだ。さまざまなジャンルで

地理的リテラシーが低下するという事は、場所イメージの記号化の役割が小さくなっていることを示している可能性もある。これらのことは今後の研究課題としたい。

文 献

- 内田順文 1987. 地名・場所・場所イメージ—場所イメージの記号化に関する試論—. 人文地理39-5, 1-15.
- 内田順文 2024. 音楽作品における場所イメージの記号化について. 国土館人文学14号, 1-25.
- 片岡栄美 2018. 文化的オムニボア再考—複数ハビトゥスと文脈の概念からみた文化実践の多次元性と測定—. 駒沢社会学研究50号, 17-60.
- 小藪明生・山田真茂留 2012. 文化的雑食性の実相—ハイ=ポピュラー間分節の希薄化. 社会学評論63(4), 536-551.

九重連山稲星山周辺における地温環境

小山 拓志*・氏田 洵悠**

*本学地理・環境コース 准教授
**大分県立大分上野丘高校 教員

キーワード：地温，周氷河環境，低緯度，山岳地域，九重，九州

I. はじめに

世界各地の高標高域および両極を中心とした高緯度地域では、様々なタイプの周氷河現象および周氷河地形が確認されており、その形成の基本的要因は低温の気候環境にあると考えられている（たとえば、Washburn, 1979；フレンチ、1984；松岡、2002）。たとえば、周氷河地域において普遍的に認められる微地形の構造土は、地表物質の凍結・融解作用を基本として形成される（Washburn, 1973）。特に、地温によってコントロールされる凍結・融解深度や凍結の繰り返し頻度（凍結・融解）は、物質の移動限界深度や移動速度に影響を及ぼすとされている（たとえば、澤口、1987；澤口・小疇、1998）ため、周氷河地形の成因や維持機構の解明には、地温環境のモニタリングが不可欠となる。

以上の観点から、我が国ではこれまで、周氷河作用が卓越する日本アルプス（たとえば、高山地形研究グループ、1978；松岡、1991；Matsuoka, 1994, 1996, 1998；小山ほか、2015；小山、2024）を中心として、北上山地（澤口、1987）や大雪山（たとえば、Sone et al., 1988；高橋、1995）などで地温観測が実施されており、周氷河作用だけでなく永久凍土との関係についても論じられてきた。

一方で、低緯度地域である九州の山岳地においても、阿蘇中岳周辺や霧島山などの一部山岳地において、構造土と類似した微地形の分布が報告されている（小口、1992；横山、2002）。しかし、九州の山岳地においては、地温環境や物

質移動量に関する観測値が大幅に不足しているため、周氷河現象の実態についても未だ未解明な部分が多い。

そこで、本研究では、今後九州山岳地に分布する構造土に類似した微地形の成因を議論する際の基礎資料とするため、九重連山^D南部に位置する稲星山（1774m）周辺において地温観測を実施した。

II. 調査地域

九重連山は大分県南西部に位置しており、溶岩ドームと小型の成層火山が連なる火山群（九重火山）である（たとえば、小野、1963）。九州本土最高峰である中岳（1791m）を筆頭に1700m前後の山岳が聳え、周辺一帯は「阿蘇くじゅう国立公園」に指定されている。

九重火山は、宮城火砕流堆積物（約140-150ka：鎌田ほか、1998）の噴出以降に活動を開始した活火山である。もっとも新しい規模の大きな噴火は、約1700年前に黒岳溶岩ドームを形成した噴火であるとされ、九重火山の山麓には、九重火山起源の火砕流・泥流・岩屑なだれなどの堆積物からなる緩斜面が広がっている（鎌田、1997）。

九重火山は、地形的には西から涌蓋山系、久住山系、大船山系の3つに区分される。そのうち、調査地域である稲星山は久住山系に属しており、普通角閃石安山岩で構成されている。また、稲星山の山頂部には溶岩が分布し、南側には火砕流堆積物を主体とする斜面が広がっている

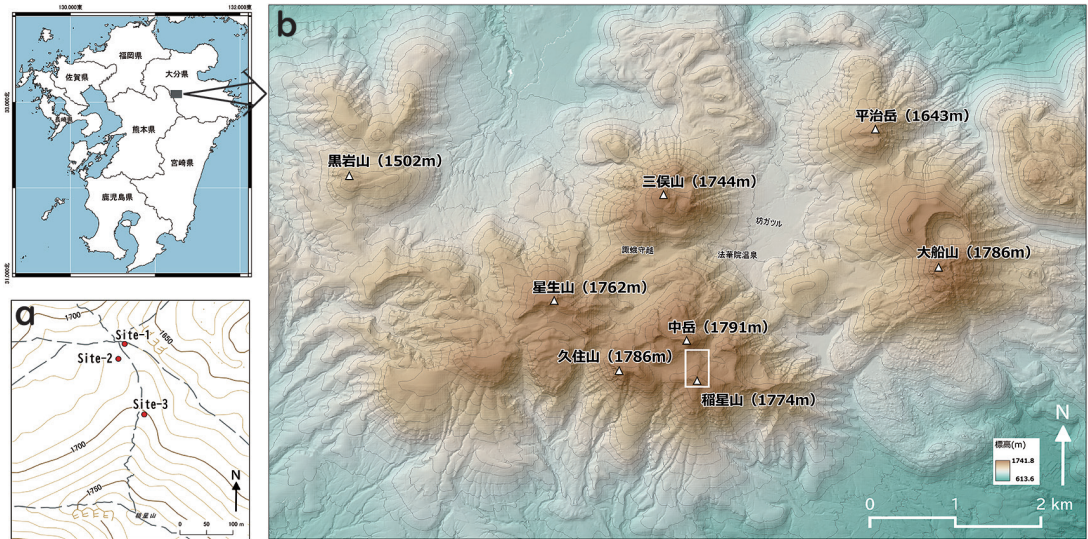


図1 調査地域概観と観測点の位置

aはb内の四角で囲った範囲。aは地理院地図標準地図、bは国土地理院5m-DEMを使用して作成した。bの等高線の間隔は50m。

る。この山頂部付近の溶岩からは約46 kaのK-Ar年代値が得られている(川辺ほか, 2015)。稲星山山頂の南東側には小規模な崩壊地形があり、これに対応して山麓に稲星越岩屑なだれ堆積物が分布する。岩屑なだれ堆積物中の木片の暦年校正後の ^{14}C 年代は約21kaと報告されている(川辺ほか, 2014)。

九重連山の植生は、標高1000~1780m付近の山頂帯に風衝地ハイデ状のミヤマキリシマ(*Rhododendron kiusianum*) - マイズルソウ(*Maianthemum dilatatum*) 群集が分布している。また、岩塊地にはコミネカエデ(*Acer micranthum*) - ナナカマド(*Sorbus commixta*) 群集が、山腹および谷壁にはミズナラ(*Quercus crispula*) - リョウブ(*Clethra*) 群集やクマシデ(*Carpinus japonica*) - コガクウツギ(*Hydrangea luteovenosa*) 群集が広がっている。一方、調査地域周辺では、矮性低木のコケモモ(*Vaccinium vitis-idaea*) が斜面上に群落をなしており、その他にコイワカンスゲ(*Carex chrysolepis*) やコメススキ(*Avenella flexuosa*)、ウツクシザサ

(*Sasa pulcherrima* Koidz.) といった風衝に強い植生がパッチ状に分布する。調査地域の概観と観測点の位置を図1に示した。

III. 観測方法

1. 観測点の概要と方法

地温観測点は、稲星山近辺に3地点(以下、Site-1、Site-2、Site-3と表記する)設置した。観測点周辺には、植被階状土の上面のようなほぼ平坦な砂礫地と、コケモモやスゲに植被された凸部がパッチ状、あるいは帯状に分布している。Site-1(1681m)とSite-2(1685m)は、稲星山とその北側に位置する中岳の鞍部に設置した。ここでは、砂礫地において地表から5cm深と20cm深で、植被地においては植生の下部から5cm深で地温を測定した。Site-3(1701m)は稲星山北向き斜面に設置し、砂礫地の5cm深でのみ地温を測定した。

細粒物質が露出する砂礫地は、いずれの地点もφ2cm程度の角礫層からなっており、φ15cm

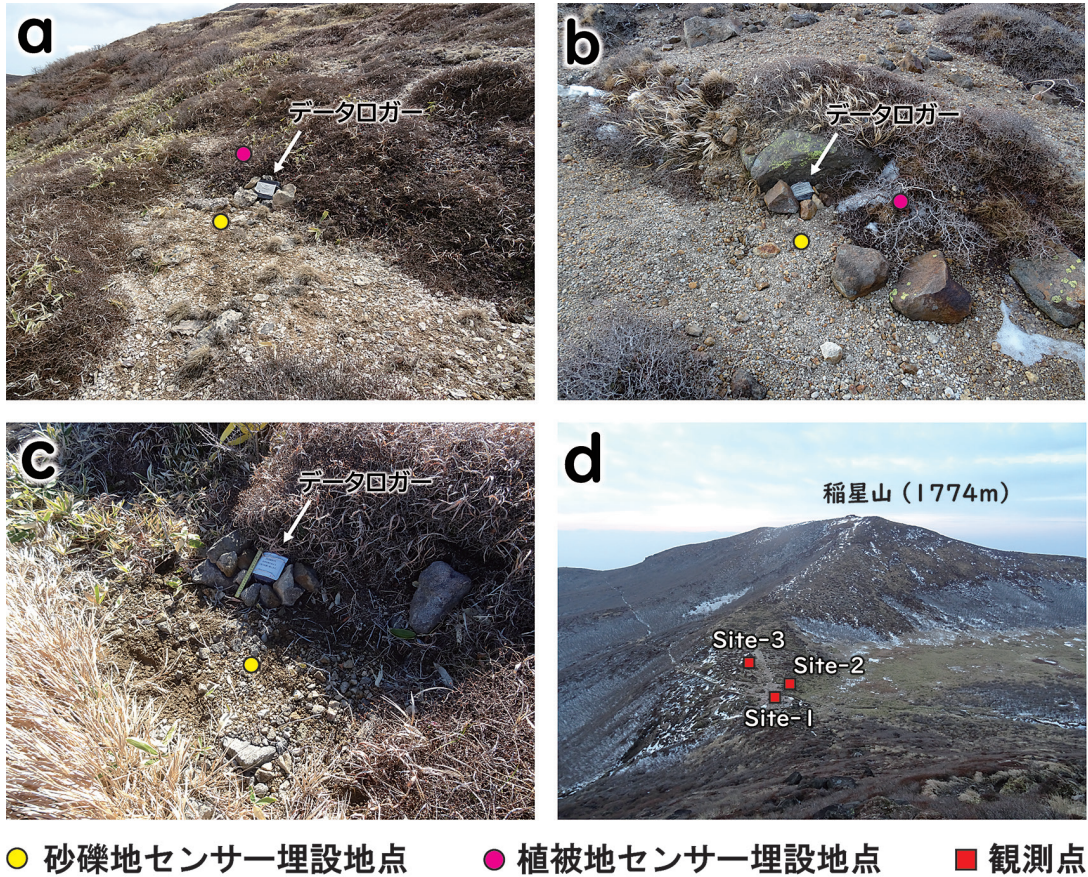


図2 観測点の概観

a : Site-1, b : Site-2, c : Site-3, d : 調査地域の遠景
 a, b, cは2015年12月14日, dは2016年3月25日 筆者撮影

程度の角礫が点在する。また、砂礫地および植被地ともに、地表から20cm深までは、細礫まじりの砂層である。また、2016年12月20日に観測点の積雪状況を確認したところ、どの観測点においても10~15cm程度の積雪が認められた。

各深度に埋設したサーミスタ温度センサー²⁾によって測定された地温は、データロガー(T&D社製サーミスタ式小型防水データロガーおんどとり Jr RTR-502)に60分間隔(24回/1日)で記録した。各観測点の概観を図2に示した。

2. 観測期間と欠測値の補完

観測は、2016年1月1日~2016年12月31日までの365日間行った。ただし、Site-2の砂礫地5cm深において、2016年9月1日より間欠的な欠測が続いた。そこで、正常に測温出来ていた2016年1月1日~2016年8月31日までの5,616個の観測値と、近接地点で計測したSite-2植被地における深度5cmの同期間の観測値との相関関係を単回帰分析によって評価した。その結果、相関係数 r は0.98という高い正の相関が得られた。また、回帰式に基づく決定係数 R^2 は0.99であったため、この回帰式を用いて2016年9月1日以降の欠測値を補完した。

なお、年平均地温は、日平均地温(1日24回の測定値の平均)の月間平均から算出した。また、本稿では澤口・小疇(1998)に従い、最初の凍結・融解が発生してから季節凍土層が形成されるまでの期間を凍結進行情、凍結・融解がほとんど生じなくなる期間を季節凍土層の形成期間として凍結期、季節凍土層の融解が始まった時点以降を融解進行情と呼ぶことにする。

IV. 結果と考察

1. Site-1 (1681m)

砂礫地で観測した各深度の年平均地温は、5cm深で9.0℃、20cm深で9.5℃であった。観測期間中の最低値は、それぞれ-7.8℃(1月)、-1.1℃(1月)で、最高値は32.8℃(7月)、22.4℃(8月)であった。

砂礫地5cm深において、0℃をはさむ一回の上下変化(以下、凍結・融解サイクルと表記する)が最初に生じたのは、2016年1月3日であった。その後、1月と2月で計5回の凍結・融解サイクルが生じ、3月に入ると1ヶ月間で15回と増加した。4月に入ると最低値が0℃未満になる日が出現しなくなり、次に凍結・融解サイクルが発生したのは2016年11月25日であった。その後、11月に計4回、12月に計5回発生した。よって、砂礫地における5cm深では、1年間で計29回の日周期の凍結・融解サイクルが生じたことになる。

観測期間が1月~12月までのため、前年あるいは翌年との関係や連続性を述べることはできないが、観測値をみる限り、砂礫地の5cm深における凍結進行情は11月下旬ごろから12月中旬ごろまでで、凍結期は12月中旬ごろから2月末ごろまでと推測される。また、融解進行情は3月の1ヶ月間とみなされる。ただし、凍結期においても凍結・融解サイクルが数日生じることがあるため、地温が一日を通して0℃未満になっている凍結期間の最長は、1月4日~1月

28日までの25日間程度に留まった。

一方、20cm深においては、凍結・融解サイクルが観測期間中に発生することはなかった。特に、1月23日から3月31日までの69日間はほぼ0℃で推移しており、その後は12月になっても日最低地温が0℃未満になることはなかった。一般に、このような地温が0℃で一定となる期間は、積雪(残雪)による断熱効果の影響と融雪の影響、すなわち凍結・融解の潜熱の影響で、凍土と融解水とが共存する状態であるとされる(ゼロカーテン:たとえば、Outcalt et al., 1990; 佐々木ほか, 2013)。つまり、この時期は地表面が積雪に覆われていた可能性が高いとともに、地温推移から凍結期と呼べるような凍結状態も認められないことから、20cm深まで凍結深度が及んでいなかったと推測される。一方で、同時期の5cm深ではゼロカーテン状態とはならず凍結・融解サイクルが生じていることから、地表面は積雪に被覆されていたものの、積雪の層厚あるいは粒子の形や比重、含水量、硬度といった雪質によって、外気温の影響を受けやすい状態であった可能性が高い。いずれにせよ、Site-1付近の砂礫地における季節凍土の形成期間(凍結期)は、冬季の約2か月(1月と2月)と推測され、その深度は少なくとも地表から20cm以浅と判断することができる。

また、5cm深の日較差の年平均値は7.0℃、20cm深では1.1℃と深度によって約6.0℃の差があった。一方、凍結進行情である12月の日較差平均値は5cm深で約2.3℃、20cm深ではほぼ0℃となり、融解進行情の3月を含む11月までの期間(5cm:8.6℃)に比して小さい値となった。すなわち、春季から夏季にかけて日較差が大きくなり、冬季に小さくなる傾向が認められた。

植被地5cm深においては、年平均地温が8.4℃と、砂礫地よりもやや低い値が得られた。観測期間中の最低値は-7.9℃(1月)、最高値は27.9℃(7月)で、砂礫地と比べ最低値はほ

ば変わらないものの、最高値は約5℃低温であった。植被地においては、凍結進行期の1月と2月にそれぞれ2回の凍結・融解サイクルが生じ、3月に入ると9回に増加した。その後は、4月中旬に1回生じたのみで、11月23日まで日最低地温が0℃未満になる日はなかった。11月24日以降は、11月中に3回、12月に6回の凍結・融解サイクルが生じた。よって、植被

地における5cm深では、1年間で計23回の日周期の凍結・融解サイクルが生じたことになる。

植被地における日較差の年平均値は5.2℃で、凍結進行期である12月の日較差の平均値が1.8℃、融解進行期の3月を含む11月末までの平均値が6.3℃と、いずれも砂礫地に比べ小さい値となった。Site-1における日最高・日最低地温の変化を図3に示した。

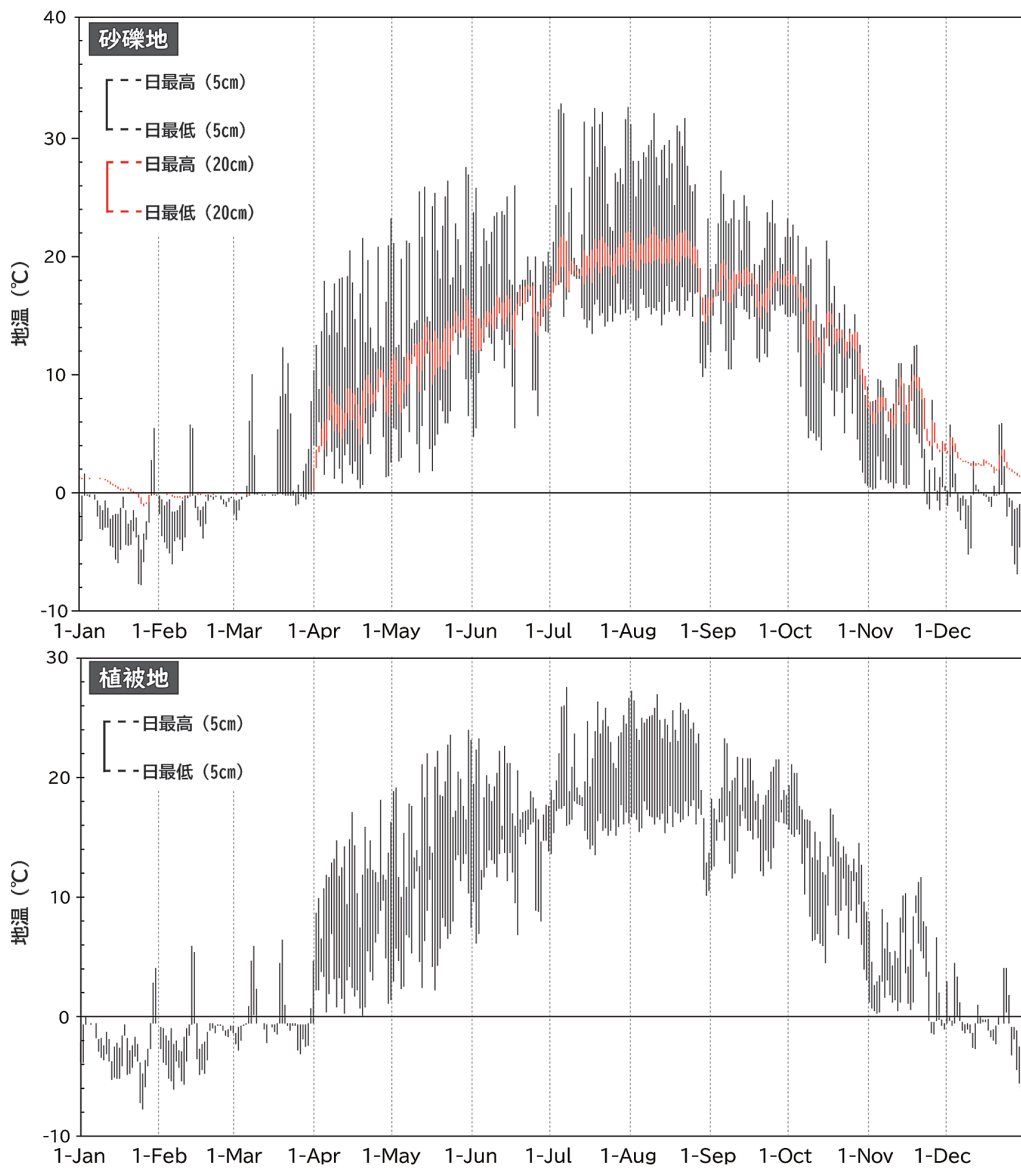


図3 Site-1における地温の変化

観測期間は2016年1月1日から2016年12月31日。

2. Site-2 (1685m)

砂礫地で観測した各深度の年平均地温は、5cm深で9.1℃、20cm深で9.7℃であった。観測期間中の最低値はそれぞれ-2.3℃(2月)、-0.2℃(2月)で、最高値は27.7℃(8月)、21.3℃(8月)であった。

砂礫地5cm深における凍結・融解サイクルが最初に生じたのは2016年2月13日であったが、2月にはこの日を含む計2回しか発生しなかった。凍結・融解サイクルが活発に生じるのは2016年3月7日以降で、その回数は3月末までに12回発生し、それ以降12月17日まで発生することはなかった。ただし、12月中においても、その日を含む2回しか発生していない。よって、砂礫地5cm深においては、1年間で計14回の日周期の凍結・融解サイクルが生じたことになる。以上のことから、Site-2では、凍結・融解サイクルが秋口に発生することがほとんどなく、12月末ごろからすぐに凍結期に入り、3月上旬から融解進行期に入ることが明らかとなった。

一方、20cm深における凍結・融解サイクルは、2月に2回発生したのみである。1月中旬ごろから3月末までの約1ヶ月半はほぼ0℃で推移し、その後は12月になっても日平均地温が0℃未満になることはなかった。このような地温推移はSite-1と類似しているため、積雪環境や凍結期間などは、概ねSite-1と同じだと考えられる。

5cm深の日較差の年平均値は3.2℃、20cmでは0.8℃で、いずれもSite-1より小さい値であった。凍結期である1月と2月の日較差の平均値はほぼ0℃で、融解進行期の3月を含む12月までの日較差平均値は3.8℃であった。このような季節による日較差の差異もまた、Site-1と類似していた。

植被地5cm深においては、年平均地温が9.0℃、最低値が-4.8℃(1月)、最高値が24.8℃(8月)であった。Site-2においても、砂

礫地に比して植被地のほうが低温環境であった。植被地においては、凍結期の2月に2回の凍結・融解サイクルが生じ、3月に入ると10回に増加した。その後は、12月22日まで凍結・融解サイクルが発生することはなく、12月においても僅か2回生じたのみであった。よって、植被地5cm深では、1年間で計14回の日周期の凍結・融解サイクルが生じたことになる。

また、植被地における日較差の年平均値は2.9℃で、凍結期である1月と2月の日較差の平均値が0.9℃、融解進行期の3月を含む12月までの日較差平均値は3.3℃であった。一般に植物群落による地表面の断熱効果を考える場合、群落の被度が大きいほど、また群落高が高いほど日射が妨げられ、地温の変化は抑制されるといわれている(高橋、1995)。Site-1およびSite-2の両観測点においては矮性低木群落がマット状に分布しているため、被度は大きくなる。そのため両観測点ともに、砂礫地よりも植被地の方がやや低温環境となり、かつ日較差が小さくなったのだと考えられる。Site-2における日最高・日最低地温の変化を図4に示した。

3. Site-3 (1701m)

砂礫地5cm深の年平均地温は8.5℃、最低値は-13.4℃(1月)、最高値は34.5℃(8月)であった。

凍結・融解サイクルが最初に生じた日は2016年1月28日で、その後2月に1回、3月に計5回生じた。3月末から10月末までは、日最低地温が0℃未満になることはなかった。11月に入ると凍結・融解サイクルが計14回発生し、12月には下旬までに計16回発生した。よって、砂礫地における5cm深では、1年間で計37回の日周期の凍結・融解サイクルが生じたことになる。

観測値をみる限り、Site-3の砂礫地においても他の観測点と同様に、11月上旬ごろから凍結進行期が始まり、凍結期と呼べるのは1~2月の2ヶ月間程度だと推測される。

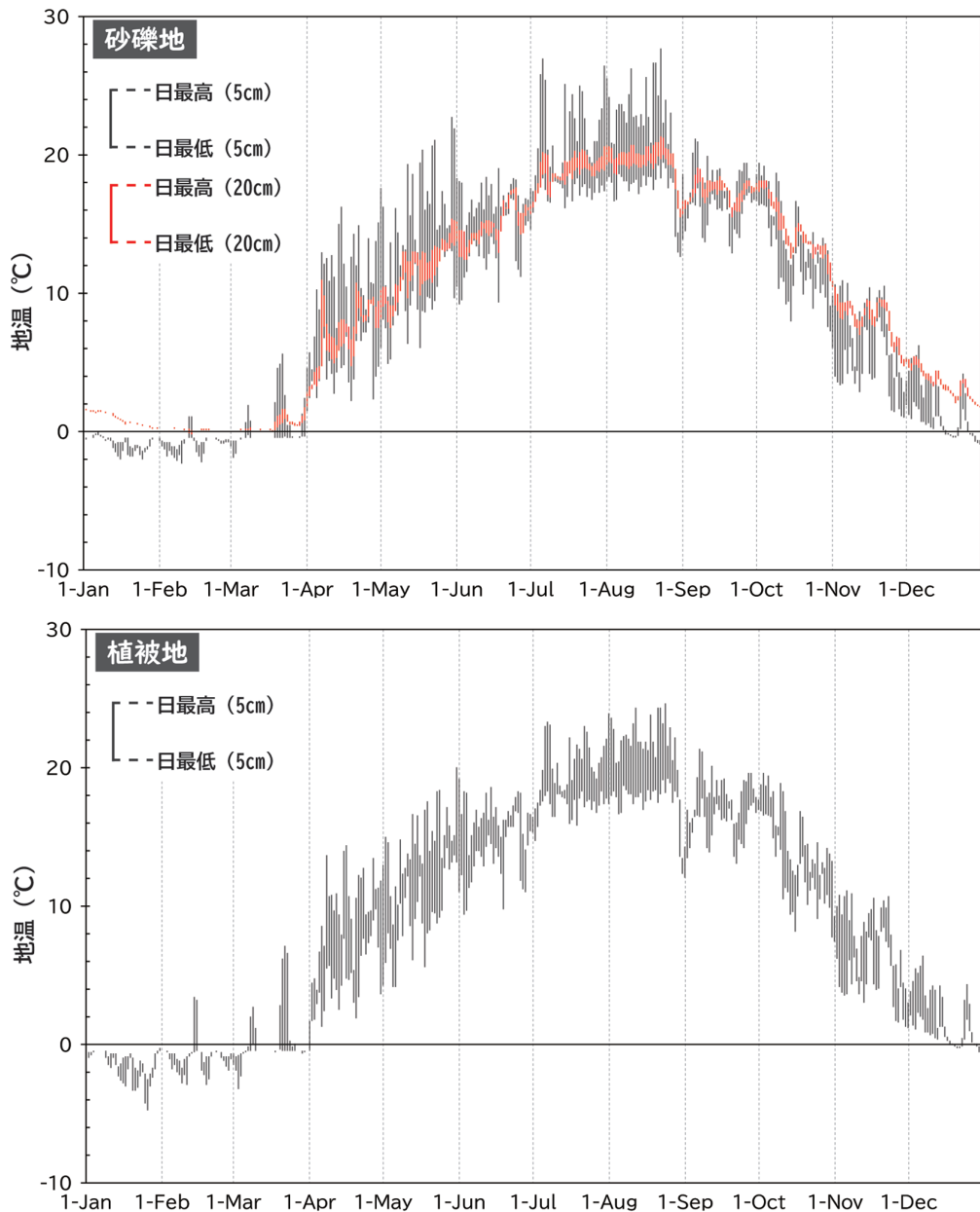


図4 Site-2における地温の変化

観測期間は2016年1月1日から2016年12月31日。

Site-3で特徴的なのは、他の観測点では融解進行期の3月に凍結・融解サイクルが頻発したのに対し、凍結進行期である11月と12月にそれらが頻発した点である（計30回）。この理由は定かではないが、おそらく凍結期進行期に積雪の定着が不安定、あるいは積雪の層厚が小さ

かったため、この期間は外気温の影響を受けやすい環境になっていたためではないかと推測される。

一方、3月は最低値が0°Cで維持される日が多かったため（最高値は0°C以上）、Site-1のようなゼロカーテンにはならないまでも、残雪の

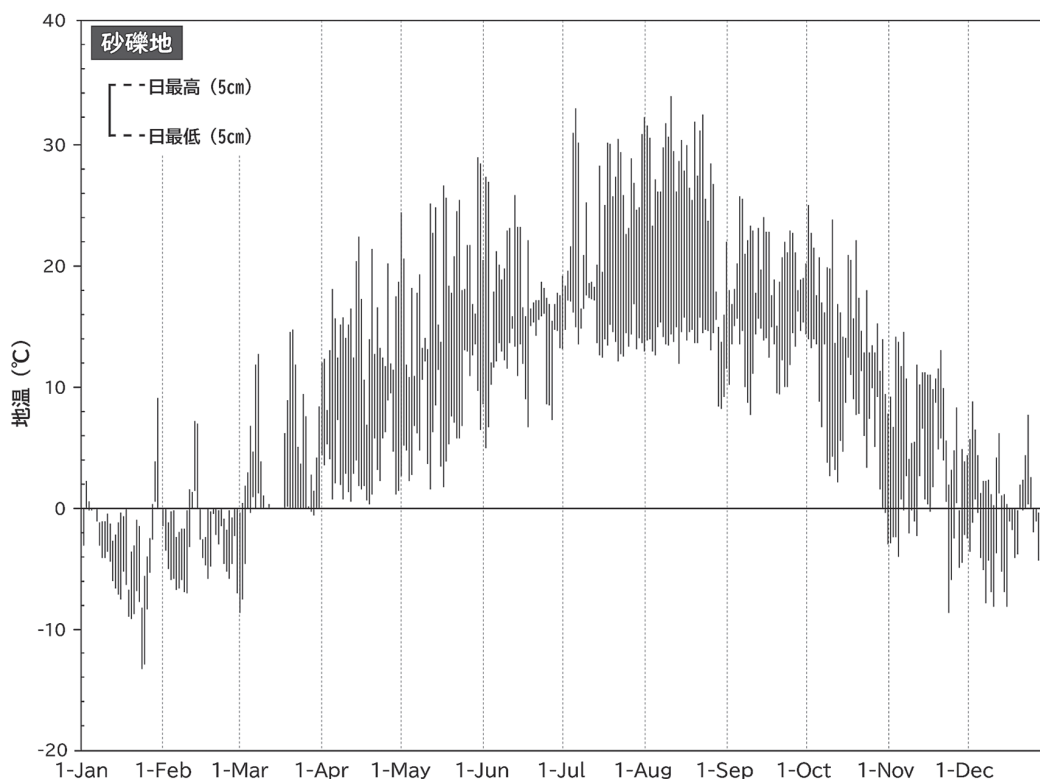


図5 Site-3における地温の変化

観測期間は2016年1月1日から2016年12月31日。

断熱効果や融雪水、季節凍土の融解水などの影響で、凍結・融解サイクルが生じにくかったのかもしれない。その後、3月末から4月に入ると外気温が上昇したことで融雪し、そのまま融解進行期を経ずに融解期になったと考えられる。このような変動をしたことで、Site-3においては日較差の年平均値が8.4°C、凍結期にあたる1月と2月の平均値が3.9°Cと、いずれも日較差が他の観測点に比べ大きい値となった。Site-3における日最高・日最低地温の変化を図5に示した。

4. 周氷河現象に関する若干の考察

地温観測によって得られた凍結・融解サイクルは、年間で最大37回 (Site-3：砂礫地 5cm深) であった (表1)。これまで、我が国において

地温観測が積極的に実施されてきた高緯度地域や高標高域では、この回数の倍近い凍結・融解サイクルが認められている地点も多い (たとえば、樋口、1990；Matsuoka, 1998)。一方で、凍結・融解サイクルの発生数だけでみれば、たとえば月山 (1984m) の風衝砂礫地に設置した観測点 (1805m) では、2cm深で年間30回程度 (Kariya, 1995；苅谷ほか、1997)、北上山地の5cm深では年間24回 (澤口、1992)、赤石山地の5cm深では年間21回 (松岡、1991) といった報告も認められるため、本調査地の凍結・融解サイクルが極端に少ないとは言い切れない。

ところが、本調査地域で得られた年平均地温の値をみると、地温環境は高緯度・高標高域に比して明らかに高温傾向であり、凍結・融解サイクルが生じる時期もきわめて短く集中的で、

表1 各観測点における年平均地温と凍結・融解サイクル

観測点	標高 (m)	年平均地温 (°C)			凍結・融解サイクル (回)		
		B (5cm)	B (20cm)	V (5cm)	B (5cm)	B (20cm)	V (5cm)
Site-1	1681	9.0	9.5	8.4	29	0	23
Site-2	1685	9.1	9.7	9.0	14	2	14
Site-3	1701	8.5	—	—	37	—	—

B: 砂礫地 V: 植被地

かつ明瞭な凍結進行期や融解進行期を経ずに凍結期や融解期に入ることもあった。また、地表面においては凍結期であっても日によっては凍結・融解サイクルが生じることもあり、この要因は積雪の層厚や残雪期間、あるいは雪質によって地表面が外気温の影響を受けたためと推測された。さらに、凍結深度は厚く見積もっても20cmに満たず、山岳地にしてはきわめて浅いと言える。これらのことから、凍結・融解サイクルの発生数が同等程度だったとしても、やはり総合的にみれば緯度や標高による地温環境（地温勾配）の差は大きいと判断できる。特に、本研究では観測していないためはっきりとは言えないが、外気温や雪質を含む積雪環境の差がきわめて大きいと考えられる。

ところで、凍結・融解サイクルは、斜面の物

質移動を決定する重要な要因の一つである。北上山地山稜部において凍結・融解による斜面物質の移動に関して野外実験を実施した澤口(1987)によれば、秋から冬季にかけての凍結進行期には霜柱クリープとフロストクリープが卓越し、春季の融解進行期にはジェリフラクションが優勢となる。調査地においても2016年11月末および2016年・2023年12月の調査で、観測点付近や登山道沿いの砂礫地において5~10cm程度（最大で15cm）の霜柱を確認している（図6）。つまり、本調査地のような低緯度地域の山岳地においても、様々な環境条件が整っていれば、スポット的にソリフラクションによる物質移動が生じている地点も存在すると推測される。

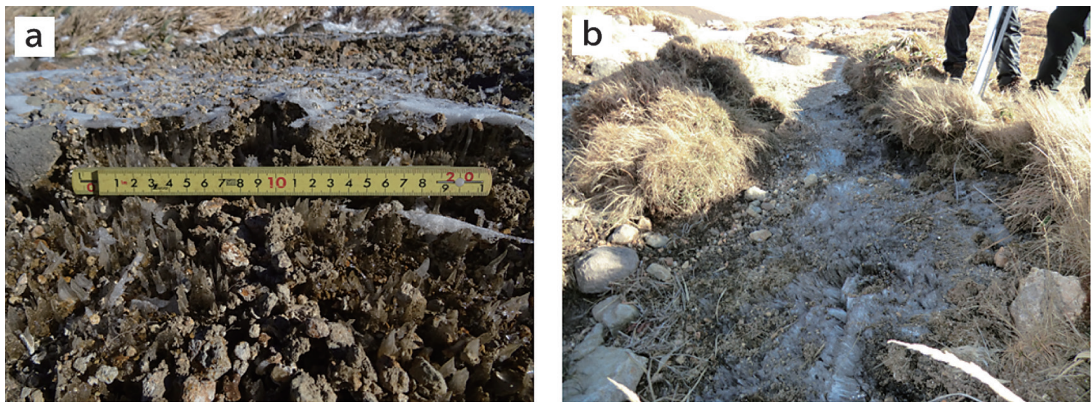


図6 稲星山周辺の霜柱

a: Site-3周辺の砂礫地、b: 登山道

霜柱の上には細粒物質が乗っており、霜柱クリープが生じている様子が良く分かる。登山道の霜柱は最大15cmであった。

a: 2016年11月29日 筆者撮影、b: 2016年12月17日 筆者撮影

V. まとめ

本研究では、今後九州山岳地に分布する構造土に類似した微地形の成因を議論する際の基礎資料とするため、九重連山南部に位置する稲星山周辺において地温観測を実施した。結果は、次のようにまとめられる(表1)。

- 1) 各観測点(Site-1~3)の年平均地温は、砂礫地の5cm深でそれぞれ9.0℃、9.1℃、8.5℃、20cm深で9.5℃(Site-1)、9.7℃(Site-2)であった。植被地においては、5cm深で8.4℃(Site-1)、9.0℃(Site-2)という値が得られた。
- 2) 凍結・融解サイクルは、砂礫地の5cm深でそれぞれ29回、14回、37回で、20cm深では2回(Site-2)しか生じなかった。植被地においては、5cm深で23回、14回の凍結・融解サイクルが生じた。
- 3) 本調査地域の地温環境は高緯度・高標高域に比して明らかに高温傾向であり、凍結・融解サイクルが生じる時期もきわめて短く集中的で、かつ明瞭な凍結進行期や融解進行期を経ずに凍結期や融解期に入ることもあった。また、凍結深度は厚く見積もっても20cmに満たず、山岳地にしてはきわめて浅いという結果が得られた。
- 4) 地表面においては凍結期であっても日によっては凍結・融解サイクルが生じることもあり、この要因は積雪の層厚や残雪期間、あるいは雪質によって地表面が外気温の影響を受けたためと推測される。

本研究では、気温データを観測できていないため、実際に地表面が外気温の影響をどの程度受けているのかを判断することができなかった。また、積雪環境や雪質が地温に大きな影響を与えていることは既知の事実だが、高緯度・高標高域に比べ極端な低温の気候環境に支配されているとは言い難い低緯度の山岳地域では、

それがより強く出ているものと考えられる。しかし、本研究では簡易的に積雪状況を確認したものの、詳細なデータが不足しているため議論することができなかった。

いずれにせよ、凍結深度や平均地温に鑑みれば、本調査地のような地域は周氷河現象が発生する限界の気候環境であることは間違いのないため、今後は総合的な気象観測を行うとともに、物質移動量や凍上量の計測、雪質や積雪状況に関する調査を実施する必要があるだろう。

地温観測機器の設置に際しては、環境省担当部署の皆様から格別のご配慮をいただいた。記して感謝申し上げます。なお、本研究は、第2著者である氏田が平成28年度に大分大学大学院教育学研究科(当時)に提出した修士論文が主体となっている。その後、筆頭著者である小山が追加調査を実施するとともに、図表を含め大幅な加筆修正を行った。また、本稿の骨子は、日本地球惑星科学連合2023年大会において発表した。本研究は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究C(代表者：小山拓志、課題番号23K00978)の一部を使用した。

注

- 1) 当該地域における山の統一な名称については長らく論争があったが、近年火山群や周辺地域全体を指す際には平仮名表記の「くじゅう連山」を用いることになった。そのため、国土地理院発行の地形図や火山土地条件図も平仮名表記になっている。しかし、気象庁では当該地域における火山の総称を地質学上の呼称として「九重山」と表記していることから、本稿もそれに従い漢字表記の「九重」を採用した。ただし、「九重山」のみでは「九重山」と「稲星山」という二つの山が存在するという誤解が生じる可能性があったため、本稿では「九重連山」と表記した。
- 2) センサーの分解能は0.1℃、精度は平均±0.3℃であるが、センサーの融点においてキャリブレーションを行っており、融点近傍での精度は±0.1℃が保証されるようにした。

文 献

- 小口 高 (1992) : 関東以西の低所における化石周氷河地形の形成環境. 地理学評論, **65**, 195-212.
- 小野晃司 (1963) : 5万分の1地質図幅「久住」及び同説明書. 地質調査所, 106p.
- 鎌田浩毅 (1997) : 宮原地域の地質. 地域地質研究報告 (5万分の1地質図幅), 地質調査所, 127p.
- 鎌田浩毅・壇原 徹・伊藤順一・星住英夫・川辺禎久 (1998) : 九重火山起源の宮城・下坂田・飯田火砕流堆積物のジルコンのフィッシュン・トラック年代. 火山, **43**, 69-73.
- 菊谷愛彦・佐々木明彦・鈴木啓助 (1997) : 月山の強風砂礫斜面における通年気象観測と地形形成環境. 地理学評論, **70**, 676-692.
- 川辺禎久・星住英夫・伊藤順一・山崎誠子 (2014) : 九重火山地質図-噴火史の再構築-. 火山学会講演予稿集, 2014, 134p.
- 川辺禎久・星住英夫・伊藤順一・山崎誠子 (2015) : 九重火山地質図. 火山地質図**19**, 産総研地質調査総合センター, 6p.
- 高山地形研究グループ (1978) : 『白馬岳高山帯の地形と植生』. 163p.
- 小山拓志・天井澤暁裕・増沢武弘 (2015) : 気温観測結果からみた南アルプス南部高山帯における周氷河環境. 駿台史学, **153**, 1-16.
- 小山拓志 (2024) : 南アルプス南部, 悪沢岳周辺における地温環境. 駿台史学, **183**, 139-156.
- 佐々木明彦・長谷川裕彦・増沢武弘 (2013) : 南アルプス南部, 大聖寺平に分布する雪窟の形成過程. 地学雑誌, **122**, 694-708.
- 澤口晋一 (1987) : 北上山地山稜部の荒廃裸地における凍結・融解による斜面物質移動. 地理学評論, **60**, 795-813.
- 澤口晋一 (1992) : スピッツベルゲンおよびわが国の高山・山地における凍結融解による斜面物質移動. 地理学評論, **65**, 92-104.
- 澤口晋一・小疇 尚 (1998) : 北上山地山稜部における斜面物質移動と凍上に関する野外実験. 地形, **19**, 221-242.
- 高橋伸幸 (1995) : 大雪山中央部高山帯における秋季の地温分布とその支配要因. 地理学評論, **68**, 27-42.
- 樋口雅夫 (1990) : 鳳凰山の頂稜部砂礫地における凍結・融解期の気温および地温の変化. 地理学評論, **63**, 154-165.
- フレンチ, H. M. (1984) : 『周氷河環境 (小野有五訳)』. 古今書院, 411p.
- 松岡憲知 (1991) : 赤石山脈の高山環境における地温の通年観測. 地形, **12**, 41-49.
- 松岡憲知 (2002) : アジアの山岳永久凍土と周氷河環境. 地学雑誌, **111**, 531-545.
- 横山秀司 (2002) : 霧島山. 清水長正編 : 『百名山の自然学-西日本編-』. 古今書院, 106-107.
- Kariya, Y. (1995) : Ground temperature observations at Mt. Gassan in northern Japan: a comparison between a wind-swept slope and a snow-patch hollow. *Geographical. Review of Japan.*, **68**, 75-85.
- Matsuoka, N. (1994) : Continuous recording of frost heave and creep on a Japanese alpine slope. *Arctic and Alpine Research*, **26**, 245-254.
- Matsuoka, N. (1996) : Soil moisture variability in relation to diurnal frost heaving on Japanese high mountain slopes. *Permafrost and Periglacial Processes*, **7**, 139-151.
- Matsuoka, N. (1998) : Modelling frost creep rates in an alpine environment. *Permafrost and Periglacial Processes*, **9**, 397-409.
- Outcalt, S.I., Nelson, F.E. and Hinkel, K.M. (1990) : The zero-curtain effect: Heat and mass transfer across an isothermal region in freezing soil. *Water Resource Research*, **26**, 1509-1516.
- Sone, T., Takahashi, N. and Fukuda, M. (1988) : Alpine permafrost occurrence at Mt. Taisetsu, central Hokkaido, In Northern Japan. in *Permafrost, Proceedings of fifth International Conference on Permafrost*. **1**, 253-258.
- Washburn, A. L.(1973) : *Periglacial Processes and Environments*. Edward Arnold, London, 320p.
- Washburn, A. L.(1979) : *Geocryology-A Survey of Periglacial Processes and Environments*. Edward Arnold, London, 406p.

政府統計にみるコロナ禍前後における葬儀業の状況

藤岡 英之

本学大学院修了

キーワード：葬儀業、サービス業、コロナ禍、葬儀の小規模化、サービス生産性

I. はじめに

2020年から国内外で猛威をふるった新型コロナウイルス感染症の流行によって、人が集まったり、会食したりすることが避けられるようになった。一時は街なかから人影が消え、人々の賑わいがすっかりなくなった時期もあった。海外では、感染による死者が増えたために火葬が間に合わない地域も現れ、医療のみならず葬儀・埋葬に関わる分野でも大きな混乱が生じた。コロナ感染症で亡くなった人の遺体は納体袋に包まれてから納棺されるため、遺族は故人と対面することもできなかった¹⁾。

関係者が一堂に会する葬儀への参列も、とくに緊急事態宣言が発出された時期には大きく制限されることとなった。かわりにオンラインで式の進行を見守ることができるサービスを提供する葬儀業者が話題になったこともあったが、実際の利用は多くはなかったという(田中2023)。その要因として田中は、技術的な問題というよりは、利潤を生み出すサービスとして提供することが困難なことをあげている。

コロナ禍による葬儀への影響を明らかにする研究は、葬儀業者のコロナ禍への初期対応を調査した田中(2022)をはじめ、すでにくつか発表されている。金沢(2021, 2023, 2024)は、地方新聞の「おくやみ」欄の記述を分析し、近親や家族のみの葬儀という記述が増えただけでなく、地域によっては参列せずに焼香のみを受けたり、弔問(香典)を受けたりするなど、さまざまな対応がなされたことを示した。高瀬(2021, 2022)は、寺院へのウェブ調査や葬

儀業者へのインタビューから、葬儀の参列者の減少(小規模化)は全国的に進む一方で、通夜を省略する一日葬などの簡素化は地域によって浸透度が異なること、またこうした状況の進行によってグリーフケア²⁾の機能をどこに求めるのかが問題となることを指摘した。また玉川(2024)は、コロナ禍以前から変化していた葬儀や火葬について、報道やアンケート調査の言説を分析し、これとコロナ禍がどのように結びつけられていたかを検討した。そして「新型コロナ禍」は葬儀の変化に関連づけられていただけでなく、人間関係を重視したり遺族の負担を軽くするといった副次的な影響を含めた語としても用いられていたと指摘している。

たしかに玉川(2024)が述べるように、コロナ禍による葬儀の変化については、それ以前から変化しつつある動向との関係を明確にしなければならぬだろう。また、新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが、季節性インフルエンザと同じ「5類」に移行した2023年5月8日をもって、「コロナ禍以後」と呼びうるのかという問題もあるが、「コロナ禍以前」と「コロナ禍以後」を慎重に比較することが求められる。まずは政府統計からこれを検討することが最初の手がかりとなろう。したがって、本稿の目的は、政府統計に現れる葬儀や葬儀業の運営、葬儀費用などの変化の様相を明らかにし、これに対するコロナ禍の影響について分析することである。

筆者は以前、サービス業としての葬儀業の成立と、葬儀会館が葬儀の場として普及し立地が拡大したことの関係を論じたが(藤岡2023)、

サービス業としての葬儀業の成立については、葬儀の担い手が故人の自宅近隣の人々から葬儀業者へ移行していくことととらえ、死亡数に対する葬儀業従業者数の増加によってこれを示そうとした(藤岡 2018, 2019)。このとき、政府統計のうち事業所・企業統計調査や経済センサス-活動調査を利用したが、本稿では政府統計を網羅的に検討することによって、葬儀業の現在の姿をみていきたいと考えている。

ただ、近年、政府統計は大きな再編の途上にある。コロナ禍以前に集計されていた項目が廃止されたり、逆に新たな項目がつけ加わったりしており、「前」と「後」でうまく比較できない集計項目もある。さらに、一見するとコロナ禍とは無関係と思われるような項目もある。しかし、それが葬儀や葬儀業の特徴を示すものとみなすことができる場合は、データの示す意味の解釈はいったん置いて、今後の課題として積極的に提示していくこととしたい。

II. 政府統計の現状

葬儀業の運営の状況や葬儀費用などを扱う政府統計は、2000年以降で一覧表にすると、管見のかぎり表1のようになる。総務省統計局のホームページによると、2008年以前はこの表中の調査のほか、サービス業基本調査、商業統計調査、工業統計調査などが、産業ごとに異なる年次や周期で調査されていた。そのため、同一時点での経済構造が把握できないという課題があり、これを解決するために経済センサス-活動調査を創設、これによって5年ごとにすべての産業を横断した経済構造が把握できるようになったという。さらに、その中間年においても経済構造の変化をとらえるために、経済構造実態調査が実施されるようになって³⁾いる。このように、近年、政府統計は大きな再編のただなかにあり、統計名の変更だけでなく、集計項目の変更も進められている。

表1の統計のうち、特定サービス産業動態統計調査は、2000年1月以降毎月行われており、現在まで一貫して調査され続けていることから、本稿ではこれを基本に据えて2000年以降の期間を研究対象とすることとした。

このほか、葬儀費用の体系が全国的に共通化してきたことをうけ、参列者数や選択するサービス内容などを決め、その費用によって各地域の物価を比較する指標とすることができるようになった。小売物価統計や、消費者物価指数(2020年基準)の「葬儀料」は、全国共通仕様の葬儀の費用を示すものである。

さらに、産業の動向を把握する統計のほか、消費の動向をとらえようとする統計もある。家計調査、家計消費状況調査、消費動向指数などがこれにあたる。家計調査や消費動向指数では「葬儀関係費」の品目分類で集計されているが、時間軸によって金額の変動幅が大きく、購買頻度も明らかではない。家計消費状況調査でも、「葬儀・法事費用」として毎月の消費額が集計されているが、この調査からでは1回の葬儀サービスにどの程度の出費があったかを測るのは難しい。したがって、本稿ではこれらの統計は扱わないこととする。また、サービス産業動向調査(拡大調査)は、葬儀業に関する統計であるが、調査期間が短く、調査項目も限られるため、本稿では取り上げない。

ここで、用語について述べておきたい。これまで、筆者は葬儀サービスを扱う業者を葬祭業者としてきた。しかし、上記の統計調査では、産業分類は冠婚葬祭業の下位に葬儀業、結婚式場業、冠婚葬祭互助会が位置づけられており、葬儀業と表記されている。ただし、特定サービス産業実態調査では冠婚葬祭業を調査対象としており、産業分類では葬儀業には限られず、葬儀を扱う事業所についてより広く集計している。本稿では、可能な限り葬儀に関する統計に注目していくために、これらをすべて「葬儀業」として表していくこととする。

表1 2000年以降の葬儀業・葬儀費用などを対象とする政府統計調査実施年

調査実施年	第3次産業活動指数	特定サービス産業動態統計調査	特定サービス産業動態売上高指数	特定サービス産業実態調査	事業所・企業統計調査	経済センサス・基礎調査	サービス産業動向調査(拡大調査)	経済センサス・活動調査	サービス産業動向調査(拡大調査)	経済構造実態調査	家計調査	消費動向指数	家計消費状況調査	小売物価統計調査	消費者物価指数
2000年	○	○													
2001年	○	○			○										
2002年	○	○		○									○		
2003年	○	○											○		
2004年	○	○	○		○								○		
2005年	○	○	○	○									○		
2006年	○	○	○	○	○								○		
2007年	○	○	○	○							○		○		
2008年	○	○	○	○							○		○		
2009年	○	○	○	○		○					○		○		
2010年	○	○	○	○							○		○		
2011年	○	○	○	○							○		○		
2012年	○	○	○	○			○				○		○		
2013年	○	○	○	○				○			○		○		
2014年	○	○	○	○		○		○			○		○		
2015年	○	○	○	○				○			○	○	○		
2016年	○	○	○	○			○	○			○		○		
2017年	○	○	○	○				○			○	○	○		
2018年	○	○	○	○				○			○	○	○		
2019年	○	○	○			注				○	○	○	○		
2020年	○	○	○							○	○	○	○	○	○
2021年	○	○					○				○	○	○	○	○
2022年	○	○								○	○	○	○	○	○
2023年	○	○								○	○	○	○	○	○

資料：政府統計調査より筆者作成

注：調査は存続・廃業などの活動状態と、新規把握企業についてのみ行われた

Ⅲ. 各種統計にみる葬儀と葬儀業の変化

本章では、各統計資料を表やグラフで表し、葬儀業の状況を明らかにしていく。

1. 第3次産業活動指数

第3次産業の生産活動をとらえることを目的

とした第3次産業活動指数は、2015年の値を100として、各業種の毎月の活動状況を表している。葬儀業については葬儀の取扱件数を指標として数値を算出している。規模が縮小し、葬儀1件あたりの売上高は減少していても葬儀自体は何らかの形で死亡数とほぼ同数が行われるため、死亡数の増加とともに活動指数もほぼ増

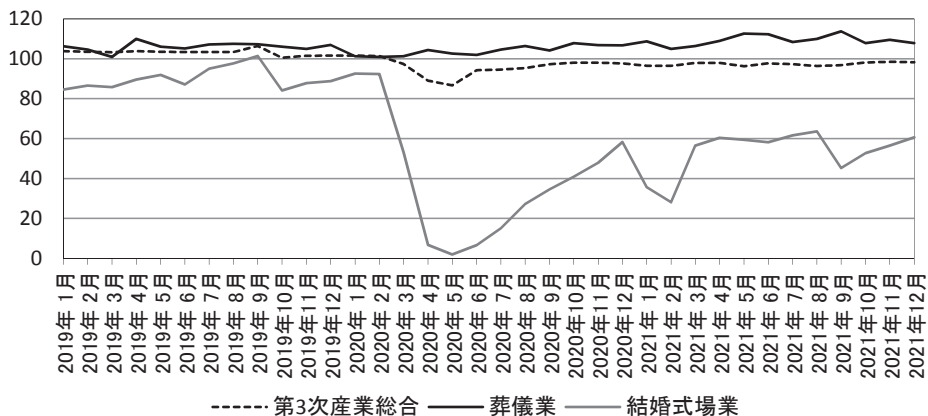


図1 第3次産業総合、葬儀業、結婚式場業の活動指数

資料：第3次産業活動指数

加する。これに対して結婚式場業では、コロナ禍によって結婚式自体が行われなくなったため、活動指数は激減した(図1)。グラフには、そうした業種ごとの特徴が如実に現れている。なお、葬儀業のグラフは、季節変動を調整した後の値を示している。死亡数は他の季節に比べて冬季に多い傾向にあるが、これはある程度ならして数値化されている。

2. 特定サービス産業動態統計調査

この調査では葬儀業について、全国の、年間売上高の概ね7割程度をカバーする売上高上位の企業を調査範囲としている。2000年1月から毎月、売上高、取扱件数、事業所数、従業者数(合計、正社員数、パート・アルバイト等の3区分)を調査し、実数と伸び率(前年同期比)が公表されている。さらに、年(次)、年度、四半期ごとの数値も公表されており、売上高や取扱件数は該当期間の各月データの合計、事業所数や従業者数は該当期間の最後の月の数値が使われている。

この調査で各期の実数値を比較することは、調査対象の企業を入れかえるなどデータの連続性が確保されていない時点があるために、できない。逆に伸び率の数値は、連続性を確保する

ように補正されているため、理論的には全期間を通してその変化を比較することができる。したがって、ここでは2000年の数値を1とし、各年の伸び率を次々に掛け合わせて2000年基準の指数値を作成し、これをみていく。ここで「理論的には」と述べたが、計算で求めた「2000年基準の指数」は実際にどの程度正確なのか、確認しておきたい。この統計調査に関係して、売上高だけを指数値で表した特定サービス産業動態売上高指数が、2005年を100として2004年1月から、その後2010年を100としたものが2020年12月まで公表されている⁴⁾。このうち2010年を基準として、各年の動態売上高指数と筆者が伸び率を掛け合わせて求めた指数を比較したものが、表2である。1000分の1前後の差が出た年があるもののほぼ同じ数値で推移していたが、2020年では1000分の6程度の誤差が生まれている。対前年比で10%を超える大きな変化があった年には、この程度の誤差が生じるものの、伸び率から計算で求めた指数であっても通常の変化であればほぼ問題なく利用できるといえるだろう。

1) 取扱件数と死亡数

まず図2に、2000年を基準とした葬儀の取扱

表2 特定サービス産業動態売上高指数と売上高の伸び率から計算した指数の比較

	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
特定サービス産業動態売上高指数	100.0	103.8	105.2	106.3	106.0	107.7	106.5	108.6	108.1	107.5	93.7
売上高の伸び率から計算した指数	100.0	103.7	105.2	106.3	106.0	107.7	106.5	108.5	108.1	107.7	93.1

資料：特定サービス産業動態売上高指数、特定サービス産業動態統計調査

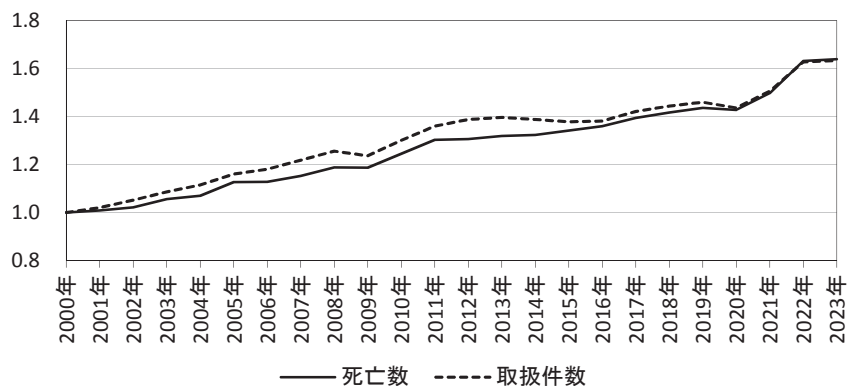


図2 死亡数と取扱件数の推移

資料：特定サービス産業動態統計調査、人口動態統計より筆者作成

件数と死亡数の指数をグラフ化した。死亡数も人口動態統計をもとに、2000年の年間死亡数を1として以降の各年の数値をこれに対する指数として表した。2023年までの各年の死亡数の実数と2000年に対する指数の値は表3のとおりである。死亡数は2003年に100万人を超え、

2022年には150万人を超えた。途中、若干の減少が2回(2009年、2020年)あったものの、ほぼ一貫して増加し、2023年の死亡数は2000年に比べて1.6倍以上となっている。

2010年代の前半まで、取扱件数の伸び率は死亡数を上回っていた。これは、ひとつには、集

表3 2000年以降の死亡数(実数)と2000年を1としたときの伸び率

年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年
死亡数(人)	961,653	970,331	982,379	1,014,951	1,028,602	1,083,796	1,084,451	1,108,334
伸び率	1	1.009	1.022	1.055	1.070	1.127	1.128	1.153
	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
	1,142,407	1,141,865	1,197,014	1,253,068	1,256,359	1,268,438	1,273,025	1,290,510
	1.188	1.187	1.245	1.303	1.306	1.319	1.324	1.342
	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年
	1,308,158	1,340,567	1,362,470	1,381,093	1,372,755	1,439,856	1,569,050	1,576,016
	1.360	1.394	1.417	1.436	1.427	1.497	1.632	1.639

資料：人口動態統計より筆者作成

計対象となっている比較的大手の葬儀業者が取扱件数を伸ばしていたためであると考えられる。また、もうひとつには、個人葬（一般的に行われている遺族などによって営まれる葬儀で、死亡数とほぼ同数が営まれているとみることができる）だけでなく、個人葬が終わった後にお別れ会、社葬や団体葬などの形で別に行われており、これが件数に集計されていたと考えられる。グラフからは、取扱件数の伸びもなくなり、2度目の葬儀も2010年代の半ば以降は営まれることが少なくなり、コロナ禍の2020年以降はほぼ行われることがなくなったとみることができる。その傾向は現在も続いている。

2) 事業所数、正社員数、その他従業員数と取扱件数

図3は、事業所数、正社員数、その他従業員数（正社員以外の従業員数）と取扱件数の指数を折れ線グラフに表したものである。ここで事業所は、多くが葬儀会館であると考えられる。2000年以降、事業所数つまり葬儀会館の数とその他従業員数の伸びは、取扱件数を上回って大きな増加をみせていたが、2010年代の半ば以降その他従業員数の伸びが止まり、コロナ禍によって今度は大きく減少した。正社員数の増加

は20年間で25%増程度と取扱件数の伸びを下回り、コロナ禍でもやや減少したが、正社員以外の従業員数ほどの下落ではなかった。このなかでは、その他従業員数の動きは特徴的であり注目される。

3) 従業員合計に占める正社員の割合

従業員合計、正社員数、その他従業員数のそれぞれの前年からの伸び率（指数ではない）から、従業員合計に占める正社員の割合を計算し、グラフに表した（図4）。この割合は、ある年*i*（*i*=2001、2002、…、2023）の前年からの従業員合計、正社員数、その他従業員数の伸び率をそれぞれ a_i 、 b_i 、 c_i 、前年の人数をそれぞれ $M_{i-1} + N_{i-1}$ 、 M_{i-1} 、 N_{i-1} とするとき、 $M_{i-1} / (M_{i-1} + N_{i-1}) = (a_i - c_i) / (b_i - c_i)$ となることから求めた。ただこの方法では、伸び率が0.1（%）違っただけで、正社員の割合が50%から40%に変わってしまうこともあるなど数値の変動が大きく、データの信頼性にやや疑問もある。そこで、各年の比較はできないとされている実数値ではあるが、これによって大まかな値を把握することにした（図5）。

2つのグラフから、大まかに7割前後から5割前後まで低下したことがわかる。またコロナ

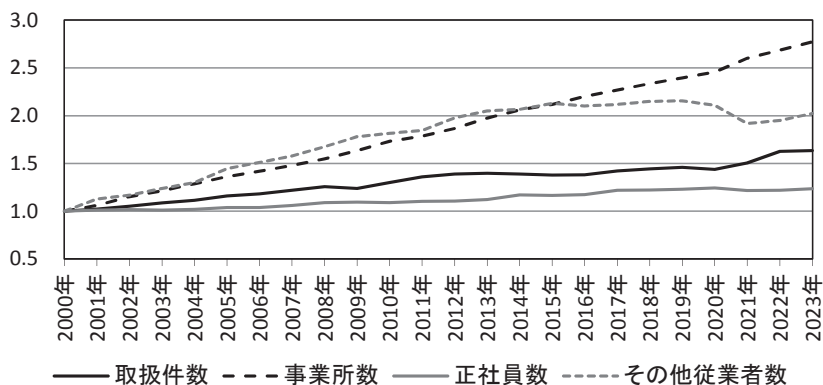


図3 事業所数、正社員数、その他従業員数と取扱件数の推移

資料：特定サービス産業動態統計調査より筆者作成

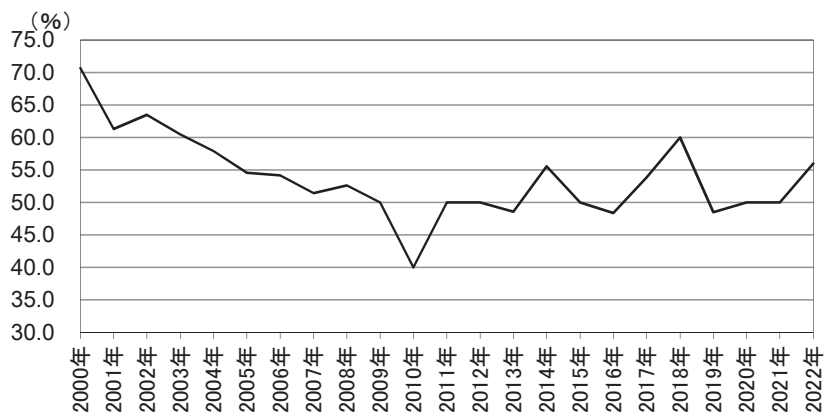


図4 従業者数合計に占める正社員の割合の推移

資料：特定サービス産業動態統計調査より筆者作成

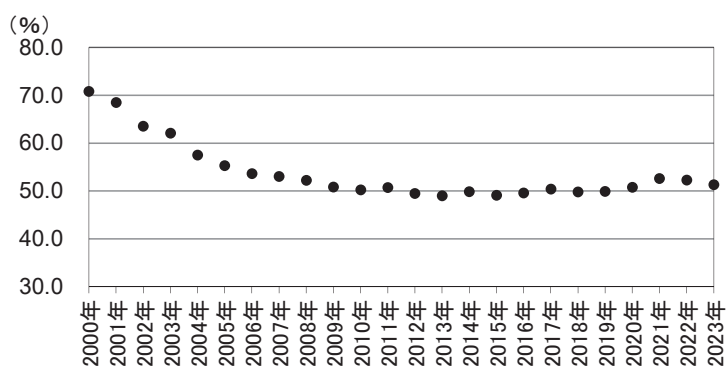


図5 従業者数合計に占める正社員の割合（実数を利用）

資料：特定サービス産業動態統計調査

禍の時期には、その他従業者数が大きく減少したため、正社員の割合が若干増えた。近年、葬儀施行に携わる社員を個人事業主として外注化するといった極端な方策をとる会社も出てきているが、一般に正社員の割合が5割程度でしばらく経年変化がないとすれば、これ以上パート・アルバイトを増やして5割を超えてしまっはうまく対応できないと会社側も考えているということかもしれない。

4) 売上高、取扱件数、従業者数合計

図6は、売上高、取扱件数、従業者合計の指数を表している。

2007～2008年ごろまでは3者の指数は一致していたが、その後、乖離がみられるようになった。売上高は2010年代に入って取扱件数の伸びを下回るようになり、2010年代半ばからはその差が拡大した。さらにコロナ禍で売上高は大きく落ち込み、その後取扱件数の大きな増加によってなんとかコロナ以前の水準にまで戻している。従業者数合計は、2010年代の半ばまでに対2000年比1.5倍程度まで増加したが、その後はほぼ横ばいで推移している。コロナ禍までは取扱件数を上回る伸びをみせていたが、コロナ禍で上下が逆転した。

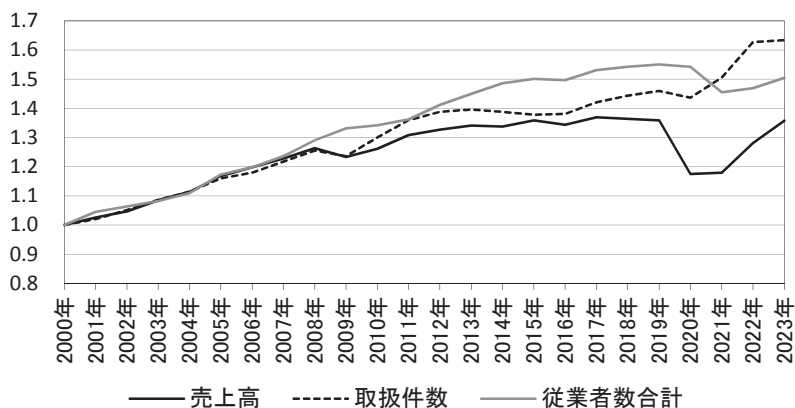


図6 売上高、取扱件数、従業者数合計の推移

資料：特定サービス産業動態統計調査より筆者作成

5) 葬儀1件あたりの売上高

売上高の指数を取扱件数の指数で割って葬儀1件あたりの売上高の指数値を求め、その推移を図7に示した。2000年代半ば以降ほぼ一貫して下落しており、2010年代半ばにわずかに上昇をみせていたものの、2010年代後半には再び下落し、コロナ禍でさらに大きく落ち込んだ。図6で売上高の伸び率が取扱件数を上回っているとき1件あたり売上高は増加し、下回ると下落する関係にある。

6) 葬儀の取扱件数と1人あたり取扱件数

葬儀の取扱件数と従業者合計、正社員数のそれぞれの指数から、従業者合計の1人あたり取扱件数、正社員1人あたりの取扱件数の指数を求め、図8に表した。急な取扱件数の増加に対応するのは難しく、一時的に1人あたりの取扱件数が増加することもあるが、長期的には正社員では2000年の1.2倍程度の件数増が見られる。コロナ禍後の急速な件数増にどのように対応するのかについては、今後の推移を見守る必要がある。葬儀件数(死亡数)の予測は難しく、

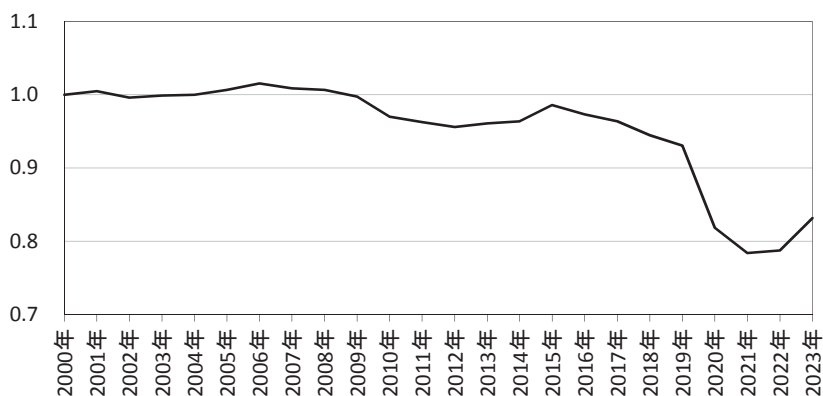


図7 葬儀1件あたりの売上高の推移

資料：特定サービス産業動態統計調査より筆者作成

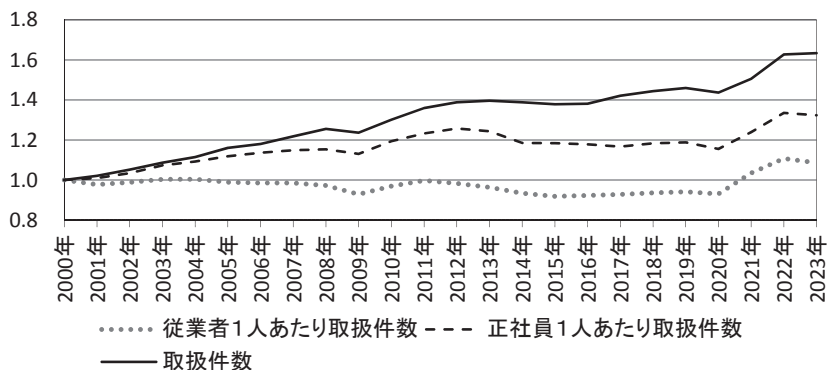


図8 取扱件数と従業者1人あたり、正社員1人あたりの取扱件数の推移

資料：特定サービス産業動態統計調査より筆者作成

葬儀業にとって適正な人員配置は大きな課題である。

7) 売上高と1人あたり売上高

売上高と従業員総数、正社員数のそれぞれの指数から、従業員総数の1人あたりの売上高、正社員1人あたりの売上高の指数を求め、グラフ化したものが図9である。取扱件数の減少によるものなど増減の波はあるものの、正社員1人あたりの売上高は2010年代の半ばまでは増加基調にあったといえる。しかし、2010年代後半になると、葬儀1件あたりの売上高の顕著な

減少もあって(図7参照)、正社員1人あたりの売上高も減少、さらにコロナ禍で大きく減少した。2023年には2019年のレベルまで回復しているが、23年時点では件数の伸びに対して従業者数が追いついていない状況であり、これ以上1人あたりの売上高を増やしていけるかは疑問である。

8) 葬儀1件あたりの売上高(2020年1月～2021年12月)

2020年1月から2021年12月までは調査対象先に変更がなく、実数値の連続性が保証されて

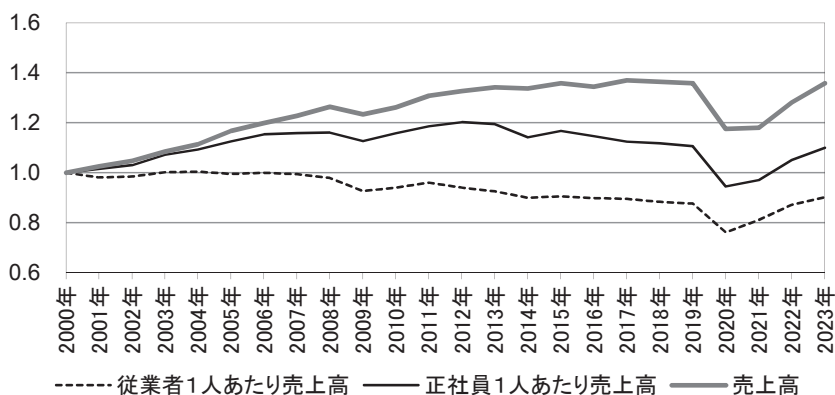


図9 売上高と従業者1人あたり、正社員1人あたりの売上高の推移

資料：特定サービス産業動態統計調査より筆者作成

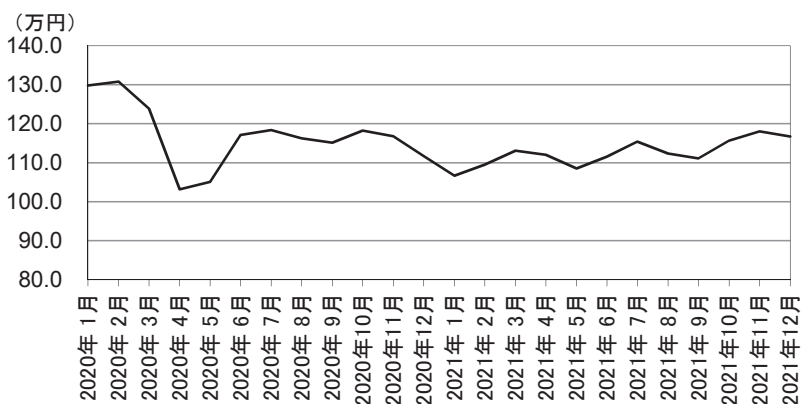


図10 葬儀1件あたりの売上高 (2020年1月～2021年12月)

資料：特定サービス産業動態統計調査より筆者作成

いるので、この期間の月ごとの売上高と取扱件数の実数値から、葬儀1件あたりの売上高を計算して結果を図10に示した。売上高には、葬儀の売上以外にも含まれていること、調査対象となっているのが売上高上位の企業であり、一般に売上高上位の企業は一件あたり売上高も高めになる傾向があることなどから、この数値が現実を正確に表しているとは言えないが、変動の様子は見ることができるだろう。コロナ禍の最も厳しい時期の2020年4月、5月をはじめ、目に見える減少が示されているのは2021年1月、5月、9月と、いずれも東京などに緊急事態宣言が出された時期とほぼ重なっている。2020年の後半には、コロナ禍直前の1件あたり売上高の9割程度まで回復した時期もあったが、2021年に入って2回目の緊急事態宣言が発出された時期には再び大きな下落に見舞われている。その後は、増減を繰り返しながら、だんだんと回復傾向をみせるようになった。

3. 特定サービス産業実態調査

特定サービス産業実態調査は、サービス業のうちから対象業種をしぼって1973年から行われている調査で、葬儀業は1986、2002、2005年に、また冠婚葬祭業が2009、2010、2013、2014、

2015、2017、2018年にそれぞれ調査対象となっている。2009年以降は冠婚葬祭業として標本調査が行われて結婚と葬儀などを広く扱っているが、葬儀一式請負やその内訳の売上高、葬儀取扱件数などを都道府県別に集計しており、地域差をみるのにも便利な調査である。これらの調査の一部は、2019、2020年の経済構造実態調査乙調査にも引き継がれたが、その後は継続されていない。また、経済構造実態調査では、結婚式場業と葬儀業を分けて集計している。なお、調査年は上述のとおりであるが、年間売上高や葬儀取扱件数はその前年1年間の実績を集計しており、図11、図12、図13では、その数値が示す実際の年次を表記している。

1) 葬儀1件あたりの売上高の平均値と中央値

特定サービス産業実態調査が冠婚葬祭業を対象に行っている調査は、事業従事者数に制約を設けない「全規模の部」と、事業従事者5人以上を対象にした「事業従事者5人以上の部」に分かれている。そのうち、「全規模の部」で集計されている「葬儀一式請負」の年間売上高と年間葬儀取扱件数から、葬儀1件あたりの売上高(平均値)を計算した。また、「5人以上の部」では、50万円未満、50～100万円、100～200万

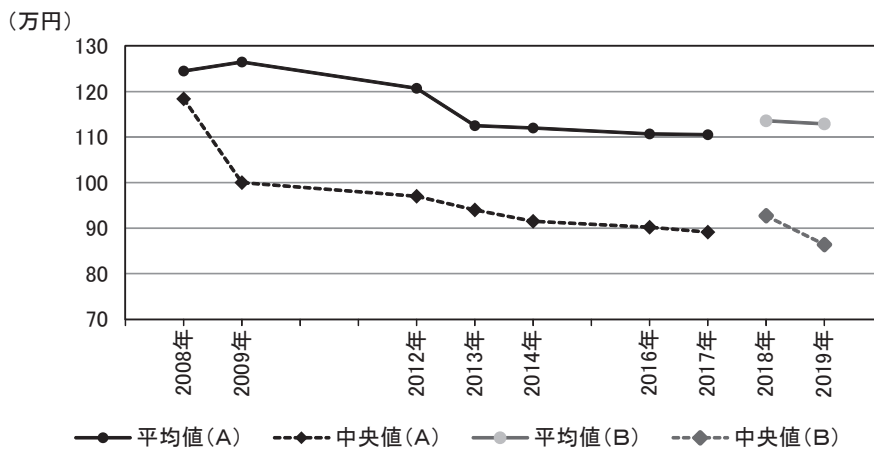


図11 葬儀1件あたりの売上高の平均値と中央値の推移

資料：(A) 特定サービス産業実態調査（2009年、2010年、2013年、2014年、2015年、2017年、2018年）より筆者作成
 (B) 経済構造実態調査乙調査（2019年、2020年）より筆者作成

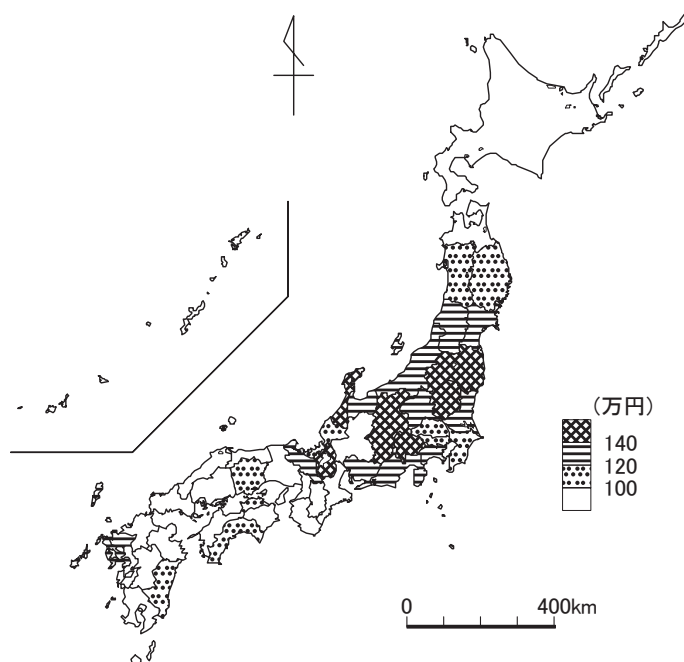


図12 葬儀1件あたり売上高の都道府県別分布（2017年）

資料：特定サービス産業実態調査（2018年）より筆者作成

ての返礼品とサービスとしての飲食が内包されているとみることもでき、この2つが地域によってさまざまな形で現れていることを示している。参列や多人数での会食が制限されたコロナ禍によって、それぞれの地域で何に影響が及び、何がどう変わったのか、さらに葬儀業がどのように対処したのかは、地理学においても興味深いテーマとなりうるのではないだろうか。

3) 資本金規模別の事業所数、売上高、葬儀取扱件数

特定サービス産業実態調査は、事業所単位で冠婚葬祭業の活動をとらえているが、これを資本金規模別にみることによって、事業所ではなく企業の規模別にその活動状況を把握することができる。そこで、全規模の部について資本金規模別の（葬儀を扱う）事業所数、その売上高、葬儀取扱件数から、葬儀1件あたりの売上高、1事業所あたりの売上高、1事業所あたりの取扱件数を計算し、表4にまとめた。資本金10億円以上の企業にはうまくあてはまらないものの、それ以外の階級については、企業の規模が大きくなるにつれて、1件あたりの売上高、1事業所あたりの売上高や取扱件数も高く、多くなっていくことが示された。

ただ、ここで扱われている数値は、事業所数

が2018年、売上高と葬儀取扱件数が2017年のものであり、1事業所あたりの売上高や1事業所あたり取扱件数が厳密に2017年のものとは言えない。

4. 消費者物価指数（2020年基準）、小売物価統計調査

2020年1月より、小売物価統計調査の調査項目に葬儀料が加えられた。この調査で集計されるのは対象地域の平均的葬儀価格ではなく、全国で同じ条件で葬儀をしたとしてその料金が対象地域ではいくらになるかという、葬儀料金の純粋な物価である。条件は以下のとおり。

- 〔葬儀条件〕 大人；仏教式；親族20人；参列者25人， 民営斎場：2日間，
- 〔遺体搬送〕 寝台車；10km， ドライアイス（20～40kg），
- 〔棺〕 布棺（白；普通品）， 納棺用品一式， 納棺支援， 生花祭壇（幅200～270cm）， 供花（2対）， 焼香用品一式，
- 〔遺影〕 四切；カラー；黒縁額，
- 〔祭壇用遺影〕 ライトパネル，
- 〔返礼品〕 会葬礼状（50人分）；会葬御礼（35人分），
- 〔出棺〕 霊柩車：洋型；10km， マイクロバス：1台，

表4 資本金規模別の事業所数、葬儀一式請負の年間売上高、年間葬儀取扱件数

	該当事業所数	葬儀一式請負の年間売上高(百万円)	年間葬儀取扱件数(件)	葬儀1件あたりの売上高(万円)	1事業所あたりの売上高(百万円)	1事業所あたりの葬儀取扱件数(件)
資本金規模別計	8,201	1,467,725	1,328,819	110.5	179.0	162.0
500万円未満	1,795	169,241	189,116	89.5	94.3	105.4
500万円以上1千万円未満	934	106,429	116,491	91.4	113.9	124.7
1千万円以上5千万円未満	2,904	571,831	537,906	106.3	196.9	185.2
5千万円以上1億円未満	857	225,566	179,185	125.9	263.2	209.1
1億円以上10億円未満	481	208,756	144,175	144.8	434.0	299.7
10億円以上	68	20,438	16,661	122.7	300.6	245.0
資本金なし	1,162	165,464	145,285	113.9	142.4	125.0
(1億円以上)	549	229,194	160,836	142.5	417.5	293.0

資料：特定サービス産業実態調査（2018年）より筆者作成

注：調査年は、該当事業所数が2018年、年間売上高、年間葬儀取扱件数は2017年

- 〔骨壺〕陶磁器製；白無地、
- 〔後飾壇〕紙製又は木製、
- 〔食事〕通夜振る舞い及び精進落とし（各25人分）；並、
- 〔飲料〕ビール及びウーロン茶（各20人分）、
- 葬儀に必要な用品一式、サービス料及び人件費を含む

1) 消費者物価指数（全国）の総合と葬儀料

消費者物価指数は、小売物価統計調査によって得られた小売価格などから、物価の変動を測定する指数である。2020年に葬儀料が小売物価統計調査の項目に加えられたことから、葬儀料の物価変動も指数で表されるようになった。図14で2020年1月から2024年8月までの全国の総合指数（生活全般の物価変動を表す数値）と葬儀料の指数の推移をグラフに表した。どちらも2020年の指数を100にそろえている。2022年1月は総合指数と葬儀料の指数はそれぞれ100.3と100.2であったが、この後総合指数は大きく上昇をはじめ、2024年8月には109.1と103.6まで開いている。葬儀料は全体的な物価上昇に合わせる事ができていない。ただし、これはあくまで物価であって、消費者が実際に支払う葬儀料が増えているのか減っているのか

は、このグラフからはわからない。

なお、2020年基準は2020年の指数を100としており、2020年1月の総合指数は100.5であるが、これは間違いではない。

2) 2020年と2023年の県庁所在地の葬儀料

図15は、2020年と2023年の県庁所在地の葬儀料をそれぞれ横軸と縦軸にとり、散布図に表したものである。全国的に大きな変化はなく、多くの都市が右肩上がりの直線上に並んでいる。そのなかで、左上に飛び出している札幌市（121万円→160万円）、宮崎市（108万円→145万円）、佐賀市（108万円→139万円）、高知市（107万円→132万円）などが大きく値上がりをした都市、逆に右下に飛び出している津市（145万円→96万円）、福島市（138万円→120万円）、和歌山市（124万円→110万円）、那覇市（71万円→63万円）などが値下がり率の大きかった都市である。ただ、津市の値下がり幅はあまりに大きく、特異値とみるべきかもしれない。

2020年に最も葬儀料の物価が高かったのは、さいたま市（148万円）、2023年は札幌市だった。また、両年とも最も低かったのは広島市だったが、広島市の数値は2020年から2022年までがすべて61万2,700円、2023年が62万

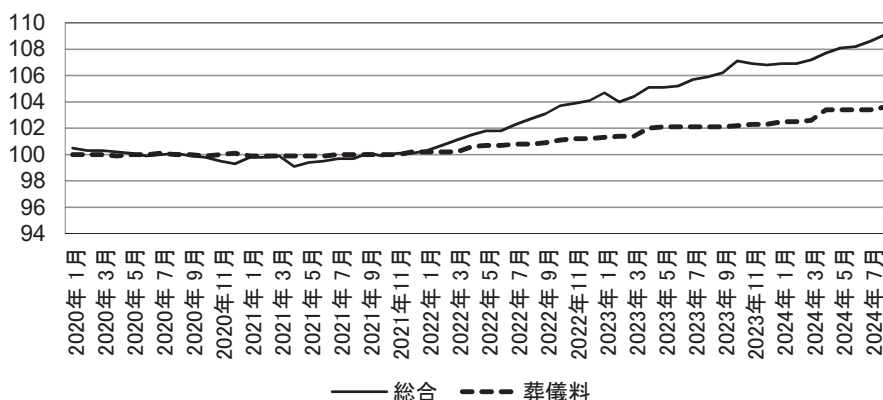


図14 消費者物価指数（全国）の総合指数と葬儀料の推移

資料：消費者物価指数（2020年基準）

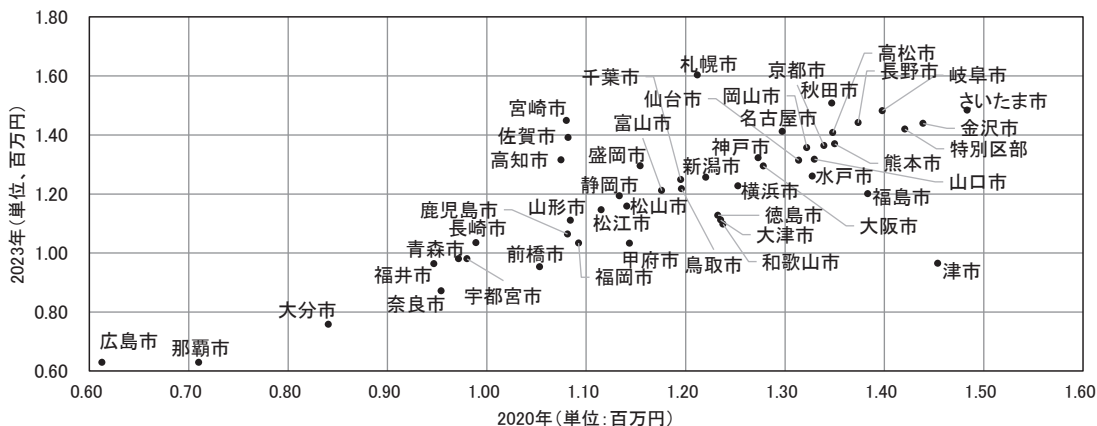


図15 2020年と2023年の県庁所在地の葬儀料

資料：小売物価統計調査

9,200円と端数のない切りよのよい数字であることから、サンプル数が少ない懸念もある。同様の懸念は、4年ともすべて98万0,090円だった宇都宮市でもみられている。

5. 事業所・企業統計調査、経済センサス-活動調査、経済センサス-基礎調査

事業所・企業統計調査は、事業所や企業の事業の種類、開設時期や規模などを把握する統計調査で、基本的に全数調査が行われてきた。2009年からは経済センサスに統合されている。

1) 葬儀業の事業所数と従業者数の推移

図16は、葬儀業の事業所数の推移を、単独事業所、本所・本社・本店（以下、本所）、支所（以下、支所）・支社・支店別に示したものである。単独事業所は大きな変化はないが、2014年をピークにやや減少に転じている。また、本所も2014年以降はあまり変化はない。これに対して支所は2014年に単独事業所とほぼ同数となり、その後もさらに増加を続けて5,500を超えるまでになった。支所は多くが葬儀会館であると考えられ、複数の事業所をもつ

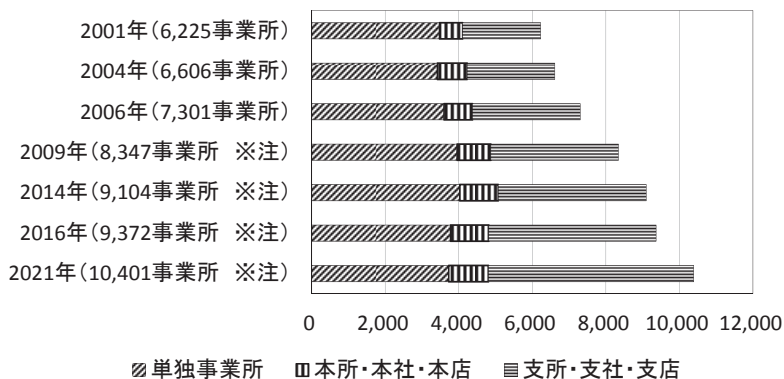


図16 単独事業所、本所、支所別の葬儀業事業所数の推移

資料：事業所・企業統計調査、経済センサス-基礎調査、経済センサス-活動調査

※注 グラフの3項目の和は事業所数総数と一致しないが、元資料をそのまま利用した。

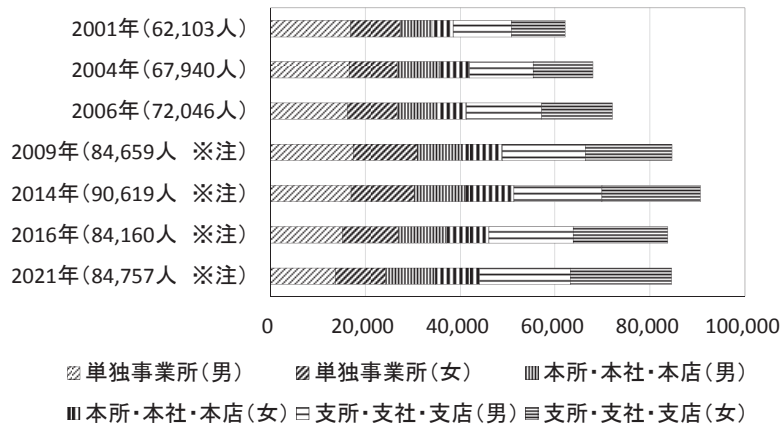


図17 単独事業所、本所、支所別、男女別の葬儀業従業者数の推移

資料：事業所・企業統計調査、経済センサス-基礎調査、経済センサス-活動調査
 ※注 グラフの6項目の和は従業者数総数とは一致しないが、元資料をそのまま利用した。

葬儀業者がさらに葬儀会館を増やしている状況が読み取れる。

これに対して、図17は葬儀業の従業者数の推移を、単独事業所の男女別従業者、本所の男女別従業者、支所の男女別従業者に分けて積み上げ棒グラフに表したものである。まず、2000年以降増加を続けてきた従業者の総数は2014年をピークに減少に転じ、2016年と、コロナ禍の影響を大きく受けた2021年がほぼ同数となっている。図6では、たしかに従業者数総数の指数は2016年にわずかに減少してはいた。しかし、2021年にはコロナ禍によってさらに大きく減少しており、図17の変化とは合致しない。2016年の従業者数の落ち込みはどの程度だったのか、大きく落ち込んだとすればその要因は何だったのかなどは、さらなる検証の必要がある。

内訳をみると、単独事業所の従業者の減少が顕著である。単独事業所では、従業者数総数がかつても多かった2009年に比べ、男女ともに2割以上減少した。これに対して、本所では2001年からの20年間で男性が1.5倍以上、女性が2倍以上増加しており、事業所数が大きく増えた支所でも20年間で、男性で1.5倍以上、女性が2倍弱の増加がみられた。

2) 支所の開設時期

すでに述べたように葬儀業の事業所、なかでも支所の多くは葬儀会館であると考えられる。その支所を含め、単独事業所、本所の開設時期を示したのが、表5である。支所の開設時期に注目すると、1985年から94年までが372か所に対して、1995年から2004年までが1,482か所、2005年から2014年までが2,193か所と、1995年以降に開設が大きく進んだことがわかる。2015年以降も、6年半で1000か所以上と、増加のスピードは衰えていない。この時期に葬儀会館が設置され、急速に普及したことが確認できる。

3) 常用雇用者規模別の1企業あたりの事業所数の推移

企業単位で1社あたりの事業所数を、常用雇用者の規模別にみたのが表6である。常用雇用者規模別に企業数、事業所数が集計されている表を元に、1社あたりの事業所数を計算した。もっとも常用雇用者が多い階級は、「1000人以上」としたが、元の資料では「1000~1999人」となっている。2016年のみは2000人以上の企業が1社あったが、これは「1000~1999人」と合算して「1000人以上」の階級に組み入れた。

表5 開設時期別にみた葬儀業の単独事業所数、本所数、支所数（2021年6月）

開設時期	総数	単独事業所	本所・本社・本店	支所・支社・支店
総数	10,401	3,723	1,082	5,583
1984年以前	1,788	1,105	388	293
1985～1994年	1,046	496	176	372
1995～2004年	2,543	813	245	1,482
2005～2014年	3,297	897	205	2,193
2015年	278	94	11	172
2016年	278	82	21	174
2017年	220	70	7	143
2018年	218	50	8	160
2019年	240	45	9	186
2020年	225	31	4	190
2021年	92	23	2	66
(2015～2021年6月)	1,551	395	62	1,091
不詳	176	17	6	152

資料：経済センサス-活動調査

注：総数の値と、単独・本所・支所の和が一致しないことがあるが、元資料をそのまま利用した

表6 常用雇用者規模別の1企業あたりの事業所数の推移

常用雇用者規模	2009年	2014年	2016年	2021年
総数	1.6	1.6	1.8	2.0
0～4人	1.1	1.1	1.0	1.1
5～9人	1.2	1.2	1.2	1.3
10～19人	1.6	1.6	1.7	1.8
20～29人	2.0	2.0	2.4	2.5
30～49人	3.0	3.0	3.4	3.6
50～99人	5.2	5.4	5.8	6.5
100～299人	9.7	10.1	14.6	14.1
300～999人	21.2	29.5	28.6	42.6
1,000人以上	119.0	47.3	76.0	84.7

資料：経済センサス-基礎調査、経済センサス-活動調査より筆者作成

これをみると、2009年の「1000人以上」で119.0とあるのは特異な値かもしれないが、当然のこととはいえ、常用雇用者が多い、つまり規模が大きい企業ほど、1社あたりの事業所数は多くなっている。さらに、規模の大きな企業ほど事業所数の増え方も大きい。この事業所も、多くは葬儀会館と考えられ、近年増加している葬儀会館の多くは規模の大きな企業によって設置されているとみることができる。

4) 従業者1人あたり売上金額

2014年、2016年、2021年の調査では、従業者1人あたり売上金額が集計されている（表7）。これをみると、14年から一貫して減少しており、14年から16年までの落ち込みは、コロナ禍のさなかにあった21年までよりも大きい。14年以前の状況は不明だが、2010年代の半ばからの下落は明白である。

表7 従業者1人あたり売上金額

	事業所数	従業者数(人)	売上(収入)金額 (百万円)	従業者1人あたり売上 (収入)金額(万円)
2014年	6,813	67,981	1,288,141	1,987
2016年	8,518	77,448	1,305,605	1,805
2021年	9,865	80,484	1,248,784	1,645

資料：経済センサス-基礎調査、経済センサス-活動調査

注：売上(収入)金額、従業者1人あたり売上(収入)金額はそれぞれ前年の結果

5) 単独事業所、本所、支所別の従業者1人あたり売上金額、付加価値額

サービス業において生産性を上げる必要性を説く声は止むことがない。その一例は経済産業省「サービス生産性レポート(2022年3月)」⁵⁾にみることができる。本稿では生産性向上の議論には深入りしないが、生産性の分析指標としてよく利用される付加価値についての統計を取り上げる。付加価値は個々の企業が新しく付け加えた価値のことで、大まかにその企業の売上高から他の企業から購入した額を引いた残りである。定義はさまざまあるが、この調査では、

$$\begin{aligned} \text{(純) 付加価値額} &= \text{売上(収入)金額} \\ &\quad - \text{費用総額} + \text{給与総額} \\ &\quad + \text{租税公課} \end{aligned}$$

粗付加価値額 = 純付加価値額 + 減価償却費で求めている。

単独事業所と、本所と支所の数値を合計したものを比較することで、規模の大小で分けた企業の状況を比較することができると考えて、それぞれの売上高、付加価値額を従業者数で割り、1人あたりの売上金額と付加価値額の経年変化をそれぞれ表8と表9に表した。

売上金額では、単独事業所ではどの年も1200万円台で大きな変化はなかったのに対して、本所と支所の合計は、2012年の2019万円から2014年には2294万円まで上昇し、2016年以降は逆に1800万円台(2016年)、1600万円台(2021年)と大きく下落した(表8)。2021年の数値のうち売上金額は2020年の1年間のものであり、コ

ロナ禍の影響を大きく受けていた時期であるが、下落への転換は、それ以前の2010年代半ばには始まっていたようにもみえる。付加価値額では2012年が単独事業所428万円、本所と支所の合計は445万円とあまり違いがなく、2016年には少し離れたものの、2021年には461万円と468万円とほとんど差がなくなった(表9)。企業の規模の違いによって、大きかった売上金額の差は縮まりつつあり、付加価値額ではほとんど差がなくなっている。ここから、2010年代半ば以降、規模の大きな企業の業績が悪化しているようにも読み取れる。

ただし、この計算にはあいまいな点もある。たとえば2012年調査の売上金額は2011年1年間のものであり、これを割る従業者数は2012年の数値である。表7の1人あたり売上金額と表8の各年の総数の1人あたり売上金額を比較すると、5%ほどの誤差が生じているが、これは表8のこうした問題に起因すると思われる。それでも、大まかな動向をとらえることは可能であろう。

また、全事業所の売上金額から葬儀業の市場規模の推移を明らかにできるとも考えられるが、事業所の総数が図16と合致しないなど実際には問題が多く、この資料だけでは困難である。

6) 単一事業所企業と複数事業所企業の1人あたり売上金額、付加価値額

表8、9とほぼ同じ内容の表であるが、単一事業所企業と複数事業所企業に分けて、従業者

表8 単独事業所・本所・支所別の1人あたり売上金額の推移

	事業所数 (事業所)	従業者数 (人)	売上(収入)金額 (百万円)	従業者1人あたり 売上金額(万円)
2012年総数	6,116	63,738	1,078,930	1,692.8
単独事業所	3,206	26,550	328,021	1,235.5
本所・本社・本店 A	705	16,125	225,223	1,396.7
支所・支社・支店 B	2,205	21,063	525,687	2,495.8
A + B	2,910	37,188	750,910	2,019.2
2014年総数	6,813	67,981	1,288,141	1,894.9
単独事業所	3,388	25,541	314,381	1,230.9
本所・本社・本店 A	544	12,710	184,663	1,452.9
支所・支社・支店 B	2,881	29,730	789,097	2,654.2
A + B	3,425	42,440	973,760	2,294.4
2016年総数	8,518	77,448	1,305,605	1,685.8
単独事業所	3,458	25,303	318,517	1,258.8
本所・本社・本店 A	866	16,894	215,221	1,273.9
支所・支社・支店 B	4,194	35,251	771,867	2,189.6
A + B	5,060	52,145	987,088	1,893.0
2021年総数	9,865	80,484	1,248,784	1,551.6
単独事業所	3,527	23,308	292,583	1,255.3
本所・本社・本店 A	924	17,763	190,774	1,074.0
支所・支社・支店 B	5,414	39,413	765,427	1,942.1
A + B	6,338	57,176	956,201	1,672.4

資料：経済センサス-活動調査、経済センサス-基礎調査より筆者作成

注：事業所数や従業者数は、図16、17と大きく異なる年もあるが、元資料をそのまま利用した

表9 単独事業所・本所・支所別の1人あたり付加価値額の推移

	事業所数 (事業所)	事業従事者数 (人)	付加価値額 (百万円) ※注	事業従事者1人あたり 付加価値額(万円) ※注
2012年総数	6,742	79,896	351,021	439.3
単独事業所	3,206	27,135	116,256	428.4
本所・本社・本店 A	797	17,921	88,740	495.2
支所・支社・支店 B	2,739	34,840	146,025	419.1
A + B	3,536	52,761	234,765	445.0
2016年総数	8,488	79,441	390,131	491.1
単独事業所	3,458	25,796	120,942	468.8
本所・本社・本店 A	949	18,215	89,440	491.0
支所・支社・支店 B	4,081	35,430	179,749	507.3
A + B	5,030	53,645	269,189	501.8
2021年総数	9,727	82,353	384,280	466.6
単独事業所	3,527	23,908	110,441	461.9
本所・本社・本店 A	994	19,116	83,507	436.8
支所・支社・支店 B	5,206	39,329	190,332	483.9
A + B	6,200	58,445	273,839	468.5

資料：経済センサス-活動調査より筆者作成

※注 2012年、2016年は付加価値額、2021年は純付加価値額であるが、両者の算出方法に違いはない

数、売上金額、付加価値額が集計されているので、ここから付加価値率（付加価値額÷売上金額）、1人あたり売上金額、1人あたり付加価値額を計算で求めた⁶⁾。表10が2016年、表11が2021年の数値であるが、売上金額と付加価値額はそれぞれその前年1年間の額である。2016年は1人あたり売上金額が単一1,258万円と複数1,585万円であり、表8の同じ年の数値と比較しても差が小さかった。同年の1人あたり付加価値額は単一と複数でほぼ一致し、付加価値率は単一事業所企業のほうが高かった。これは規模の小さな企業のほうが付加価値の高いサービスを提供していることを表している。2021年も同様の結果が現れており、1人あたりの付加価値額も単一事業所企業のほうが高くなっていた。5)と6)の結果からは、この2つの年の調査では、規模の大きな企業は、小さな企業に比べて1人あたり売上金額は大きいものの、1人あたり付加価値額はコロナ禍以前はどちらも違

いがなく、コロナ禍のさなかでは規模の大きい企業のほうが逆に低くなっていたことになる。

この計算にも、5)と同様の問題がある。ただし、付加価値率だけは、2015年の売上金額と付加価値額を使っており、2015年の数値ということができる。2021年の調査についても同様に2020年の数値といえる。

7) 業種別の立地環境特性

2021年の経済センサス-活動調査では、店舗などの立地特性についても集計している。コロナ禍との関係はあまりないが、地理学として興味深いテーマであるので、ここで確認しておきたい。調査は、地域を大きく、商業集積地区、オフィス街地区、住宅地区、工業地区、その他地区の5つに分類し、商業集積地区はさらに駅周辺型商業集積地区、市街地型商業集積地区、住宅地背景型商業集積地区、ロードサイド型商業集積地区、その他の商業集積地区の5つに分

表10 単一事業所企業と複数事業所企業の売上高、付加価値額（2016年）

	企業等数	従業者数 (人)	売上(収入) 金額 (百万円)	付加価値額 (百万円)	付加価値率	従業者1人 あたり売上 金額(万円)	従業者1人 あたり付加 価値額 (万円)
総数	4,516	78,480	1,161,370	375,451	0.32	1479.8	478.4
単一事業所企業	3,458	25,303	318,504	120,942	0.38	1258.8	478.0
複数事業所企業	1,058	53,177	842,866	254,509	0.30	1585.0	478.6

資料：経済センサス-活動調査(2016年)より筆者作成

注：売上(収入)金額、付加価値額の調査年は2015年

表11 単一事業所企業と複数事業所企業の売上高、付加価値額（2021年）

	企業等数	従業者数 (人)	売上(収入) 金額/経常 収益 (百万円)	粗付加価値 額(百万円)	純付加価値 額(百万円)	付加価値率	従業者1人 あたり売上 金額(万円)	従業者1人 あたり付加 価値額 (万円)
総数	4,658	80,745	1,135,237	419,227	367,917	0.32	1406.0	455.7
単一事業所企業	3,527	23,308	292,583	122,044	110,441	0.38	1255.3	473.8
複数事業所企業	1,131	57,437	842,654	297,183	257,475	0.31	1467.1	448.3

資料：経済センサス-活動調査(2021年)より筆者作成

注：付加価値率、従業者1人あたり付加価値額の計算には純付加価値額を使用した売上(収入)金額、粗付加価値額、純付加価値額の調査年は2020年

類して、全部で9つの地区のどこに事業所が立地しているか、さらにその事業所の従業者数や売上金額を集計している。各地区の定義は、

商業集積地区…用途地域のうち商業地域と近隣商業地域で、商店街を形成している地区。

駅周辺型商業集積地区…JRや私鉄などの駅周辺に立地する商業集積地区。原則として地下鉄や路面電車の駅周辺を除く。

市街地型商業集積地区…都市の中心部（駅周辺を除く）にある繁華街やオフィス街に立地する商業集積地区。

住宅地背景型商業集積地区…住宅地又は住宅団地を後背地とする商業集積地区。

ロードサイド型商業集積地区…国道、主要道路の沿線を中心に立地している商業集積地区。

その他の商業集積地区…観光地や神社・仏閣周辺などにある商店街など上記4つの

区分に特性付けされない商業集積地区。
オフィス街地区…用途地域のうち商業地域及び近隣商業地域であって、上記商業集積地区の対象にならない地区。

住宅地区…用途地域のうち住居地域。

工業地区…用途地域のうち工業専用地域、準工業地域、工業地域。

その他地区…市街化調整区域と、上記の区分に特性付けされない地域。

小売業計、飲食サービス業計、生活関連サービス業計、結婚式場業、葬儀業について比較できるように並べ、図18に示した。葬儀業では、他業種に比べて駅周辺型や市街地型の商業集積地区には事業所が少なく、住宅地区、工業地区などに多い傾向がみられる。さらに事業所の売上金額による比較や従業者数による比較も可能だが、葬儀業では事業所数との大きな違いはみられなかった。

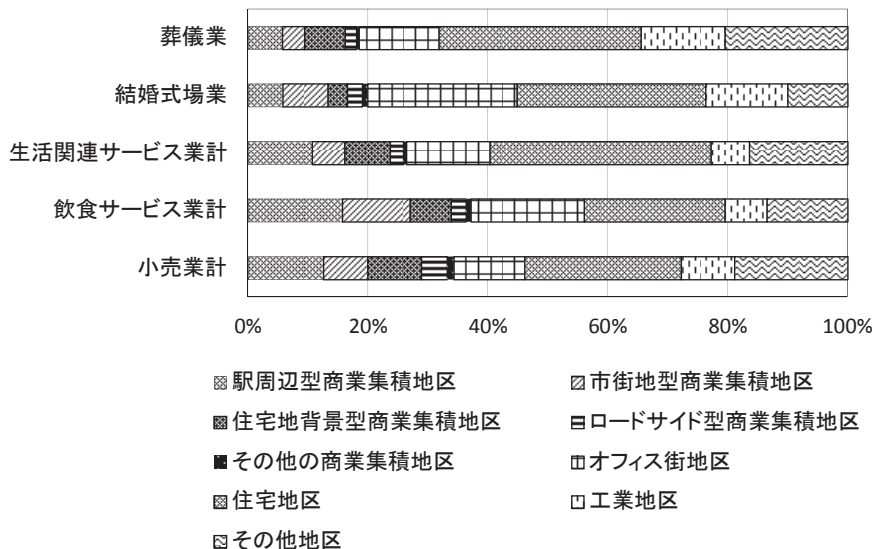


図18 業種別の立地環境特性

資料：経済センサス-活動調査(2021年)

注：生活関連サービス業計には、リネンサプライ業、火葬・墓地管理業を除く

IV. 考察

ここまで、主に2000年以降の葬儀の変化と、コロナ禍による葬儀の変化を分け、両者の関係を明らかにしていくことを目指して、まず政府統計の調査結果を検討してきた。そのなかで、2010年代半ばに1つの転換点があった可能性が示された。この時期、表8にあるように、とくに規模の大きな企業の従業者1人あたりの売上金額が下落しはじめた。図17では、葬儀業従業者数が2014年をピークとして減少に転じており、2016年の従業者数は、コロナ禍のさなかにある2021年の従業者数とほとんど変わらなくなっていた。2016年の従業者数のここまでの減少の要因は明らかではないが、図3からは、事業所数とともに大きく伸びていた正社員以外のパート・アルバイトの従業者数が横ばいに変った時期が2010年代の半ばだったことがわかる。図9をみると、取扱件数の減少によって下落した時期もあるものの、正社員の1人あたり売上高は、ほぼ上昇を続けていたが、2010年代半ば以降は直線的な下落となっている。

このかん、葬儀が小規模化・簡素化していると言われ、葬儀1件あたりの売上高(図7)も一時期を除いて長期にわたって下落を続けてきた。それでも、2010年代の半ばまでは規模の大きな企業の従業者1人あたり、あるいは正社員の1人あたり売上高は上昇していた(表8、図9)。いっぽう、2010年代に入って、パート・アルバイトなど正社員以外の従業者の割合は正社員とほぼ同数となり、それ以降、両者の割合は変化がなかった(図4、5)。これはあくまでも仮説であるが、2010年代半ば以降、たとえば人手不足から採用できなくなった、あるいは業務管理上の理由などによって、それまで増やしてきたパート・アルバイト従業者を大きくは増やせなくなってしまった。葬儀1件あたりの売上高が下落するなかで、増加する取扱件数に対応し、さらに多様化するサービス提供を行う

ために、正社員以外の従業者を増やして対処するという手法は、この時期から困難になっていたのではないだろうか。

こうした業績の苦境に追い打ちをかけたのが、コロナ禍であった。したがって、これまでのやり方を続けるだけでは、コロナ禍による業績の悪化は回復できたとしても、それ以上の改善は難しい。

こうしたときに考えられることの1つは、企業の規模拡大であろうが、近年、葬儀業においても企業買収が話題になっている。2023年には東証スタンダード上場の葬儀会社ティアが、大阪府内と愛知県内の地域の有力葬儀社を買収し⁷⁾、2024年には東証プライム上場で傘下に業界大手の公益社などの葬儀社をもつ燦ホールディングスが、東証グロース上場のきずなホールディングス(現在は上場廃止)を買収した⁸⁾。

ただ、従業者1人あたりの売上金額や付加価値額をみると、近年は規模の大小によって、これらの金額に大きな差がつくとは言えなくなっている。これがコロナ禍によるものか、そうではないのかはまだよくわかっておらず、今後の検証が必要だろう。企業買収の成否も明らかになるのはこれからであり、さらに統計データその他の検討を続けていく必要がある。

また当然のことながら、葬儀は依然として地域差も大きく、その地域の葬儀慣習によって葬儀業の事業運営もさまざまであろう。各地の取り組みとその成果を明らかにしていくことも重要である。

注

- 1) のちに透明のものも登場したが、当初は袋越しには中を見ることができず、故人との対面もできなかった。
- 2) 高瀬(2021)は、グリーンケアを「喪失の悲嘆からの回復」とし、葬儀の小規模化、簡素化によってグリーンケアに関して外部からのサポートが得難い状況が生まれることになるだろう、と述べている。

- 3) 総務省統計局「(参考) 経済構造統計の体系的整備の進展」(https://www.stat.go.jp/data/e-census/guide/about/sankou_keizai.html) (2024年11月9日閲覧)
- 4) 2010年基準の数値が公開されたのは、2016年1月からである。
- 5) 経済産業省「サービス生産性レポート(2022年3月)」(<https://www.meti.go.jp/press/2021/03/20220328005/20220328006-1.pdf>) (2024年11月29日閲覧)
- 6) 2014年経済センサス-基礎調査では、付加価値額は調査されていない。
- 7) 株式会社ティア「株式会社NSSK-VV3及び株式会社NSSK-TTの株式の取得(子会社化)完了に関するお知らせ(開示事項の経過)」(<https://ssl4.eir-parts.net/doc/2485/tdnet/2365826/00.pdf>) (2024年11月10日閲覧)
- 8) 燦ホールディングス株式会社「株式会社きずなホールディングス(証券コード:7086)の株券等に対する公開買付けの結果及び子会社の異動に関するお知らせ」(<https://www.san-hd.co.jp/files/news/management/20280828.pdf>) (2024年11月10日 閲覧)

参考文献

- 加藤和暢(2011) サービス経済化の地理学をめざして. 経済地理学年報57, 320-335.
- 金沢佳子(2021) コロナ禍が葬送に及ぼした形式と意識の変化. 比較家族史研究35, 132-156.
- 金沢佳子(2023) コロナ禍の葬送: 地方紙「おくやみ」欄: 2020年~2022年夏の考察から. 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書378, 27-43.
- 金沢佳子(2024) コロナ禍による葬送の変容: 茨城新聞を中心に, 近隣県紙「おくやみ」欄調査から. 茨城県近現代史研究8, 89-101.
- 高瀬頭功(2021) 新型コロナウイルスがもたらした寺院活動への影響: 寺院向けウェブ調査より. 宗教と社会貢献11-1, 31-52.
- 高瀬頭功(2022) コロナ禍における葬送儀礼の変化とその影響. 宗務時報126, 50-63.
- 田中大介(2022) COVID-19と葬儀業. 浮ヶ谷幸代他編『現代日本の「看取り文化」を構想する』東京大学出版会, 347-367.
- 田中大介(2023) オンライン葬儀の需要と可能性: 情報化による職能実践と儀礼実践の変容(その2). 冠婚葬祭総合研究所論文集(令和4年度), 63-71.
- 玉川貴子(2024) 「新型コロナウイルス」という言説と都市部の葬儀・火葬の問題. 冠婚葬祭総合研究所論文集(令和5年度), 74-85.
- 藤岡英之(2018) 喪家による葬儀の場所選択の変容—1990年代以降における「下野新聞」お悔やみ欄の分析から—. 人文地理70(1), 49-71.
- 藤岡英之(2019) 葬儀の場所の変化とその社会的背景. 国士舘大学地理学報告27, 23-36.
- 藤岡英之(2023) 葬祭業のサービス産業化と葬儀会館の立地拡大. 国士舘人文科学論集4, 29-54.

2023年度 国士館大学大学院 地理・地域論コース 修士論文要旨

横浜中華街のイメージの変遷について

—新聞記事のテキストマイニングによる分析を用いて—

潘 夢

日本が観光立国へと歩を進める中、多くの地域が地域振興を目指し、従来のイメージを再構築する必要に迫られている。本研究対象としての横浜中華街は地域の発展と文化的特徴を理解する上で貴重な事例となっている。現在の横浜中華街は日本と中国の文化交流の重要な象徴とされ、横浜市の観光名所としても有名である。百年前の横浜中華街は「南京町」と呼ばれ、外国人居留地の一角に過ぎなかった。その百年間に、イメージに大きな変遷があった。しかしながら、現在に至る横浜中華街の変遷に関する研究はまだなされていない。そのため、この街のイメージの変遷に関する研究は十分に意味があると考えられる。

本研究の目的は、横浜中華街のイメージが過去一世紀にわたり、どのように変化してきたのかを明らかにすることにある。また、横浜中華街が初期のマイナスなイメージを脱却し現在の観光名所へと変貌を遂げた過程、その過程における重要な時点や、地域の文化的・社会的・経済的要因について明らかにする。研究方法としては、朝日新聞と読売新聞のデータベースを利用した。これらの新聞記事を対象として、テキストマイニングと言説分析を組み合わせたアプローチを採用し、横浜中華街のイメージが各時期にどのように形成され、変化してきたかを詳細に分析した。

その結果として、横浜中華街のイメージは以下のような5つの段階に分けられることがわかった。第1期(1888-1910)では、当時の清朝中国の後進性と中華街住民の低い素養が原因で、中華街は外部から鄙びた視線で見られていた。ここは阿片の温床であるとの悪印象があった。それと同時に、地元の華僑は定期的にさまざまな祝祭を開催しており、異国情緒が溢れていた。第2期(1911-1944)では、中国国内の辛亥革命などの政治的事件が横浜中華街内の革命的混乱を引き起こし、当時の新聞では、地元の華僑が革命の勝利を祝う様子が頻繁に報じられた。第3期(1945-1970)では、戦後初期の混乱によって横浜中華街の印象は歴史上最悪の状態に達した。外的な要因として、横浜は当時重要な国際港であり、日本が戦後すぐに港の管理を行えない状況で、様々な麻薬や密輸品が船で中華街に運ばれた。また、当時アメリカ軍が横浜地区を管轄していたため、中華街は戦勝国として管理される必要はなかったものの、アメリカ軍の影響を受けた。外人のバーが街内に大量に開店し、関羽廟周辺にも多くのバーがあった。また、街の内部の政治思想の対立により、地域のイメージを変える努力もできなかった。

しかしその後イメージは変化し始めた。第4期(1971-1990)は観光の萌芽期である。1960年代にアメリカ軍が撤退し、横浜中華街の近くに路面電車が開通し、隣接する元町との一体化計画が進められたことで、少しずつイメージが改善された。この時期に観光業が芽生え始めたが、1972年に中日が外交関係を回復した後、中国ブームが爆発し、横浜中華街は観光地として広く知られるようになった。その後、1980年代後半に中国国内の改革開放に伴い、多くの中国人が中華街に定住した。さらに、街内部の政治思想の対立が緩和され、観光開発期に入った。第5期(1991-2022年)は、観光イメージの定着期と言える。この時期に横浜中華街では、インフラ面での発展が進み、関帝廟の再建や様々な中国風格の建築物の建設が行われた。これにより、中華街は中華主題のテーマパークのような雰囲気形成し始めた。多くの建築物が中国風に改装され、中国風のトイレや門が導入された。また、横浜中華街の地域振興団体と横浜市政府は、中華街の各種伝統文化活動を重視している。例えば、中国の伝統的な春節や、2004年には媽祖廟の建立を祝って媽祖祭が開始された。これらイベントと建物要素が組み合わせられている。これにより、横浜中華街の中国風のイメージが一層強化された。

2023年度 国士舘大学 地理・環境コース 卒業論文題目

氏名	題目
小林 竜也	経営移管後の第三セクター鉄道の利用促進とマイレール意識の醸成 —えちごトキめき鉄道を事例として—
西原 直哉	収穫体験型観光農園を実施する農家の経営実態 —神奈川県湘南地域における「イチゴ狩りを事例に」—
小松 海聖	地方の鉄道における地元住民からの認識 —銚子電鉄とJR総武本線・成田線を事例に—
関根 康介	千葉県印西市における中・大型哺乳類の分布と獣害対策
小林 丈留	手賀沼流入河川魚類群集の分布と環境条件
萩原 龍斗	神奈川県横須賀市におけるコンビニエンスストアの立地地点と取扱商品
越場 勇斗	プロ野球独立リーグの一球団の事業構図とスポンサー企業との連携 —神奈川県フューチャードリームスを事例に—
畠山 敬多	地域鉄道の現状と課題—滋賀県近江鉄道を例に—
堀野 滉朗	甲府で発現した強風について—周辺地域にも着目して—
大森 雄義	温浴施設の立地特性と廃業後の土地利用—広島県広島市を例に—
奥山 棕太	千葉県勝浦市と鴨川市における夏季の気温特性
海老澤 桃菜	地域資源の活用とリノベーションまちづくり—埼玉県草加市を事例に—
中山 英明	神社周辺住民にみる信仰形態の差異 —群馬県伊勢崎市小泉町小泉稻荷神社を事例に—
遊佐 恵多	北関東におけるビジネスホテルの立地特性
田島 規覇也	千葉県栗山川中流域の湿地群における訪花昆虫群集とその環境条件
内木 史也	2005～2024年における店舗別、都道府県別にみた百貨店の立地変化
串田 紘一	土地被覆が水質に与える影響について—利根川水系大堀川・大津川を比較して—
内倉 彩希	空中写真を用いた海岸線の変化抽出—5つの地域の砂浜海岸に着目して—
小泉 敦哉	長野県におけるコワーキングスペースの立地展開
森山 愛	飛騨高山における朴葉味噌の商品化と流通ネットワーク
國末 悠真	デザインマンホールに用いられるモチーフとその地域性
本多 剣士	茨城県中南部における海浜植生の成帯構造とその変遷 —とくに東日本大震災前後に着目して—
中西 広大	川口市におけるスーパーマーケットの立地展開
古村 光世	長野県飯山市戸狩温泉スキー場における積雪と気象条件からみた雪崩の発生
渡辺 康太	霞ヶ浦の湖風が茨城県土浦市の気温分布に与える影響
奥澤 瑛実子	土砂災害危険箇所の曝露人口の推移—鳥取県を例に—
北澤 太智	函館本線廃止に伴う余市町とその周辺地域への影響
青木 悠	近年の韓流ブーム下での「新大久保コリアタウン」の変容とSNSの関連性
葛西 智哉	女性向けファッション雑誌と街のイメージの関係性について—渋谷を例に—

大澤 美帆璃	高輪ゲートウェイ駅開設に伴う駅周辺開発が土地利用変化に及ぼす影響
飯島 麻奈美	東京都新宿区戸山二丁目における都心の限界集落と世帯構成の変化
松下 将宗	微地形が河川の氾濫による浸水に与える影響—雄物川を例に—
岡本 悠佑	世界遺産登録に関する住民意識について —「古都鎌倉の寺院・神社ほか」を事例に—
齊藤 大己	戸田市における認可保育所の分布特性
田口 滉太	東京都葛飾区の江戸川付近におけるアブラコウモリの分布と環境条件
長島 あんり	千葉県の地域別に見る降水特性
伊佐 凜太郎	旭川市における家具産業の縮小と現況
関根 駿太	温暖化が及ぼす台風と生物季節の関係 —エルニーニョ・ラニーニャ現象に着目して—
高見 青吾	「インスタ映え」する風景画像の特性—鎌倉市の観光地を事例に—
大辻 寛也	複数要素から分析した斜面崩壊の特徴について —令和元年台風19号における宮城県丸森町を事例に—
塚原 寛之	横浜DeNAベイスターズのイメージと横浜のイメージとの関連性について
鈴木 遥斗	東京都における風俗宿泊施設の立地分析—JR山手線駅周辺エリアを中心として—
永田 翔大	歴史的町並みの景観保存と住民意識 —栃木市嘉右衛門町重伝建地区を事例として—
山海 世鼓	茨城県つくば市におけるカフェ・喫茶店の立地展開
田中 良憲	神奈川県愛川町におけるエスニックビジネスの分布と展開
上田 恒太	神奈川県海老名市における怪異と地蔵の分布および境界性
千葉 柁英	神奈川県鎌倉市におけるコインパーキングの立地展開と料金設定
西山 真由	神戸における多文化共生の変遷—雑居地内の宗教施設に着目して—
綾部 勘太	着地型観光を通じた景観保存と住民意識—茨城県桜川市真壁町を事例として—
井田 海斗	埼玉県都幾川における河辺植生とその環境要因
長谷川 裕亮	東京都大田区における飲食店の立地展開
伊藤 心	地域振興における朝市の位置づけ—「葉山マーケット日曜朝市」を事例に—
島 颯斗	JR北海道 函館～札幌間における鉄道変遷—時刻表検証を用いて—
花谷 将基	プロ野球来場者の購買行動における消費金額と属性との関係 —エスコンフィールドHOKKAIDOと神宮球場を事例に—
村河 希望	千葉県東部夷隅地域における海食崖侵食に関する研究
長島 由香	樹木の生育の違いから評価する微地形ごとの地表環境や地形プロセス
長谷川 拓海	完新世荒川扇状地の発達過程の追跡—メッシュマップを用いた解析—
吉田 太郎	池袋チャイナタウンにおける旧・新華僑のエスニックビジネス —コロナ期間を通じた変化に着目して—
山口 舞緒	東京（池袋）、名古屋（椿町）、大阪（日本橋）における趣味の商業集積の特徴と 店舗の分布について
會澤 智弘	GISを活用した神奈川県と東京都の潜在的な水害脆弱地域の抽出

- 井上 輝星 埼玉県久喜市鷺宮地区における屋敷林の分布とその変遷、構成樹種、及び住民意識について
- 鈴木 舜也 下北沢の古着屋の立地展開と特性
- 落部 功大 ウクライナ・カホフカダム決壊に伴う浸水被害と農業への影響
—衛星画像と正規化水、植生指数を用いた分析—
- 大橋 鋼 多摩丘陵における大規模宅地造成—時間的・空間的の変化に着目して—
- 平本 亜由香 日本の長期的な気温の変動について
- 大橋 一真 土砂災害被害建物の建築年代の分布と土砂災害警戒区域の相関
- 坂田 洋輔 河床縦断図からみた日本の地形区の特徴
- 関野 寛太 荒川河川敷の変遷 1976年～2022年を比べて
- 平野 紘基 千葉県における百円ショップチェーンの立地展開
- 鈴木 紀生 ご当地駅メロディに使用される楽曲の地域性について

国士舘大学地理学報告 No.33

2025年3月10日 印刷

2025年3月20日 発行

編集 加藤 幸治

発行 国士舘大学地理学会

会長 内田 順文

〒154-8515 東京都世田谷区世田谷4-28-1

国士舘大学地理学教室内

TEL 03(5481)3232 (統合学部事務課文学部担当)

印刷 株式会社 文成印刷

〒168-0062 東京都杉並区方南1-4-1

TEL 03(3322)4141

<表紙写真の説明>

武佐岳を奥に広がるそば畑 (北海道中標津町)

2022年9月 加藤幸治撮影.